

- 四。見を用いて什麼をかなさん。古人も一法を見ざる即ち如来とも申されてあるから、その様な見など云ふ餘計なものはあつた處で仕方のないものである。
- 五。釋迦老子漏逗少なからず。此の老師は老大師と云ふほどのことで尊敬の意味に用ゐたものである。餘計なことは説かぬものを。餘りに老婆心切であると申ししたものを見へる。
- 六。若し不見を見れば等。見も不見も既に客觀的存在を持つてゐないものであるからして、勿論可觀的のものではないが、然し假に此の眼で以つて見得らるべきものとしても、不見の處を見ると云ふならば、それはハヤ不見の相とは云はれない筈である。何となれば見得られるからのことである。
- 七。咄。此の老人は餘計なことをメチャクと饒舌る老人であると叱する。
- 八。甚の閑工夫あらん。この急がしい世の中に何を詰らんことを議論して居るのであるぞと云ふのである。
- 九。山僧をして兩頭三頭と作し去らしむべからず。見ると云ふたり、見ぬと云ふたり。その様な面倒な御相談は三面か一面の觀音にでも持ちかけられたが宜しからう。
- 一〇。若し我が不見の處を見ずんば自然にものにあらず。これは見不見の結論で已に不見の處を見ることが出来ないとしたならば見の性なるものは物に屬したもので、即ち客觀的存在でないことはあきらかなことである。
- 一一。什麼の處に向つてか去る。こゝ世尊に責め付けられては穴へでもはいるより仕方はあるまいと云ふのである。
- 一二。鐵槌を釘つに相似たり。如何にも嚴びしい隙間のないおさとしである。
- 一三。咄。然し餘りにくどくどしいと咄破する。
- 一四。云何が汝にあらざらん。此の一句が本則の眼目であつて、雪竇が楞嚴經に依つて頌を作られたのも此の一語が目的であるのである。汝は即ち汝の自性で、之れが宇宙山法界寺の御本尊であるから、眞如とも法性とも佛性とも大我とも、這箇とも那一物とも眞我とも天真身とも色々の尊號が奉られてある。畢竟外を逐ふて求める吾々の凡情を打破して本來の家郷たる自己を反省して其の眞性を開悟させよう云ふ大悲心から、佛が阿難や吾々に色々婆心を施こして下されたものである。

- 一五。牛頭を案して草を喫せしむ。殺された牛の頭ばかりのものに幾ら新鮮な草を食はせようとしても、決して食ひ得られるものでないと云ふので、釋尊が如何に御心切に嚙んでふくめるやうな御説法をなされたも。機縁の純然せぬ阿難には到底開悟が出来るものでないと云ふのである。
- 一六。更に什麼の口頭の聲色をか説かん。元より自信自省するより外はないものであるから、幾程口を酸ばくして説かれたとて所詮説き終ふせるものでもなければ又其れに依つて悟り得られるものでもないのである。
- 一七。爾と説き我と説く總に没交渉。爾だの吾れだのと云ふがハヤ抑もの間違ひである。
- 一八。打つて云く選つて釋迦老子を見るや。此の様な説法の言葉の上では何としても釋迦老子は見得られるものでないから、此の棒頭下に謹んで相見をするが宜しいと云ふので、ドンと吾々に釋尊を紹介して下されたところである。
- 一九。争奈せん古人肯へて承當せざることを。折角の御説法であつたけれども古人阿難尊者は此の時眞の釋尊に相見することは出来なかつたのである。
- 二〇。打つて云く脚眼下自家に看取せよ。古人は偕て置き人人各自に能く足下に氣をつけるが宜しいと云ふのである。
- 二一。選つて會すや。どうぢやな、わかるかなと重ねくの親切である。

第三節 本則提唱

楞嚴經云、吾不見時、何不見吾不見之處。下語云、泥裏洗土塊。
 若見不見、自然非彼、不見之相。下語云、漏道不少。

第五節 頌

全象全牛譬不殊。模壁作什麼。半開半合。扶維。從來作者其名摸。西天四七唐土二。自少在。猶如今要見黃頭老。唯這老胡。瞎漢。刹刹塵塵在。半途。脚跟下踏過了也。更教山僧說什麼。驢年還曾夢見麼。

【讀方】全象全牛譬は殊とせず。半邊の瞎漢。半開半合。扶維模壁して什麼をか作さん。一刀兩斷。從來作者共に名摸す。西天四七唐土の二三。天下の老和尚麻の如く粟に似たり。猶ほ自ら少くこと有り。如今黃頭老を見んと要すや。唯この老胡。瞎漢。脚跟下に在り。刹々塵々半途に在り。脚跟下踏過了れり。更に山僧をして什麼をか説かしめん。驢年にも還つて曾つて夢にも見んや。

- 【字解】一。半邊の瞎漢。半盲人の片目であらうと云ふのであるが、一本には此の下語がないと云ふことである。
- 二。半開半合。既に見不見と云ふのであるから、設ひ全象全牛と申したからとて皆半分だけのことに相違あるまい。
- 三。扶維模壁して什麼をか作さん。盲人が垣によりそうたり、壁を模つたりするやうに、いくら搜り廻つたところで何の所詮もないことであらう。
- 四。一刀兩斷。雪寶が見不見共に一刀兩斷して醫殊ならずと出られたところば如何にも痛快である。
- 五。西天四七唐土の二三天下の老和尚麻の如く粟に似たり。從來名摸し來つた連中は西天唐土數へきれない位に多いことである。
- 六。猶ほ自ら少くこと有り。其中へは拙稱もはいつて居りますぞと雪寶御自身の申し出である。開悟も勿論其の一人であらう。

- 七。唯。其のやうなつむじのまがつた毛唐人を見て何にするぞと云ふのである。
- 八。這の老胡。あの天然の老耄に相見して何にしやうと云ふのである。
- 九。瞎漢猶が脚跟下に在り。ウム此のあき盲目め、それ黄面の老子が貴公の脚下に寝そべつて居らるゝぢやないか、踏みつぶされるなよと云ふのである。
- 一〇。脚跟下踏過了れり。刹々塵々などと遠いことやうに云ふけれども、それ足下ですり差ふた。其の佛身を見隠つて何とするぞと云ふのである。
- 一一。更に山僧をして什麼をか説かしめん。盡大地到處佛土佛身にあらざるはないのに、それを強いて半途に在りなどと云ふ外道に向つては、いくら説いて聞かせたとて所詮のないことであるから、餘計なことを説くまでもあるまいと云ふのである。
- 一二。驢年にも還つて曾つて夢にも見んや。驢と云ふは十二支の中にはない年であるから、未來永劫いつまでたつてもと云ふことである。雪寶のやうな考へを以つて居るものは盡未來際いつの世にも眞佛に遇ひ奉ることは叶はぬであらうと愈々本分の地を示したものである。
- 【講義】全象全牛譬殊ならず。全象と云ふは涅槃經に出てある譬喩で、涅槃經第三十二卷獅子吼品に、『一切の衆生佛性を退かず之れを名けて有となす。決定して得るが故に、譬へば王者の一大臣に告ぐるか如し。汝一象を牽いて以つて盲者に示せと。時に彼の衆盲各々手を以つて觸る。王之れに問ふて曰く、象は何の類とかなすと。其の牙に觸るゝものは即ち象の形は蘆菴根の如しと言ひ。其の耳に觸るゝものは象は箕の如しと言ひ。其の頭に觸るゝ者は象は石の如しと言ひ。』

其の鼻に觸るゝものは象は杵の如しと言ひ。其の脚に觸るゝものは象は臼の如しと言ひ、其の脊に觸るゝものは象は床の如しと言ひ。其の腹にふるゝ者は象は瓮の如しと言ひ。其の尾に觸るゝものは象は繩の如しと言ふ。善男子よ。彼の衆生の如き象の體を説かず。善男子よ。王は如來の正徧知に譬ふるなり。臣は此の經に喩ふ。象は佛性に喩ふ。盲は一切無明の衆生に喩ふ。是れ諸の衆生佛の説を聞き已つて、或は是のごとき言を作す。色は是れ佛性。何を以ての故に、是の色は滅すと雖も次第に相續す。是の故に如來の三十二相を獲得すと。如來の色は常なり。如來の色は常に不斷なるが故に、乃至受想行識もまた是くの如しと。善男子よ彼の盲人の各々象を説いて實を得ずと雖も、象を説くにあらざるが如し。佛性を説く者も亦復是くの如し。六法に即するにあらず六法を離れず。是の故に我れ説く衆生の佛性にあらず色を離れず」と一切衆生の全く佛性を見ることの出來ぬのもそれと同じやうなものぞと申してある。六度集經にも盲人象を見るの譬喩が出て居るが、この王は鏡面王と名けられて居る。全牛と云ふは莊子養生篇に見へてをること、彼の文には「庖丁文惠君のために牛を解く。君曰く嘻善哉、技蓋し此に至るか、庖丁刀をすて、對へて曰く、臣の好むところは道にして技にすゝむことなり。始め臣が牛をとくの時、見るところは牛にあらざるものなし。三年の後には未だ嘗つて全牛を見ず」と見へて居る。これは、昔庖丁と云ふ牛の料理をすることの名人があつた。此の人が刀を振つて牛をきりさく時

には、只其の心のまゝであつて、大根を切るが如く豆腐を切るが如くに更に眼中に全牛を見なかつたと云ふことである、サテ此の涅槃經の全象を見ると云ふのも、亦莊子の全牛を見ぬと云ふのも、等しく其の道の奥義に達したものゝやうであるけれども、既に見るの見ないと云ふことがあつて見れば、即ち譬喩ならずで、譬と云ふのは眼病の人が有りもせぬのに空中にチラ／＼と花のやうなものを見ることであるから、丁度眼病の人が空中に花を見るの見ないと云ふのと何等の區別があらうぞと云ふのである。從來作者共に名摸す。昔しから今日に至るまで上下幾千年の間、作者とも云はれたやうな人が自とか他とか見とか不見とか云ふ色々の名前をつけて様々の形を想像して居ることであるが、之れは誠に詰らないことである。如今黃頭老を見んと要せば。黃頭老は即ち釋尊のことで、敎家では、金身とか或は金色の佛身とか色々ありがたそうなることを云ふが、吾が宗では、黃頭老又は黃面の老人など、申すことで、若しも諸君があつた印度の釋迦老人を見やうと思ふたならば、そのやうな見の不見のと云ふ處にうろついて居るやうなことではいかないから、其處を好く心得へて居らねばならぬ。刹々塵々半途にあり。刹は刹土と熟して即ち三千大千世界とか又は佛土とか云ふことで、塵は多數の意味であるから、彼の梵網經の中に、我れ今盧舍那方に蓮華臺に座す。周匝せる千華上に復千の釋迦を現す。一華に一億の國ありて一國に一釋迦ありと申してあるが、これと同じやうに、宇宙法界には、百千萬億那由陀阿僧祇の無量無數

の世界があつて、其の一つの世界に各々佛陀世尊が在しまして其の國の衆生を濟度して居られると云ふことをきけば、如何にも眞の佛身佛土を拜見したやうに思ふであらうが、それは皆報身應身と申して、方便濟度の佛身に過ぎないのであるから、眞の法性法身の眞佛に望むれば、纔かに半途に過ぎないのでまだ一前途は遠慮であるぞと謠ひ收めたものである。然らば眞佛は十萬億土の遙か遠方、或は百千萬億土の向ふであるかと云ふに、脚跟下蹉過了り。うつかりすると眞佛眞身を踏み殺してしまふかも知れないぞと申されてある。皆さん是れは何と云ふ意味でありましやう。お互に人のことではないから。よく參究して見ねばなりませぬぞ。

第六節 頌評唱和譯

全象全牛譬は殊とせず。衆盲象を摸つて各々異端を説く。涅槃經に出でたり。僧あり仰山に問ふ。和尚人の禪を問ひ道を見ても便ち一圓相をなして中に於いて牛の字を書き意いづくにか在る。仰山云く、這箇也た是れ閑事、忽ちに若し會得せば外より來らず。忽ちに若し會せずんば決定して識らざらん。我れ且らく爾に問ん。諸方の老宿爾が身上に於いて那箇か是れ爾が佛性と指出する。將復た語底が是か。是れ不語不默底の是なることなしや。將復た總に是か。將復た總に不是か。爾若し語底は是なりと認めば盲人の象尾を摸つては如し。若し默底が

是と認めば盲人の象尾を摸つては如し。若し不語不默底は是なりと認めば盲人の象鼻を摸つては如し。若し物々都て是なりと道は盲人の象の四足を摸つては如し。若し總に不是と道は盲人の象を抛つて空見に落在す。是の如く衆盲の見るところ只象の上に於いて名邊差別す。爾好からんことを要せば切に象を摸ること莫れ。道ふことなけれ見覺是なりと。亦道ふことなけれ不是と。祖師の云く、菩提本樹なく明鏡また臺なし。本來無一物争かか塵埃に染むることを得ん。又云く、道に本と形相なし、智恵即ち是れ道。此の見解をなせば是れを眞の般若と名くと。明眼の人は象を見て其の全體を得、佛の見性の如きも亦然り。全牛のことは莊子に出でたり。庖丁牛を解くに。未だ嘗つて其の全牛を見ず。理に順がつて解く。刃を遊ばしむること自在なり。更に手を下すことを須いす。纔かに目を擧するの時、頭角蹄肉一時に自ら解けたる。是くの如くすること十九年。其の刃利きこと新たに剛より發するが如し。之れを全牛と謂ふ。然も此くの如く奇特なりと雖も、雪竇道く、たとひ此くの如くなることを得るも、全象全牛眼中の譬と更に殊ならずと。從來作者共に名摸す。直ちに是れ作家なるも也た裏頭に去つて、摸索不着。迦葉より乃至西天此土の祖師、天下の老和尚、皆只是れ名摸す。雪竇色截して道ふ。如今黃頭老を見んと要すや。所以に道ふ見んと要せば即ち便ち見よ。更に尋ね覓めて方さに見んと要せば則ち千里萬里なり。黃頭老は乃ち黃面の老子なり。爾如今見んと要すや。刹々塵々半途に在り。尋常道ふ。

一塵一佛刹、一葉一釋迦。盡三千大千世界の所有の微塵、只一塵の中に向つて見るも、恁麼の時にあたつて猶半途に在り。那邊更に半途の在る在り。且らく道へ什麼の處にか在る。釋迦老子尙自ら知らず。山僧をして作麼生か説得せしめん。

【字解】一。道箇または是れ閑事。これは仰山の慧寂禪師が一僧の問いに應じて答へられた言葉で、元來人より修へらるるのでもなければ人に傳へ得らるべきものでもないから、都べて之れ閑事である。

二。道ふことなけれ見覺是と。見は見聞、覺は覺知であるから、是の見聞覺知の上では是の不是のと論ぜば却へて没交渉であると云ふのである。

三。菩提本樹なく。これは六祖大師の偈で人口に膾炙して居る有名なことであるから申すまでもなからう。

四。道に本形相なし。六祖壇經の般若部の意に依つて圓悟が自作の偈語をつけられたのである。

第九十五則 長慶三毒

第一節 垂示

垂示云。有佛處不得住。住着頭角生。無佛處急走過。不_レ走過草深一丈。直饒淨裸裸赤灑灑事外無_レ機機外無_レ事。未_レ免守株待_レ兔。且道總不_レ恁麼。作麼生行履。試_レ舉看。

【讀方】有佛の處住することを得_レざれ。住著すれば頭角生ず。無佛の處急に走過せよ。走過せざれば草深きこと一丈。直饒淨裸々赤灑々として事外に機なく機外に事なきも、未だ免れず株を守つて兔を待つことを。且らく道へ總に不_レ恁麼ならば什麼生か行履せん。試みに舉_レ看よ。

【講義】金剛經の中に謂ゆる佛法と云ふは即ち佛法にあらずと説いてあつて、吾々が此れは佛である此れが法であると思ふて居るものは、ハヤ佛でもなく法でもないのだから矢張り一つの迷妄である。迷悟染淨皆之の通りで迷にとりついて居るのが凡夫で、悟に取りついて居るのが聖者であるが、その又凡夫だの聖者だのと云ふて居るのも、又一つの迷妄で即ち本分に背いたものと申さねばならぬ。花が咲くのが迷であらうか悟であらうか。紅葉が散るのが迷であらうか悟であらうか。日の照るのは是れ迷であらうか悟であらうか。水の流れるのは是れ迷であらうか悟であらうか。

うか、火が物を焼くのは是れ迷か是れ悟か、水が物をうるほすのは是れ凡夫の仕事か聖者の仕事か、かやうに觀じ來れば總に沒交渉であり無關係である。花は迷悟を離れて咲き、月は凡聖を離れて照る。迷に取りつくも勿論迷ひであれば、悟に取りつくも又迷ひであつて、萬事何事によらず、此れと一つ取りつく處があればソレハ皆本分に背いてその徳を汚したものと云はねばならぬのである。そこで有佛の處に住することを得ず、佛ちや法ちや菩提ちや涅槃ちやと云ふ抹香臭い處に住と留まり着いて居つてはならぬ。住着すれば頭角生ず。接化度生の方便としては、或は佛と説き法と説き、菩提と説き涅槃と説くこともあるけれども、さりながら、暫時の間もそこに住着することはならぬ。如何に清澄なる水と雖も暫し止まれば忽ちにして、孛を生ずると云ふのではないか。若し暫時たりとも住着して見よ、忽ちにして其れがために修行とか證悟とか申すところの高尙なる頭角を生じて、夫れが金鎖玄關となり、佛病祖病となりて容易に平癒することが出來ない大病人となつてしまうことであらう。無佛の處急に走過す。然らば無佛の處ならば好いかと云ふに、然らず、そこも又急に走過せねばならぬ。走過せざれば草深きこと一丈。若しもその佛も法もないと云ふ一切を掃蕩し盡したところにうろついて居たならば、其の掃蕩しつくした立ち場に於いて、更に自分の自己を埋却するところの草蔓々裡に落入つてしまうことになるのである。たとひ淨裸々赤漉々として事外に機なく機外に事なきも未だ免れず株を守りて兔をまつことを。

然らば其の有佛無佛の處、迷悟凡聖の處を全く遠離した所が佛祖の立場であるかと云ふにさうではない。然らば淨裸々赤漉々と一切總てを放抛して事外萬境差別の事相もなく、靈明の心機もなき、心境共に絶した其の境界が本分の眞際であるかと云ふに、それはハヤ株を守つて兔を待つやうなもので、彼の柳の下には何時でも泥鰌が居るものと思ふて居ると少しもゑらぶところはないのである。事外に機なく機外に事なくと云ふは、事は事相事物で即ち客觀のすべての境界と云ふこと、機は心の作用であつて、即ち主觀のことであるから、心の外には境はなく境の外には物はないと云ふ境智冥合物心一如のところ、色心不二萬法一如のところ、即ち神人合一生佛不二の處を申したものである。且く道へ。サアこつなつて、總に不憚ならば作麼生か行履せん、何も角も一切悉く不可としたならば倍何としたものであらうぞ。試みに擧す看よ。今日二大老の手段を擧揚するから。之れを能く參究して見るが宜しい。

第二節 本則

擧長慶有時云。寧說阿羅漢有三毒。生殺不說。如來有二種語。已。是。勝。子。不。道。如。來。無。語。猶。自。顯。預。悉。只是無二種語。周由者也。說什。保福云。作麼生。是。如。來。語。好。一。抄。慶云。聾人爭得聞。望。空。啓。告。七。花。入。裂。保福云。情。知。偏。向。第。二。頭。

道。爭。瞞。得。明。眼。人。慶。云。作。麼。生。是。如。來。語。錯。却。較。保。福。云。喫。茶。去。領。復。云。還。也。了。

【讀方】長慶或る時云く、寧ろ阿羅漢に三毒ありと説くも。焦殺は芽を生ぜず。如來に二種の語ありと説かず。已に是れ釋迦老子を謗し去る。如來に語なしとは道はず。猶ほ自ら顛倒。早く是れ七穿八穴。只是れ二種の語なし。周由者也。什麼の第三第四とか説がん。保福云く。作麼生か是れ二種の語。好一抄。什麼と道ふぞ。慶云く。聾人いかでか聞くことを得ん。空を望んで啓告す。七花八裂。保福云く。情に知んぬ。爾が第二頭に向つて道ふことを。争てか明眼の人を瞞き得ん。何ぞ止だ第二頭のみならんや。慶云く。作麼生か是れ如來の語。錯却つて些子に較れり。保福云く。喫茶去。領せり。復云く。還つて會すや。蹉過了る。

【字解】一。長慶或る時等。長慶慧稜禪師のことは前の第二十二則の雪峰豎鼻蛇の古則のところて詳しく申して置いたから開いて見るが宜しい。次に出て来る保福院の從展禪師とは法兄弟の間柄であるから、等しく雪峰和尚の法嗣であります。阿羅漢は阿盧漢、阿羅訶、阿羅訶などいかに梵語のアルハンと云ふ言葉をうつしたものである。普通略して羅漢又は羅訶などい申して居る。小乗教の修行に依つて得るところの四果と云ふて四種の悟りの最上の地位を阿羅漢果と云ふので、翻譯をすると、無生、殺賊、應供と云ふ三義を持つて居る。應供と云ふのは、禮拜をうくべき者。供養を受くべきものと云ふ意味であつて、凡そ出家沙門たるものは、自ら織らす耕さず、一切衆生の信施をうけ供養によりて生活するものであるから、若しも己れに本統の修行、眞實の徳がなくして、人の供養をうくると云ふことになる、虚受信施と申して重き罪を犯すことになるのである。然るに此の阿羅漢果の悟りを得た者は、已に其の修行が成就して徳に於いて缺くことゝるがないものであるから、即ちどのやうなる信施供養にも應ずるだけの資格が備つて居る。そこで應に供養をうくべきもので阿羅漢と名けたものである。殺賊と云ふのは、敵を殺す者の義で、此の生死輪廻の原因たる八萬四千の煩惱を賊に譬へて、其の賊を悉く退治したと云ふところから殺賊と云ふのである。無生は又不生とも申して、無始劫來生れかばり死にかはつて來た生死輪廻の身が、此の度びの悟りに依つて其の原因がつきてしまつたから、再び三惡道は勿論人間天上の諸界へも生をうけないと云ふ意味である。此の三義を具足するを阿羅漢と申すのであるが、今は此の中で殺賊の義に就いて申したもので、已に總べての煩惱を斷じつてしまつたのであるから、阿羅漢には貪瞋痴の三毒と申して、物を貪る貪慾の煩惱。怒り腹たつ瞋恚の煩惱。及び物事の道理に暗いと云ふ愚痴の煩惱。此等の煩惱は絶へてあるべき筈はないのである。然るに其の絶へてあるべき筈のない三毒が阿羅漢の身にあると云ふことは出来るにしても、決して如來には二種の語のあるべき筈はないと云ふのである。二種の語と云ふのは、有と無、方便と眞實と云ふ風に兩々相對する言葉を申したもので、如來には全く此の表裏反對した言葉がないと云ふのである。然るに其形式の上から申す時には、佛説ほど表裏反對の多いものはないので、一方では有と説きながら、一方では空と説き。一方では萬有の存在を肯定しながら他の方面ではそれを否定する或は又阿彌陀佛は十萬億の佛土を隔てたる極樂世界に居らるゝと説くかと思へば、阿彌陀佛此を去ること遠からずと説かれ。五千餘卷八萬の法門を説きながら、四十九年一字不説と申されたなど、見來れば、時に應じ處に應じて種々無量千差萬別がある。然しながら、若し内容に立ち入りて眺めて見ると、其の幾多無量の差別のあるものが其の儘ながらにして直ちに一味平等の眞際に結歸するのでありて、佛自らも唯一乘の法のみありて二もなく亦三もなしと説かれ、或は麁言及び細語悉く薩婆海に歸入すとも仰せられてある。斯うして見ると、如來に二種の語ありと説かずと長慶が申されたも如何にも道理のあることの様に見えるが、然しそれは一應理致の上で申したものであるから、爰は是非とも參究して見て果してそうであるかどうかを調べて見ればなるまいことと思はれる。

二。焦殺芽を生ぜず。維摩經の觀衆生品に菩薩衆生を視ること此くの如しと爲す焦殺の芽の如しとあつて、焦殺と申して米にせよ麥にせよ一旦焼きこがれてしまつた種は決して再び芽の生ずると云ふことは無いものであるが、彼の阿羅漢もその

通りで、羅漢は自分の修行ばかり如何ほど進んでも少しも他を怒み救ふと云ふ慈悲心がないから決して眞實の佛道を成就することが出来ない、自個獨善でおのれの快樂のみを主として利他の心掛けのないものも亦復かくの如しであるぞと云ふのである。

三。已に是れ釋迦老子を誘し了れり。元來一字不説の釋尊に對して一字不説など、云ふは既に早や誘佛の大罪を犯して居るのである。

四。猶自ら顛頂。誰れも咎めはせぬに、其のやうなことを言へば言ふほど自己に背くと云ふものである。

五。早く是れ七穿八穴。言へば言ふほど如來の尊法を汚すことになるのである。

六。周由者也。一本には之乎者也となつて居る、之の方が宜しい。之乎者也ば誰も知る通り皆文章の助辭であつて別段に意味はないのであるから、無意味の贅言と云ふ程の意味に用いたものである。長慶が語なしとは道はずとか只是れ二種の語なしなど、餘計な註釋を下したものであるから、これは之乎者也でなくもがなである。云ふのである。

七。什麼の第三第四とか説かん。已に二種の語さへないのであるから、勿論第三第四はないのである。

八。保福云く作醫生か是れ如來の語。保福は先きにも申した通り長慶の法兄弟たる漳州保福院の從展禪師のことである。その保福が如來の語に二種あるとかイヤ一種であるとか云ふ議論は兎も角。一體其の謂ゆる如來の語と云ふばどんなものであらう。果して其の様なものがあるかなと突込まれたものと見へる。

九。好一撈。まことに好い咎めどころである。

一〇。什麼と云ふぞ。此の一撈に對して長慶は何と答へるであらうと長慶の答を豫想したものである。

一一。慶云く聾人いかでか聞くを得ん。如來には如來の語があるけれども貴公のやうな聾者には聞くへるものではないぞと云ふ。

一二。空を望んで啓告す。これは狼狽の貌である。そのやうなことでば到底保福が承知しそふもないと云ふのである。

一三。七花八裂。シドロミドロに脚元が亂れたたと云ふのである。

一四。争でか明眼の人を瞞し得ん。到底保福のやうな明眼の人は瞞される者ではない。

一五。鼻孔を裂轉す。とうとう保福のために鼻孔を捏ねりむげられたと云ふのである。

一六。何ぞたゞ第二頭のみならんや。既に第三第四に落ちて居るぞと云ふのである。

一七。錯。先き程保福に向つて聾人には聞くことが出来ぬと云ふて置きながら、今になつてその様なことを問ひ返すとは何事であるぞ。

一八。却つて些子に較れり。又問ふて見るも一興であらうと保福の狼狽することを豫想したのである。

一九。保福云く、喫茶去。處が保福は少しも困らない。落ち附きはらつてサアお茶を一杯召し上れと申される。皆さん此れが果して如來語の當體でありませうか。

二〇。領。それで確とお領解が出来ました有り難ふ御座りますと云ふのである。

二一。復云く還つて會すや。どうぢやな分かるかなと云ふあはれいである。

二二。蹉過了也。若しも之れを如來の語であるかなど、少しでも疑議に涉ればすぎ去つてしまふぞと云ふのである。

第三節 本則提唱

長慶或時云。寧説阿羅漢有三毒。不説如來有二種語。下語云。大火聚。裡弄毛塵。

先師抄して曰く意旨如何。下語に云く七九六十三。三句の中で色相が面なり。此の三毒は貪瞋痴の三なり。阿羅漢は三毒を斷じ果てたものなり。二種の語は實と不實と。有と無となり。阿羅

漢に三毒ありと云ふとも如來に虚語ありとは云ふまいとなり。阿羅漢は梵語にして此處には殺賊と云ふなり。

不道^ス如來^ニ無^シ語^ハ。只是^シ無^シ二種^ノ語^ニ。下語云。漏^レ逗^レ不^レ少^ナ。

話頭に因つて抄したり。

保福云。作^ラ麼^カ生^カ是^レ如來^ノ語^ニ。下語云。因^リ風^ニ吹^ク火^ヲ好^ク問^フ。

慶云。聾^ク人^ノ爭^ヒ得^レ聞^ク。下語云。一^ニ任^ス踣^ス跳^ス。

長慶が我が身をあまりにたかぶりて保福を抑下して答へたぞ。

保福云。情^ヲ知^ル爾^ノ向^テ第^ニ頭^ニ道^ヲ。下語云。拳^ヲ來^テ踢^ク報^ヲ得^テ一^ノ牛^ヲ還^テ一^ノ馬^ヲ背^テ於^テ藍^ニ冷^ニ於^テ水^ニ。

於^テ水^ニ。

ハヤ第二頭に落ちたぞと云ふなり。爰では棒喝をも行しそうな處を。言句を以つて言ひかへしたは人の一牛を得て一馬をかへしたものと云ふ也。

慶云。作^ラ麼^カ生^カ是^レ如來^ノ語^ニ。下語云。還^テ把^テ鎗^ヲ頭^ニ倒^シ刺^シ人^ヲ來^ル。惱^ル亂^ル春^ノ風^ヲ卒^ニ未^ダ休^マ。

我と云ふて我れと休まざる心なり。

保福云。喫^テ茶^ヲ去^レ。下語云。千^ノ峰^ハ向^テ岳^ニ百^ノ川^ハ歸^テ海^ニ。

同じ收句にも此等は互に機鋒あり。状態た方に用ゆるなり。長慶保福の二老共に雪竇の會下にありて、常に相互に商量せられたとなり。

第四節 本則評唱和譯

長慶保福雪峰の會下に在つて常に互ひに相舉覺商量す。一日平常に此の如く説話して云く、寧ろ阿羅漢に三毒ありと説くも、如來に二種の語ありと説かずと。梵語には阿羅漢此に殺賊と云ふ。功能を以つて名を彰す。能く九九八十一品の煩惱を斷じて諸漏已に盡き梵行已に立す。此れは是れ無學。阿羅漢の位なり。三毒は即ち是れ貪嗔癡の根本煩惱なり。八十一品すら尙ほ自ら斷じ盡くす。何に況んや三毒をや。長慶道く、寧ろ阿羅漢に三毒ありと説くも如來に二種の話ありと説かず。大意は如來に不實の語なきことを顯さんことを要す。法華經に云く、唯此の一事實のみ。餘の二は則ち眞に非すと。又云く唯一乘の法のみあつて二もなく亦三もなしと。世尊三百餘會、機を觀じて教を返し病に應じて藥を與ふ。萬種千般の説法、畢竟して二種の語なし。他の意這裏に到つて諸人作麼生か見得せん。佛一音を以つて法を演説することは則ち無にあらず。長慶要且つ夢にだも如來の語を見ざることあり。何が故ぞ、大いに人の食を説いて終ひに飽くこと能はざるに似たり。保福他の平地上に教を説くを見て遂ひに問ふ、作麼生か是れ如來の語。慶の云く、聾人争でか聞くことを得ん。這の漢知んぬ他幾く時か鬼窟裡に在つて活計を作し來る。保福云く、

情に知んぬ爾第二頭に向つて道ふことを。果して其の言に中れり。却つて問ふ師兄作麼生か是れ如來の語。福云く、喫茶し去れ。鎗頭倒まに別人に奪却し了りぬ。大小の長慶、失錢遭罪。且らく諸人に問はん如來の語還つて幾箇かある。須らく知るべし恁麼に見得して、方に這の兩箇の漢の敗缺を見んことを。子細に檢點し將ち來れば盡く棒を喫すべし。一線道を放ちて他がために理會せしむ、有る底は云ふ。保福道ひ得て是なり。長慶道い得て不足なりと。只管に語に隨つて解を生じて便ち道ふ。得あり失ありと。殊に知らず。古人擊石火の如く閃電光に似たることを。如今の人他の古人の轉處に去つて看す。只管に句下に去つて走つて便ち道ふ。長慶當時便ち用いす。所以に第二頭に落つ。保福云く、喫茶し去れ便ち是れ第一頭と。若し只恁麼に看ば彌勒下生に到るとも也た古人の意を見ざらん。若し是れ作家ならば終ひに這般の見解を作さじ。這の窠窟を跳出して向上自ら一條の路あり。爾若し聾人争でか聞くことを得ん什麼の不是處かあらん。保福云く喫茶し去れ、什麼の是處かあらんと道は、轉た沒交涉。是の故に道く、他活句に參して死句に參せずと。這の因縁偏身是通身是の因縁と一般なり。爾が計較是非の處なし。須らく是れ爾が脚跟下淨裸々地にして方に古人相見の處を見るべし。五祖老師云く、馬前の相撲の如くに相似たりと。須らく是れ眼に辨じ手に親しかるべしと。這箇の公案若し正眼を以つて之れを觀て、俱に得失なきところに箇の得失を辨じ親疎なきところに箇の親疎を分たば、長慶も也た須らく

保福を禮拜して始めて得べし。何が故ぞ。這箇の些子の巧處用ひ得て好し。電轉じ星とぶが如くに相似たり。保福妨げず牙上に牙を生じ爪上に爪を生ずることを。頌に云く。

【字解】一。法華經に云く。方便品の文なり。

- 二。人の食を説いて終ひに飽くこと能はざるに似たり。何程料理法の講義を聞き。どれほど献立表を見て居つても、實地にそれを味つて見ないでは、空腹は愈されるものではないぞと云ふのである。これが誠に大切なことでありて、幾かほど巧みに碧巖の講義が出来ても、どれほど講義録を讀んだところで脚實地を踏んで實參實究して見なければ所詮何のたしにもなるものではないのであるから、若し此の講義を見て、少しでも求道の念がきざしたならば、是非とも然るべき師家に付て實參實究してもらいたひものである。拙僧が急がしい中から餘計なお禮言をするのも、一人でも實參實究の士あれかしと願ふより外はありませぬ。
- 三。失錢遭罪。錢を費やした上に刑罰にあつたと云ふので俗に云ふ骨折り損の勞れ儲けと云ふことである。
- 四。偏身是通身是の因縁。第八十九則の大悲千眼の古則を指したものである。
- 五。五祖老師云く。圓悟の本師五祖山の法演禪師が、馬前の相撲に相似たり。馬前の相撲と云ふものは間に一髪を容れぬ間に勝負を決するから其の間に擬議計較の及ぶべき餘地は少しもないと云ふことを申されたものである。

第五節 頌

頭分第一第二。我王庫中無如是事。今古臥龍不墜止水。同道無處有月波澄。
四海孤舟獨自行。徒有處無風浪起。薛殺人還覺寒毛。稜禪客稜禪客。市裏莫出頭。
勞卜度討什麼梳。有處無風浪起。卓豎麼打云來也。稜禪客。稜禪客。市裏莫出頭。

失錢 三月禹門遭點額。一。只得飲氣吞聲。

【請方】 頭たり分第一第二。我が王庫の中には是の如きの事なし。古今の模様。邪に隨ひ惡を逐ふて什麼をかなさん。臥龍は止水を鑑みず。同道方さに知る。無處には月ありて波澄む。四海孤舟獨り自ら行く。徒らに卜度を勞す。什麼の腕をか求めん。有處には風無きに浪起る。人を嚇殺す。選つて寒毛卓堅するを覺ふるや。打つて云く來れり。稜禪客稜禪客。賊を勾して家を破る。鬧市裡に出頭することなかれ。失錢遭罪。三月禹門點額に遭ふ。己を退いて人に讓るは萬中に一もなし。只氣を飲み聲を呑むことを得たり。

【字解】 一。我が王庫の中には是の如きの事なし。涅槃經に我が庫藏の中には都べて是のとなしとある語意に依つたものである。王庫と云ふは法王即ち如來の御手元を指したもので。如來の御手元には一だのと云ふやうな數量に涉るものはないから、謂ゆる不可思議不可商量のものぞと云ふのである。

二。古今の模様。雪寶が頭たり第一第二と諺ひだした模様の立派なことを稱揚したもので、實に之れこそ古今の榜樣で萬人が必ず眼を着くべき處である。

三。邪に隨ひ惡を逐ふて什麼をか作さん。長慶は一種だの二種だのと云ひだされたけれども、そのやうな錯つたことは態々取り上げて彼此云ふにも及ばぬであらう。

四。同道方に知る。蛇の道ほへびと云ふが、サスがに雪寶は保福の知音であると稱揚したものである。

五。四海孤舟獨り自ら行く。月清らかに波清澄なれば、それこそ一葉の舟を浮べて遊ぶには宜しからうと云ふので、之れが圓悟老師の廢物利用論であると見へる。

六。徒らに卜度を勞す。何程さがし索めたところで元來が止水裏であるから活龍が出て來そうなことではない。

七。什麼の腕をか求めん。設使有つたからと云ふて食事の濟んだ後に膳碗の必要はないやうなものである。

八。人を嚇殺す。嚇は字書に口を以て人を距ぐ之れを嚇と謂ふとあつて人をオドシつけることであるから、このコケオドシには長慶も驚いたであらうと云ふのである。

九。選つて寒毛卓堅するを覺ふるや。どうぢやな。定めし皆のものもぞつとする感じがあらうと云ふのであるが、これがなければ更に參禪の效能はないのである。

一〇。打つて云く來れり。フシンと打棒一下して、ソラ氣をつける活龍が出て來たぞと云ふのである。諸君。ウツカリして居ると鼻の孔の中へもぐりこみますぞ。

一一。賊を勾して家を破る。長慶が保福を釣らうとして選つて保福のために囁みつかれたのは、丁度盜人を引き入れて身代限りをしたやうなものであると云ふのである。

一二。鬧市裏に出頭すること莫れ。田舎者がウツカリ銀座などへ出てくると雪寶の様な大盜賊につけられますぞ。

一三。失錢遭罪。金錢を費やした上に罪人にされるやうな目にあうと云ふので、長慶が先きには保福のために金錢を費やし。今又雪寶の勘檢をうけることを評したものである。

一四。己を退いて人に讓るは萬中に一もなし。これは宋讓の仁と云ふたやうな意味で、あの問答は恐らく長慶がお見さんの保福に一步をゆづりて彼の面をたてさせたのであらうと冷かしたものである。

一五。只氣を飲み聲を呑むことを得たり。只氣を殺して閉口頓首するの外はなからうと長慶を抑下したものである。

【講義】 此の頌は總べて六句あつて、六言の句が五句それに結句が七言と云ふ體裁である。頭たり第一第二。此の句作は餘程格が變つて居つて、普通ならば第一頭第二頭と云ふべきところであるが、それを頭たり第一第二と申したので是れが謂ゆる倒字の格と云ふものである。此句を解するに付いて、古人は、若しも吾々が情解をなして、長慶は是れ第一保福は是れ第二とか、或は又

保福は是れ第一長慶は是れ第二と云ふ風に解するならば總に沒交渉。到底活龍を見ることは出来ないと云ふ意味に取つた人もあるが、これはさう見ずして、如來は本來一字不説であるからして、第一頭だの第二頭だのと數量を以つて論量しやうと思ふた處で決して出来うべきことではないと見た方が宜しからうと思ふ。臥龍は死水を鑑みず。眞の如來語は臥龍の如きものであるからして、洪波浩渺白浪滔天の處に於てこそ活動をもし神通妙用を現するのである。然るに第一頭第二頭を云ふやうなことは、恰も止水の如きものであるからして子子こそ其の中に涌かうけれども、眞の活龍は決して其の様なところに潜むものではないのである。無處には月ありて波澄む。無處は龍の居ないところであるから、彼の長慶のやうな止水には、本來龍は居ないのであるから、唯宿るものは月影ばかりで絶へて波瀾の活動はない。そこでそれを死水と云ふのである。有處には風なきに浪起る。これは保福の喫茶去と道破した活機輪の、如何にも活龍昇天の勢ひのあることを申したもので。活龍の居る處は、一點の風がなくとも自然に洪波浩渺白浪滔天の大活劇があると云ふのである。稜禪客稜禪客。稜は長慶の慧稜禪師のことであるから、つゞけざまに其の名前を喚んで喚び出したものである。三月禹門點額に遭ふ。禹門登龍のことは、第七則の惠超問佛の古則の頌で詳しく申して置いたから、爰では簡單に申して置くが、河南府の龍門縣に龍門山と云ふがある。夏の禹王がソコの瀑布を三段に切り落して之を排除したと云ふところから、禹門とも三級

とも云ふのであるが、俗説に毎年三月の三日に鯉が其の瀑布を溯ぼりて龍門を透り抜けることが出来れば角が生えて龍になる。若し途中で力が盡きて登り得ぬものは點額して回ると云ふのである。今長慶が折角如來の語の龍門を透りぬけやうとして登りかけたけれども、保福のために備が第二頭に向つて道ふことをとつき戻されて、點額したは誠に氣の毒なことである。今時の衲子もウツカリすると此の點額をうけるから、どこ迄も脚實地を踏んで參究するが宜しいと云ふのである。

第六節 頌評唱和譯

頭たり第一第二と。人只管に第一第二に理會せば、正さに是れ死水裏に活計を作す。這箇の機巧、備只第一第二の會を作さば且らく模索不着なること在らん。雪竇云く、臥龍は死水を鑑みずと。死水裏豈に龍あつて藏れんや。若し是れ第一第二ならば、正さに是れ死水裏に活計を作す。須らく是れ洪波浩渺、白浪滔天のところの方さに龍あつてかくるべし。正さに前項に澄潭には許さず蒼龍の蟠ることを云ふに似たり。道ふことを見ずや、死水に龍をかくさずと。又道ふ。臥龍長く怖る碧潭の長きことをと。所以に道ふ、龍のなき處には月あつて波澄み、風恬かに浪靜かに。龍のあるところには風なきに浪を起すと。大いに保福の喫茶し去れと道ふに似たり。正さに

是れ風なきに浪を起す。雪竇這裏に到つて一時に彌がために情解して頌了れり。佗餘韻あつて文理を成さしむ。依前として裏頭に就いて一隻眼を着く。也た妨げず奇特なることを。却つて道ふ、稜禪客稜禪客、三月禹門點額に遭ふと。長慶是れ龍門を透る底の龍なりと雖も、却つて保福に幕頭に一點せらる。

【字解】一。澄潭には許さず蒼龍蟠ることを。第十八則の國師無縫塔の古則の頌にある句であるがら見るが宜しい。
二。又道ふ臥龍長く怖る等。第十八則の評唱の處で申した通り龍牙山の居道禪師の申された言葉である。

第九十六則 趙州三轉語

第一節 本則

舉趙州示衆三轉語。道不什麼。三

【讀方】趙州衆に示す三轉語。什麼と道ふぞ。三段不同。

【字解】一。趙州衆に示す三轉語。趙州和尚はおなじみの趙州觀音院の住持をして居られた從諗禪師である。禪師が或る時上堂の法語に、金佛鐘を渡らす、木佛火を渡らす、泥佛水を渡らす、眞佛内裡に座す。菩提涅槃眞如佛性盡く是れ體に貼するの衣服なり。亦煩惱と名づく。實際理地甚麼の處にか著せん。一心生ぜざれば萬法皆なし。汝但究竟しく座して看ること三二十年せよ。若し會せずんば老僧が頭を截取し去れ」と申されたことがある。此の中から雪竇禪師が金佛と木佛と泥佛との三句だけをぬき出して、それを三轉語と名けて二首づいの頌を着けられたのが此の則である。して其の謂ゆる三轉語の本文はいつもの通り本則に出しあるのではないので、此の則に三首の頌がある。其の三首の頌の第一句に置いて頌の中へ讀みこんであるのである。轉語と云ふは、轉に宛轉投合の義であるから、語句を宛轉し取り合せて學人の機に投合するの意味である。サテ此の三轉語の出據たる上堂の法語に在りては、趙州の眞意は此の語句よりも却つて第四句目の眞佛内裡に座すと云ふ句と、第十句目の一心生ぜざれば萬法皆なしと云ふ語にあるのであるが、これではあまりに露骨であつて、禪語としては面白くないから雪竇が特に初めの三句によつて眞佛を示し且つ一心生ぜざれば萬法生ぜざる眞相を示されたものである。
二。什麼と道ふぞ。本來一語の下すべきでないので三轉の四轉のと申さるゝは何事であらう。
三。三段不同。這の一箇の天真自性を三段の不同に分別するのは何故であらう。

第二節 本則提唱

趙州示衆三轉語。泥佛不渡水。下語云。耳朶兩片皮。

土で作つた佛なるゆへに水につくればとくるなり。

サテ水を渡らずと云ふは色相をあらはして衆に示されたものぞ。

金佛不渡爐。下語云。牙齒一具骨。

金で作りし佛なる故に爐に入るればとくるなり。爐を渡らずと云ふは色相を彰して衆に示めされたものよ。

木佛不渡火。下語云。七九六十三。

木で作りし佛なる故へ火にあへば焼け失するなり。火を渡らずと云ふたは色相を彰はして衆に示されたぞ。

趙州示此三轉語了。末後却云。眞佛屋裏坐。如何是眞佛。下語云。入火不燒。入水不溺。

泥佛水を渡らば則ち爛却したり、金佛爐を渡らば則ち鎔却したり、木佛火を渡らば便ち焼却したり。屋裡の眞佛と云ふも什麼の蹤跡もなきなり。

第三節 本則評唱和譯

趙州此の三轉語を示したりて末後に却つて道ふ眞佛屋裡に坐すと。この一句忒悠郎當なり。他の古人一隻眼を出して手を垂れて人を接す。略此の語を借つて箇の消息を通じて人の爲にせんことを要す。爾若し一向に正令全提せば、法堂前草深きこと一丈。雪竇他の末後の一句漏返すことを嫌ふ。所以に削り去りて只三句を頌す。泥佛若し水を渡らば則ち爛却したり。金佛若し爐中を渡らば則ち鎔却したり。木佛若し火を渡らば便ち焼却したり。什麼の會し難きことかあらん。雪竇一百則の頌古計較葛藤す。唯此の三頌直下に衲僧の氣息あり只是れこの頌也た妨げず會し難きことを。爾若し此の三頌を透得せば便ち爾に罷參を許さん。

【字解】一。雪竇他の末後の一句漏返するを嫌ふ。この眞佛屋裡に座すと云ふ一語は餘りに露骨であつて、禪語とは思はれ難いほど爲人親切の語であるから、特に此の語を削り去つて始めの奇警の三句に依つて三首の頌を作られたと云ふのである。二。衲僧の氣息あり。此の雪竇の三頌こそ衲僧ならでは話へぬ頌であつて、如何にも大宗匠の息の根が通ふて居る名頌である。

第四節 第一轉語

其一 泥佛頌

泥佛不渡水。無風起浪。神光照天地。見他什麼事。立雪如未休。一人傳虛萬人傳實。將錯就錯。阿誰曾見。何人不雕僞。走入寺看額。二六時中走上。

【讀方】泥佛水を渡らず。鼻孔を浸潤す。風なきに波を起す。神光天地を照す。他の什麼の事にか干からん。死を見て塵を放つ。雪に立つて如し未だ休せずんば。一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ。錯を將つて錯に就く。阿誰か曾つて僞を見來る。何人か雕僞せざらん。寺に入つて額を見る。二六時中走上。下是れ什麼ぞ。聞黎便ち是。

【字解】一。鼻孔を浸潤す。泥佛と云ふだけで早く已に耳も鼻も落つてしまつたと云ふのである。

二。風無きに波を起す。分けきつたことを事あたらしく云ひだして人騒せせられると評する。

三。他の什麼の事にか干からん。泥佛なら泥佛だけで何の不足もないに達磨や二祖を引き出して何にするぞと咎めたのである。

四。死を見て塵を放つ。これは泥佛水を渡らずと云ふのを直ぐに神光天地を照すと承けた機合の如何にも隙間のないことを評したものである。

五。一人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ。これは一大虚を吠へ萬犬實を傳ふと云ふと同じことで、二祖が雪中に立つて臂を断つて悟を開いたなど云ふことを一人まががつて傳へたものがあるために、今日雪寶のやうな作家までが此のやうなことを云ひ出されたと云ふのである。

六。錯を將つて錯に就く。雪寶までが萬人の錯りを遺傳せられたと云ふのである。

七。阿誰か曾つて僞を見來る。二祖が雪に立つて悟を開いたことを誰か見て來て貴公に話したことがありますがかなと云ふ。

八。寺に入つて額を見る。都べて寺にはどこの寺にも門頭に額が懸けてあるから、何人と雖も直にハハハこれは音羽山結

水寺である。華頂山智恩院であると云ふことが分ると同じやうに、老々大々の宗匠が見れば、直ぐと此れは實參眞悟の人である、彼れは高腹慢心の似而非悟りであると云ふことがわかと云ふのである。

九。二六時中走上。下是れ什麼ぞ。吾々は晝夜四六時中寝ては起き食ふては寝て東奔西走日も是れたらならぬことであるが、是れは果して眞實であらうか或は又雕僞であらうか。お互ひに是非とも反省して見なければならぬ。

一〇。聞黎便ち是。其の雕僞の善ひ典型は則ち雪寶其人であると云ふので、本分の立ち場から達磨の神光のと餘計なことを云ふを評したものである。

【講義】泥佛水を渡らず。此れは三轉語の第一句を其の儘に提起して頌の第一句に代へたもので、雪寶の頌古の躰載である。泥佛は即ち泥土で作つた佛像のことであるが、何も佛像に限つたことはない。西行法師でも武者人形でも天満宮でも狐でも猫でも何でも角でも土人形でさへあれば支障へはないのである。吾々は土人形とか泥佛とか聞けば、水に浸せば直に形もなく蕩けてしまうことのやうに思ひ、佛とか菩薩とかと聞けば直ぐに常人を超越した尊とい方であるやうな感じが起る。然しながら是れが即ち凡夫の迷情であつて、泥佛が水に浸さるれば直ちに蕩れることは三歳の兒童と雖も能く知つて居ること、何も水に浸してから後に始めて知るべきではないのである。神光天地を照す。此の神光と云ふに付ては二祖大師の故事がある。二祖大師と云へば、法を初祖達磨圓覺大師に嗣いで震旦佛心宗の第二祖となられた勅諭大祖禪師のことであつて、この人は武牢と云ふ處の姬氏の出生で父の名を寂と申した。子がなかつたものであるから

諸方の神佛に禱つて子供を求められたところが、或る夜のこと、一道の異光が室内を照したことがあつた。母はそれによつて懷妊をせられた。初めて生れた時に再び神光があつて、室内を照して其の光が霽漢しやうかんを射たとあるから、餘程不思議な瑞相があつたらしい。そこで幼名を光と申した。人となり極めて鋭敏で殊に哲理に通じて居られた。佛書を読むやうになつてからは幾多自得することがあつたからして、洛陽龍沙の香山に往つて寶靜禪師の室に投じて出家を遂げ、永穆寺に於いて具足戒をうけ、三十二歳の時には香山に在つて終日宴坐して爰で又八年の歳月を送られた。或る時のことである。例によつて默然として端坐して居ると忽然として一人の神人が現はれて、大師に向つて、將に果を受けんと欲せば何ぞ此に滯るや、大道遙かなるにあらず汝夫れ南せよと申して再び消へ失せてしまつた。之れに依つて大師は名を神光と改められた。其の後師匠の寶靜禪師が、其の話聞いて、神汝をして南せしむるは斯れ則ち少林の達磨大士必ず汝が師なり。と教へられたものであるから、そこで師のもとを辭して直ちに崇山の少林寺に達磨大師を尋ねて遂ひに其の弟子になり、少林山に於いて頻りに參禪辨道して居られたが、達磨大師は元より本人の自得を旨とせらるゝものであるから、一言も教へると云ふことをせず、只面壁坐禪をして居らるゝのみである。然しながら神光も又凡庸の徒ではない。求道のためには遂ひに身命をも惜まざるの大決心を持つて居た。時しも後魏の光明帝の太和十年十二月九日の夜のこと。雪は濛々とふりしきつ

て寒氣凜烈骨髓に徹せん計りである。神光は其の中に突立つて雪は膝を埋むる計りに積り、夜は正に曉を告げんとした。けれども彼れは頑として動かない。爰の時に至つてさすがの達磨大師も神光の志を憫んで始めて聲をかけて、汝久しく雪中に立つて當さに何事をか求むると申された。神光は涙にむせびつゝ唯願くは慈悲甘露の門を開きて廣く群品を度したまへと願ふた。大師聲を勵まして、諸佛無上の妙道は曠劫に精勤して行し難きを能く行じ、忍び難きを而も忍ぶ。豈に小徳小智輕心慢心を以つて眞乗を冀はんと欲はゞ徒らに勤苦を勞せんと申された。此に於いて神光は遂に竊かに携ふる處の利刀を以つて自ら左の臂を斷ちて大師の前に於いて身を捨て、法を求むる底の眞情を表明せられた。達磨大師は神光の此の熱誠なる求道の志を見て取つて、更に、諸佛最初に道を求むるに法のために形を忘る。汝今吾が前に斷臂して求むるも亦可なることありと申して、神光のために慧可と云ふ名を與へられた。神光が諸佛の法印得て聞くことを得べしやと尋ねると。達磨は諸佛の法印は人に隨つて得るに非ずと答へられる。そこで某甲心未だ安からず乞ふ師安心せしめ玉へと願ふ。大師は心を持ち來れ汝がために安んせんと詰る。神光は心を覺むるに了に不可得なりと答へる。此の途端に大師は我汝のために安心し竟んぬと、迦葉以來二十八代の間嫡々相承し來つた佛心印を二祖に附屬をしてしまはれたことである。此の話は要するに心を求むるに了に不可得なりと云ふ一言が字眼でありて、これが即ち大安心の端的である。此の法は元來他

に向つて求むべきものでもなければ、又他に依つて傳へうべきものでもない。人人各自本來具足と、父母未生の已前から成満具足して居るところの本心の靈光を自由自在思ひの儘に放つやうにさへなればそれで即ちよいのでありて、神妙不可思議の靈光は父母所生の此の身に本來缺けぬもなく具足して居るのである。彼の神光には達磨大師に遇はない前。此の世で始めて産ぶ聲をあげた其の時から神光室内を照すの大奇瑞があつた。泥佛は必ずしも水を渡つて影も形もなく蕩けてしまつて、宇宙の本體に結歸して其の上で始めて一味平等の大光明を放つのではない。泥佛水を渡らずして、泥佛は泥佛のそのまゝなりで神妙不可思議の大光明を放つて宇宙法界を隅もなく照して居るのである。泥は泥の其の儘なりに、水は水の其のなりで即ち盡十方の無碍光であり、光明遍照の摩訶毘盧舍那如來である。雪に立つてもし未だ休せずんば。此の下の二句は神光の二字に因んで雪寶が例の老婆心切な垂誨を下されたものである。彼の二祖大師の安心は、本來不可得の當體で、人人各自に具足して居るものには相違ないけれども、若しもあの時、二祖が達磨の言下に大休歇の地に到ることが出来なかつたならば、どうして其の本具の靈光を自覺して七通八達思ひのまゝに宇宙の萬像を照すことが出来ようか。古人が何れの處にか天然の彌勒自然の釋迦あらんやと申されたは即ち此の味ひである、既に申した通り本具の靈光は人人分上ゆたかに具へて居るものに相違はない。相違はないが、若しも修行の功を積まず實證の果を得なかつたならば、それこそ狗子の佛性も同様であつて、謂ゆる高尚なる空想となつてしまふのである。されば若しも吾々にして、只其の空想にとらへられて本具の理性のみに満足し少しも實地の修證に心掛けることがなかつたならば、何人か雕僞せざらん。雕僞は詐はりかざることであるから、謂ゆる實證のない姿即ち口真似や模擬で以つて似せ悟りをふりまはすことで、何のことはない裏の狸と少しの變りもないのである。夫れ故に眞實求道の志のある人ならば、何は偕て置き實參實究の功を積んで、眞實に本來具有の佛性を開覺して、是非とも眞の佛眞の大菩薩とならなければならぬのである。實行は理論を壓倒する力であつて、如何なる高尚なる理論でも、若し實行が伴はなければ何等の効果もないのである。理論は實行のための理論であつて、佛性は即ち開覺せんための佛性である。而して佛性の開覺は是非ともに實參實究の功をかりなければならぬ。爰がお互ひ道に志す者の爲めには卑近なことではあるが、然も最も緊要なることなのである。

其二 頌評唱和譯

泥佛水に渡らず。神光天地を照す。這の一句に頌して分明にし了れり。且らく道へ什麼としてか却つて神光を引く。二祖初め生るゝの時、神光室を燭して霄漢に亘る。又一夕神人現じて二祖に謂つて曰く、何ぞ此れに久しき。汝當さに道を得べし。時至れり、宜しく即ち南に之くべし。

二祖神遇を以つて遂に神光と名づく。久しく伊洛に居して博く群書を極む。毎に嘆じて曰く、孔老の教へは風規を祖述す。近う聞く達磨大師少林に住すと。乃ち彼に往いて晨夕參叩す。達磨端坐面壁して誨勵を聞くことなし。光自ら付つて曰く、昔人の道を求むるに、骨を敲いて髓を出し、血を刺して飢を濟ひ、髪を布いて泥を掩ひ、崖より投じて虎に飼ふ。古へすら尙此くの如し。我又何如。其の年十二月九日の夜大いに雪ふる。二祖砌下に立つ。明くるころはひ積雪膝を過ぐ。達磨之れを憫みて曰く、汝雪に立つ此に於いて何の事をか求むべき。二祖悲嘆して曰く、唯願くは慈悲甘露の門を開いて廣く群品を度し玉へと。達磨の曰く、諸佛の妙道は曠劫に精勤して行し難きを能く行じ、忍にあらざるを而も忍ぶ。豈に小徳小智輕心慢心を以つて眞乗を冀はんと欲せば是の處あることなしと。二祖誨勵を聞いて道を問ふこと益々切なり。潜に利刀を取つて自ら左臂を斷つて、達磨の前に致く。磨是れ法器なることを知つて、遂に問ふて曰く、汝雪に立つて臂を立つ當に何事をかなすべき。二祖の曰く、某甲心未だ安んぜず乞ふ師心を安し給へ。磨の曰く心を持ち來れ汝がために安んせん。祖の云く、心を免むるに了に不可得なり。達磨の云く。汝がために心を安し竟んぬ。後達磨のために其の名を易て慧可と曰ふ。後に三祖の燦大師を説得す。既に法を傳へて舒州の皖公山に隠くる。後周の武帝佛法を破滅し僧を沙汰するに屬して師太湖縣の司空山に往來す。居に常處なく十餘載を積むまで人の知る者なし。宣律師の高僧傳は二

祖の事を載すること詳かならず。三祖の傳に云く、二祖の妙法世に傳はらず頼ひに末後依前として他の當時雪に立つことを悟るに値ふ。所以に雪竇道く、雪に立つて如し未だ休せずんば何人か雕僞せざらんと。雪に立つて若し未だ休せずんば、足恭諂詐の人皆之れに倣ふて、一時に只雕僞をなさば是れ諂詐の徒ならん。雪竇泥佛水を渡ることを頌す。什麼としてか却つて這の因縁を引き來つて用ゆる。他參得して意根下に一星事なく淨裸々地にして方に頌し得ること此くの如し。五祖尋常人をして此の三頌を看せしむ。豈に見ずや。洞山の初和尚に頌あり衆に示して云く。五臺山上雲飯を蒸し、古佛堂前狗天に尿す。刹竿頭上に鏡子を煎じ、三箇の胡孫夜錢を簸る。又杜順和尚道く、懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹る。天下に醫人を覓めて猪の左膊の上に灸すと。又傳大士の頌に云く、空手にして鋤頭を把り、歩行にして水牛に騎る。人橋上より過ぐれば、橋は流れて水は流れずと。又云く、石人の機汝に似たらば也た巴歌を唱ることを解せん。汝若し石人に似たらば、雪曲も應さに須らく和すべし、若し此の語を會得せば便ち他の雪竇の頌を會せん。

【字解】一。伊洛の間に居して。伊は伊水洛は洛水で即ち河の名である。

二。風規を祖述す。風規は風俗規則で孔子老子の教へは尊いには相違ないけれども只通常世間の風俗規則即ち倫理道徳や風俗習慣を祖述せられたものに止るから、謂ゆる人天教の分齊であつて、出離生死の道ではないと云ふのである。

三。骨を敲いて髓を出し。之れは般若經の三百九十八卷目に出て居る故事で、常啼菩薩が法涌菩薩の處に於いて供養して甚深の般若を聽聞しやうと思ふたけれども、其の供養は道理がないものであるから、市へ出て自分の肉體を賣つた。其の

時に天帝釋が其の志を憫んで身を婆娑門の姿に變じて其の肉を買ふて天を祀らうとした。菩薩は忽ちにして利刀を取つて己が身の皮を剥き肉を剥ぎ髓を出して之れを興へた。帝釋は大いに之れを隨喜して再び本形に復して菩薩の勇猛精進なる大菩提心を讚嘆すると其の瘡が立地に平復したものであるから、菩薩は大に悦んで遂に曇無德城に到つて法湧菩薩に相見したと云ふのである。

四。血を刺して飢を濟ふ。これは賢愚因緣經の第二に、昔し過去久遠劫に閻浮提に慈力王と云ふ大王があつた。性質極めて慈仁で常に十善を以つて民に教へて國は頗る安穩であつた。處が諸の疫鬼等は人の血氣を啖ふて活きて居るのであるから、どうしても人の血氣を得なければならぬことであるに、人民が十善を守つて居るから、それを得ることが出来ない。そこで五人の夜叉があつて王に白すには、我等は人の血氣によつて身命を保つて居るのであるに、王が人民を教導して十善を保たしむるものであるから、何うしても其れを得ることが出来ぬ。聞けば大王は誠に慈悲深い方であるそうだから、どうぞ大王の血を惠んで下されと云ふた。王は是の語を聞いて直ぐに身を刺すこと五箇所、流れ出づる處の血液を以つて五夜叉にあたへられたと云ふことである。釋尊は此の因緣を説き終つて、其の時の王は即ち今日の吾れで五夜叉は阿若憍陳如等の五比丘が即ちそれであると申された。

五。髪を布いて泥を掩ひ。之れは寶積經及び瑞應經并びに智度論等にあることで、世尊の因地に第三阿僧祇劫に至つて第八地の菩薩として摩訶仙人と云ふた時に然燈佛を供養しやうと思はれた。時に彼の佛は故らに面前の地上に少し計りの泥土を化現した。そこで仙人は自分の着て居る鹿皮の衣を脱して其の泥上に鋪いたけれども猶ほ小泥があつたから、更に髪を布いて泥を掩ふて佛を請じて其處を過ぎてもらうた。佛が織かにそれをふむや否や三千世界が六種に震動して色々の奇瑞をあらはした。斯くして佛は仙人のために廣く教法を説いて成佛の記別をさへ授けられたと云ふことである。

六。唾より投じて虎に飼ふ。金光明經第四捨身品に出て居る故事である。昔し摩訶羅陀と稱する國王があつて、それに三人の王子があつた。第一の太子を摩訶波耶と云ひ、第二の太子を摩訶提婆と云ひ、第三の王子を摩訶薩埵と稱した。或る時のことである。或る竹林に至つて遊んで居ると一疋の虎が居つて七子の小虎を連れて居るのが、頗る飢餓窮悴して命もまさ

に絶へやうとして居た。それを見て第一の王子が思ふには、此の虎は産をしてから来た七日、七子共に食を得ないやうであるから、若し飢餓が逼つてくれば此の子をも食ふてしまふであらうと。時に第三の王子が第一の王子に向つて虎の食物の如何なるものなるかを尋ねると云ふと、それは新熱の肉血であると云ふことである。王子は此のことを聞くと遂に大慈悲心を起して乾竹を以つて頭を刺して血を出して高山の上より身を虎の前に投じて彼れが爲に其の身を興へられたと云ふことである。

七。後周の武帝佛法を破滅し等。後周の武帝名は邕と云ふ人であるが、北齊を滅して政權を掌握して、深く道士の張寶土と云ふもの、言を信じて、建德三年に詔を下して佛敎を廢した。寺院四萬餘、僧及び道教の道士を併せて四百萬人悉く軍民に充てたと傳へられて居る。是れが三武一宗の法難と云ふ中の第二武の法難である。

八。宣律師の高僧傳。續高僧傳は三十卷あつて、西明寺の道宣律師が唐の太宗の貞觀十九年に編集せられたものであるから、普通には唐の高僧傳と稱せられて居る。慧可の傳は、其の第十六卷目の習禪篇の初めに見へて居るが、斷臂のことに就ては、遭賊斫臂と賊のために臂を斫られたのだと申してある。圓悟は此れを批評したものであらうと思はれる。

九。足恭諂詐の人。足恭は論語の公冶長に子曰巧言令色足恭等とある。之れを孔安國の註には足恭は便僻の貌也と見へて居るから、即ちコヒヘツラフことである。諂詐も又ヘツラヒイツハルことであるから、兩方で表面をかざる輕薄者流即ち實修眞證のない姿である。

一〇。洞山初和尚。雲門大師の法を嗣いだ洞山の守初禪師のことである。頌の大意は、五臺山上雲飯を蒸し。五臺山上では雲が飯を蒸すと云ふのであるが、これは雲がどうしてどのやうな飯を蒸して、それを又誰れが喫するのであらう。古佛堂前狗天に尿す。古佛堂前は佛殿とが開山堂とか云ふ程の意味で、そこで隣家のハスが足を片足もちあげて上に向つて尿をもして居るが、あれは誰れにどうして習ふたのであらう。恐らくは狗も習はず人も教へず。まさか古佛が教へられたわけであるまい。刹竿頭上に鏈子を煎じ。鏈子は蒸餅のことで、この蒸餅は押もどんなむしもちで誰れがどうしてたべるのであらう。三箇の胡孫夜籠錢。胡孫は猿のことで、人間ならば三人よれば文殊の智慧と云ふこともあるが、猿では幾ら三疋よつたとて、錢の勘定が出来るものでない。殊に真夜中と来ては勿論のことであると云ふので、これ等は總べて本分の境界は

分別計較の及ばぬものであると云ふことを示されたものである。

一。杜順和尚道く。杜順和尚は諱は法順姓は杜氏と申した人で、因聖寺の僧珍禪師より禪を學び、又自ら華嚴の奥義を窮めて終南山に在つて大いに華嚴一乘の法門を擧揚せられた。唐の太宗が師の徳を尊んで帝心尊者の號を賜はり、世人は稱して清涼山の文殊の化身であると稱したと云ふことである。弟子には至相寺の智嚴大師があつて、彼の有名なる法藏賢首大師は即ち智嚴の法を嗣いだ人である。唐の貞觀十四年十一月に八十四歳を以つて遷化せられた。華嚴法界觀門。華嚴五教止觀。華嚴一乘十玄門等の著書があつて今現に世に行はれて居る。一頌の大意は懷州の牛が禾を喫すれば益州の馬が満腹をすと云ふのであるから、拙稱が京都で御馳走を食へば朝鮮の京城に居る老人が満腹をして、少しも空腹を感じないと云ふも同じこと、到底常識を以つては考へ及ばぬことを申したのである。天下の醫人を竟めて猪の左臍の上に灸す。これも讀んで字の如き意味であるが、猪何處からどんな醫師が來て、猪の何處に灸をすへるとそ、がどう治るのであらう。猪に灸を施せば猪僧の處のベスの病氣が治ることであらうか。これも思慮分別の到度及ばぬことを申されたものである。

二。傳大士の頌に云く。傳大士のことは第一則の下及び第六十七則の傳大士講經の條で詳しく申して置いたから照し合せて見るが宜しい。大體の意味は、懐手ふところをして居りながら働をもち、徒歩いて居りながら同時に水牛に騎る。人が橋上を過ぎると橋が流れて水は靜止して居ると云ふので、これも凡情の及ばぬことを申したものである。

三。又云く石人の機等。これは洛浦元安和尚の上堂の語である。和尚は夾山善會禪師の法を嗣いだ人でこれまで度々出た人であるから、諸君も定めしおなじみのことと思ふ。大體の意味は、門前の石地藏が巴歌即ち下里巴人と申して下賤な曲のことであるから、云はララツバ節を歌ふことを知つて御坐る。吾々が若し石地藏のやうになれば、雪曲即ち陽春白雪で先づ鶴の巢籠り位ゐるが解るやうになるであらうと云ふので、これも同じく思慮分別を絶した姿である。

其二 類則提唱

一 祖安心

二祖 開誨 勵向道 益切 潜取利刀 自斷左臂 致達磨 前磨知是法 器途問曰 汝立雪 斷臂 當爲何事 二祖曰 某甲心未安 乞師安心 下

語云。問得可ニ始得。

磨曰 將心來 與汝安心 下語云。落草求人。

根本無心のところを爲人して心をもち來れと云はれたなり。

祖云 覓心了不可得 下語云。車不橫推。恰是。

真直に云ふたなり。

磨云 與汝安心 竟 下語云。理無曲斷。

先づソウヂヤと肯ふた方なり。車は横に推さず理に曲斷なしと續けても用ゆれども、切つて兩處に用ゆる方が面白し。

達磨端坐面壁 乃至某甲心未安 乞師安心 下語云。問得可ニ始得。

心を悟らずんば問ひ得て心得よとなり。

磨云 將心來 與汝安心 下語云。平生心膽向人傾。

自悟自得せんために心を持ち來れ汝のために安んせんと爲人して云はれたなり。

祖云、覓心了不可得。下語云、恰是。

無心の道理を能く心得へた。先づソウヨと云ふべき用處なり。

磨云、與汝安心竟。下語云、車不横推。

車は横に推すべからざるが如く、真直に汝がために安心し下ると云ふて爲人して聞かせられたなり。

達磨端坐面壁。乃至某甲心未安。乞師安心。下語云、問得可始得。

乞ふ師心を安じ玉へと云ふは、心の落居は、有に似て無なる心法無心のものなるを、二祖の有に似て而も無なる道理を知らずして、乞ふ師安心せしめ玉へと問ふたなり。安心はコ、ロ安すからんと云ふなり。乞ふ師と云ふは達磨を指して云ふなり。乞師の二字に用處なし。問得可始得と云ふは、安心の道理を知らずんば、問ひ得て始めて得べしと達磨の方よりつけた句なり。二祖の未徹の時に問はれたぞ。未徹と云ふは未だ悟らざるべきことなり。

磨云、將心來與汝安心。下語云、落草求人。

根本心の有に似て無いところを爲人して心をもち來れ汝がために安んせんと云へり。もち來るべき心がありてこそ。無いところを知らしめんとて、心を將ち來れと云ふ也。落草求人と云ふ心は、草むらの中へ落ちて見えざる人などを、尋ねてとり上げるほどのことなり。是れを爲人の

境界と云ふなり。爲人の境界と云ふは、人を救ひ出し、たすくるなり。爲人の中にも三つあり。此の爲人底は老倒爲人と云ふなり。老倒爲人と云ふは、年よりたる老婆や老翁が孫子を愛することなり。人目も耻も知らずいとおしがる底を云ふなり。

祖云、覓心了不可得。下語云、車不横推。

根本無心の物なるゆへに、將ち來りやうがありてこそ。了に不可得なりと云ふ心は、ないものなるゆへに不可得と云ふなり。不可得と云ふは得べからずと云ふなり。車不横推と云ふは、不可得と答へられたを、マツソウヂヤと云ふなり。車と云ふ物は横には推されぬものぞ。真直なことを云ふなり。金剛經に、過去心不可得と云ふは過ぎ去つたことを云ふ。現在心不可得と云ふは今現在し云ふと同じ心なり。過去心不可得と云ふは過ぎ去つたことを云ふ。現在心不可得と云ふは今現在してあることを云ふ。未來心不可得と云ふのは今日より後のことなり。之れを三世不可得と云ふなり。三世ともに心と云ふ物は有に似てないものぞ。

磨云、與汝安心竟。下語云、理無曲斷。

先づソウであるぞと肯がふ方なり。車不横推。理無曲斷と續けても用ゆるぞ。さりながら切つて兩處で用ゆる方がよしと先師の御批判なり。車不横推と云ふは、真直なことを云ふぞ。車と云ふものはよこしまには推されぬものぞ。又理無曲斷と云ふたも、理をまげて非分の方には

つけられぬなり。

(此の類則につき以上の三辨各々妙味あり。繁に過ぐるも又参考にもなるべしと思ひて茲に録出することにしたなり)。

第五節 第二轉語

其一 金佛頌

金佛不渡_レ鐘。天下唯我獨尊。人來訪_ニ紫胡。又恁_レ去也。只牌中數箇字。不識_レ字也。無_レ話會處。天下衲僧_レ挿清風何處無。又恁_レ去也。頭上漫漫。又云來也。

【讀方】 金佛鐘を渡らず。眉毛を燎却す。天上天下唯我獨尊。人來つて紫胡を訪ふ。又恁に去るや。只恐くは喪身失命せん。牌中數箇の字。字を識らざる底は猫兒も又話會のところなからん。天下の衲僧も鬻を挿むことを得ず。只恐くは喪身失命せんことを。清風何れの處にかなからん。又恁にし去るや。頭上漫々。脚 downstream 漫々。又云く來也。

【字解】 一。眉毛を燎却す。若し火を渡つたならば眉毛を焼く位は勿論のこと、口舌鼻孔悉く爛れ盡して痕跡も留めないうやうになるであらう。二。天上天下唯我獨尊。金佛とは如何にも立派なことであらうと云ふのであるが、銅佛でも鐵佛でも乃至は西郷の銅像も

大村の銅像も拙衲の處の手水鉢も皆天上天下唯我獨尊である。

三。又恁にし去る也。又そのやうなことを云ひ出したと云ふので前頌の神光を引き出したことに對したものである。

四。只恐くは喪身失命せん。紫胡の狗が出て來ては大騒ぎであるから、人人各自に用心をせないと食ひ殺されてしまうであらうぞと云ふのである。

五。字を識らざる底は猫兒も也。話會の處なし。字を識らないものは折角の立札であるけれども讀むことが出来ないから、紫胡の狗はサテ置き、猫のことも合點は往くまいと云ふのである。

六。天下の衲僧も鬻を挿むことを得ず。何人と雖も口出しは出来ない。

七。只恐くは喪身失命せん。うっかり擬議すれば狗が出て來て食ひこころしてしまふぞと云ふのであるが、これは前の着語が誤つて重出したのである。

八。又恁にし去るや。雪竇禪師に向つて、定めしそうしたこともあらうと云ふのであるが、之れも重出であるから削るが宜しい。

九。頭上漫々脚 downstream 漫々。天下到る處清風風々の安養淨土であるから、彼の紫胡の狗を引き連れて散歩するも又た時に取りの一興であらう。

一〇。又云く來也。ソラ紫胡の狗が口あいて來たぞと學人に警告するのである。

【講義】 金佛鐘を渡らず。例によつて三轉語の第二句を其の儘に提起して來た。鐘は鐘輔で即ち金屬を鎔解するルツボのことである。若し茲に一人の人がありて金佛を鐘の中に浸したならば其れが最後で直ぐに目鼻は愚か胴體までが鎔けてしまふ。これも金佛に限つたことではないので銅佛でも鐵佛でも乃至は西郷の銅像でも庭園の銅鶴でも鐵牛でも何でも角でも鐘輔に入れたが最後忽

ちにして一味平等の眞際に歸入してしまふ。人來つて紫胡を問ふ。紫胡は衢州紫胡殿の利蹤禪師と申して猫を斬つたので有名な南泉和尚の法を嗣いだ人である。確か前にも一二度出たやうであるからそこを見ると宜しい。此の和尚の處には一疋の猛犬が飼ふてあつて、門前には、大きな制札を建て、「紫胡に一犬あり、上みは人の頭を取り、中は人の腰を取り、下は人の脚を取る。擬議すれば則ち喪身失命す」と書いてあつた。之の腰の字は一本には心と云ふ字になつて居る。或る時のことである。南泉和尚が上堂して大衆に向つて此の制札の文を擧揚して紫胡に一隻の狗あり、上み人の頭を取り、中人の心を取り、下人の足を取ると申されたことがあるから、其の心と云ふ字であらうと思はれる。サテ此の一隻狗は人人本具の大智慧光明のことで前頌に神光天地を照すとあるあの神光と云ふも同じことである。この狗が金佛様のお相手に呼び出されて來たから、云はゞ大西郷の銅像と云つたやうな格であるが、此の狗は中々犇猛な奴で纒かにも擬議すれば忽ちに咬みつくから、如何なる人でも喪身失命の大難にあはねばならぬ。牌中數箇の字。牌は前に申した紫胡殿の門前に建て、ある制札のことであの文句が數箇の字であらう。此の制札の文句が讀める人は兎も角、讀めなかつたが最後どうしても喪身失命の大厄にあはなければならぬが、天下百萬の衲僧一人として讀みうるものがないから悲しいことである。清風何れの處にか無からん。然しながら若しもあの牌中の文字を讀み得て、自由に彼の一隻の狗をだに使ふやうになることが

出來れば、天下到る處に清風明月あり。此の地此の儘ながらにして常寂光の大公園であるから、紫胡の狗を牽きつれて優々と思ひのまゝ散歩することが出来るであらう。

其二 頌評唱和譯

金佛鐘を渡らす、人來つて紫胡を訪ふと、此の一句に又頌了れり。什麼としてか却つて人の來つて紫胡を訪ふことを引く。須らく是れ作家の鐘輔にして始めて得べし。紫胡和尚山門に一つの牌を立つ。牌中に字あり云く、紫胡に一狗あり。上人の頭を取り、中人の腰を取り、下人の脚を取る。擬議すれば則ち喪身失命すと。凡そ新到を見れば、便ち喝して云く、狗を看よと。僧纒かに首をかへさば紫胡便ち方丈に歸る。且らく道へ什麼としてか却つて趙州を咬むことを得ざる。紫胡又一夕、夜深うして後架に於いて叫んで云く、捉賊捉賊と。黒地に一僧に逢着す。欄胸に捉住して云く、捉へ得たりと。僧の云く、和尚是れ其甲にあらずや。胡の云く、是なることは則ち是なり。只是れ肯へて承當せずと。爾若し這の話を會得せば便ち爾に許す一切の人を咬殺して處々清風凜々たることを。若し也た未だ然らずんば、牌中數箇の字。決定して奈何んともせざらん若し他を見んと要せば、但だ透得盡して方に見よ。頌に云く。

【字解】 若し他を見んと要せば。若し紫胡を見たくば、先づ一切を透得し盡して方に雪竇の頌を見よと云ふなり。此の評唱

は至つて心得やすし。

其二 類則提唱

一 紫胡

紫胡和尚山門立一牌。牌中有字云。紫胡有一狗。上取一人頭。中取一人腰。下取一人脚。擬議則喪身失命。下語云。一箭兩梁。

上人の頭を取り中人の腰を取り下人の脚を取ると云ふところが截断にて。又喪身失命すと怖ろしげに云ひなしたところが賊ぞ。兩面備つたなり。

凡見新到便喝云。看狗。下語云。指槐樹罵柳樹。

狗は本分ぞ。本分を指して示したやうにして、便ち喝して狗を看よと云ふたは、句中を以つて此の僧を狗になして、面は狗をしかるやうにして、僧を罵つて云ふたは槐樹を指して柳樹を罵つたものよ。

僧纒回首紫胡便歸方丈。下語云。雲收岳青。

句中を收めて方丈に歸つたほどに雲收まりて岳青々たるほどのことよ。

一一 紫胡捉賊

紫胡又一夕。夜深於後架叫云。捉賊捉賊。下語云。挽釣搭索。

黑地逢着一僧。攔胸捉住云。捉得捉得。下語云。捉得露肘。平地起波瀾。

黑地は夜の黒き義。攔胸は胸元を捉ふる義なり。賊人を捉へもせいで捉へ得たりと云ふは句中ぞ。然る間此の下語をしたぞ。此の間答は全躰句中をはたらかしたぞ。

僧云。不是某甲。下語云。款出囚人口。買頭人難得。

盗人では候はぬ。某甲で候ふと云ふなり。

胡云。是則是。只是不肯承當。下語云。何不令。據款結案。放過一着。

是則是とは汝は汝なれども未だ心得ぬ處が有るぞと云ふて結案したぞ。言句に渉るよりも何故に打たぬぞ。又云く。承當は肯んせずと云ふ方なり。不肯と云はうよりも何ぞ令を行せざると見かけてしたる下語なり。又落草求人と云ふも好し。こゝの爲人は賊機關を爲人せられたぞ。此の僧は本分をば心得たれども、機關をば未だ心得ぬところを肯へて承當すと深く爲人せられたぞ。こゝの爲人は手段をかへて面白きなり。

第六節 第三轉語

其一 木佛頌

木佛不渡火。唯我能知。常思破竈墮。東行四行有何杖子忽擊着。在山僧手裏。山僧不用人。阿誰手裏。方知辜負我。似爾相似。摸索不着。有什麼用處。蒼天蒼天。三十年後始得。寧可永劫無杖子未免在。沈淪不來。諸聖解脫。若向箇裏。薦得未免辜負。作麼生得不辜負。去。杖子未免在。別人手裏。

【讀方】木佛火を渡らず。燒却し了れり。唯我能く知る。常に思ふ破竈墮。東行四行何の不可あらん。癩兒伴を牽く。杖子忽ちに擊着す。山僧が手裡に在り。山僧も用ひざる。こと在り。誰か手裡に無き。方に知る我に辜負すること。爾に似て相似たり。摸索不着。什麼の用處あらん。蒼天々々。三十年の後は始めて得ん。寧ろ永劫に沈淪すべくも諸聖の解脫を求めず。若し箇裏に向つて薦得するも未だ免れず辜負すること。作麼生か辜負せざることを得去らん。杖子未だ免れず別人の手裏に在ること。

【字解】一。燒却し了れり。木佛と云へば早や其の時に灰になつてしまつたと云ふのである。二。唯我能く知る。火を渡れば灰になると云ふことは佛が説いたことでもなければ祖が傳へたことでもない。唯我能く知る。到底他人の窺知することは許さないのである。三。東行西行何の不可有らん。雪竈は常に破竈墮を思ふなどい申さるゝが、破竈墮に限らず東でも西でも地獄でも極樂でも花でも月でも何を思ふたとて支し障へはないではないかと云ふのである。四。癩兒伴を牽く。然し破竈墮と雪竈とは誠に好い道連れである。五。山僧が手裡に在り。イヤ其の杖子ならば山僧も持つて居ると云ふのであるが、何も破竈墮や雪竈に限つたことはない。人人各自八助もお三も持つて居るのであるが、相違する處は只其の使ひ様の如何にあるのである。六。山僧も用ひ得ることあり。山僧は活漢底ならば兎に角そのやうな竈の神のやうなものは打たないのである。

七。阿誰が手裡に無き。イヤ誰が持つて居らぬ者もあるかな。八。爾に似て相似たり。打つた杖子と打たれた竈とが誠に瓜二つで能くも似て居ると云ふのである。九。摸索不着。然し諺にも兄弟は他人の始まりと云ふことがあるから、辜負して居れば遂に容易にめぐり遭ふことが出来ぬやうになります。一〇。什麼の用處あらん。然し幾度めぐり遭ふたところでの何の役にも立たぬことである。一一。蒼天蒼天。永の間辜負して居つたとは誠に悲しいことである。一二。三十年の後は始めて得ん。さりながら實參實究すること三十年の後ならば定めしうることもあらう。一三。寧ろ永劫に沈淪すべくも諸聖の解脫を求めず。寧ろ三惡道へ墮獄しても禪病祖病に取りつかれてはなりません。一四。若し箇の裏に向つて薦得するも未だ免れず辜負すること。よしや眞箇の我そのものを知つたとしても、其の知つたと云ふことが早や其の我れに辜負して居るのである。一五。作麼生か辜負せざることを得去らん。然らばどうしたならば、其の眞箇の我れに辜負して居らぬのであらう。一六。杖子未だ免れず別人の手裏に在ること。何と申したところで杖子は諸君の手裡にはありますまい。人人本具の杖子を自分自らに使ひ得ぬとは、サテ々々笑止なこと、誠にお氣の毒千萬と申すより外はない。【講義】木佛火を渡らず。例の如く三轉語の第三句を其の儘に拈出したもので、若しも木佛が火を渡つたならば眼鼻眉毛は勿論のこと忽ちにして四肢五體までも悉く灰燼に歸してしまつて、一味平等の眞際に歸入してしまふことである。常に思ふ破竈墮。これも第一頌や第二頌に神光と紫胡を引き合せに出したやうに嵩嶽の破竈墮和尚を引き出してきたものである。破竈墮和尚は姓氏本

名共に詳かでないが、兎に角嵩山に居られた高僧で法を嵩山の慧安國師に嗣いだ人であるから、即ち五祖大滿禪師の孫であつて、嵩嶽の元珪禪師及び福先寺の仁儉禪師とは法兄弟の間柄である。自ら其の姓氏を秘して決して人に語られたことはないが。其の言行には頗る奇特のことが多かつた。師匠の慧安國師が居られた嵩嶽に隱遁して居られたが、丁度其の附近の村落に一つの祠廟があつて、其れには竈が神に祭つてある。祭禮の度毎に色々の犠牲を備へて祭るものであるから、生物の生命を奪ふことは實に夥多しいことであつて、少しでも其れを怠れば忽ちにして大祟りがあると云ふので、村民は戦々兢兢として怖ろしがつて居つた。或る日のことである。老師が侍僧を引きつれて其の廟中に入り拄杖を以つて竈をたたくこと三下。竈に向つて「咄此の竈、只是泥瓦合成。聖何くより來り靈何によりてか起つて恁麼に物の命を烹殺す」と申されて、又三たび竈を打たれたところが、その途端に竈はガチャガチャと碎けてしまふた。須臾たつ間に一人の青衣峨冠たる神人があらはれて來て、老師の前に三拜するから老師は其の何人なるかを尋ねられたところが、神人が申すには、我れは此の竈の神であります、久しく業報をうけて苦厄に沈んで居りましたのを、今日老師の御濟度にあづかりましたので、此の處を脱がれ天中に生れることが出来ましたから、特に御禮のために罷り出ましたと云ふ。そこで老師は神に向つて是れ汝が本有の性なり、吾が強いて言ふに非すと申されたところが、神人は更に禮をなして消へ失せたと云ふことである。

これが本になつて遂ひに誰れ云ふとなく此の老師を喚んで破竈墮和尚と云ふやうになつたと傳へられて居る。今雪竇が此の和尚を爰へ引き合ひに出したのは、此の一段の因縁の中の、是れ汝が本有の性なり吾が強いて言ふに非すと云ふ一言であつて、此の一言が趙州の第三轉語の木佛火を渡らすと云ふ語に最も親しいところがあるから。引き合ひに謠ひ出されたものである。杖子忽ちに擊着す。これは破竈墮和尚が拄杖を以つて廟中の竈をうちくだいて其の直性をあらはされたことを申したもので即ち彼の神が和尚の接化によつて本有の性に還つた味ひである。方に知る我に辜負することを。彼の竈の神が久しく業報をうけて、眞箇の我に辜負して居つたのが、今や和尚の拄杖子に擊着せられて、始めて永の間自己の眞我に辜負して居つたと云ふことが知れたと云ふのである。然し、それは何も竈の神丈けに限つたことではない、吾々お互は本來生れながらにして、立派な七尺の拄杖子を持つて居る。持つては居るが、折角の其の拄杖子もそれを用いる用い手が悪かつたら、無きも同然、却つて之れが保存に困らねばならぬやうなことになる。然らば如何にして其の拄杖子を開發し、如何にして其の拄杖子を使用するか。圓悟が三十年の後始めて得てんと申されたは、即ち此の拄杖子を如何にして受用すべきかの方法を親切に教へられたものであります。

其二 頌評唱和譯

木佛火を渡らず、常に思ふ破竈墮。此の一句に亦頌了れり。雪竈此の木佛火を渡らざるに因つて、常に破竈墮を思ふ。嵩山の破竈墮和尚は姓字を稱せず。言行測りがたし。嵩山に隱居す。一日徒を領して山塙の間に入るに廟あり甚だ靈なり。殿中に唯一竈を安ず。遠近祭祀してやまず物の命を烹殺すること甚だ多し。師廟中に入り拄杖を以つて竈を敲つこと三下して云く。咄。汝本と博士合成す。靈何れより來り聖何れより起りて恁麼に物命を烹殺すると云ふて又乃ち撃つこと三下す。竈乃ち自ら傾破墮落す。須臾にして一人の青衣義冠なる神あつて忽然として師の前に立ちて拜を設けて曰く。我れは乃ち竈神なり。久しく業報をうく。今日師の無生法を説くことを蒙つて已に此の處を脱して生じて天中に在り。特に來つて謝を致す。師曰く、汝が本有の性也吾れ強いて言ふに非すと。神再拜して没す。侍者曰く、某甲等久しく和尚に參侍す。未だ指示を蒙らず。竈神何の徑旨を得てか乃ち天に生ずる。師の曰く、我れ只伊に向つて道ふ、汝本と博士合成す。靈何れより來り聖何れより起ると。侍僧ともに對ふるなし。師の云く、會すや。僧の云く、不。會。師云く禮拜せよ着。僧禮拜す。師云く、破也破也。墮なり墮なり。侍者忽然として大悟す。後に僧あり安國師に舉似す。師歎じて云く。此の子物我一如なることを會し盡すと。竈神の此れ

を悟ることは則ち故らに是。其の僧乃ち五蘊の成身。亦破なり墮也と云へば、二り俱に開悟す。且らく四大五蘊と博瓦泥土と是れ同か是れ別か。既に是れ此くの如し。雪竈什麼としてか道ふ。杖子忽ちに擊着す。方に知んぬ我れに辜負することを。甚に因つてか却りて箇の辜負と成り去る。只是れ未だ拄杖子を得ざること。在り。且らく道へ雪竈木佛火を渡らざるを頌す。什麼としてか却つて破竈墮の公案を引く。老僧直截に爾がために説く。他の意只是れ得失情塵意想を絶して淨裸な地にして自然に他の親切の處を見ん。

【字解】一。徑旨。近か路のこと。

- 二。破なり破なり墮なり。老師が禮拜せよと云はれたる、言下に侍者が拜をなした。そこで老師が侍者に向つて、夫れ四大が破れ五蘊が墮落崩解したと云はれたと云ふのであるが、之れが即ち本有の拄杖子を使ひ得ざる手合である。
- 三。後に僧あり安國師に舉似す。此の僧は、義豐禪師のことで安國師は即ち嵩嶽の慧安國師、破竈墮和尚の嚴師である。

其三 類則提唱

破竈墮和尚

破竈墮和尚隱居嵩山。一日領徒入山塙間。有廟甚靈。殿中安一竈。遠近祭祀不輟。烹殺物命甚多。師入廟中。以拄杖敲竈三下云。咄。汝本博士合成。靈從何來。聖從何起。恁麼烹殺物命。又擊三下。下語云。

爲人して云はれたなり。又云く、物の命を取るをやめさせうとて、竈を打つこと三下したは。何にかして其の氣をやめさせようとしたことぞ。そこを病に應じて方を施こすと下語したぞ。

竈乃自傾破墮落。下語云。時節已到。

物の命をとり、久しく業報をうけて種々のことをしたれども、破竈墮の一言を聞き得て傾破墮落したところを時節已到と下語したぞ。

須臾有_二一人_一、青衣_ニ、峩冠_ニ、忽然立_三師_一、前_ニ、設_レ拜_一曰、我乃竈神。久受_二業報_一。今蒙_三師_一、説_二無_レ生_レ法_一、已_ニ脱_レ此_レ處_一、生_二在_三天_一中_一、特_ニ來_レ致_レ謝_一。下語云。猶是_レ弄_二精_レ魂_一漢。

竈神が化現して特に來つて謝を致すと云ふたも精魂を弄したものなり。又云く、竈神が一言の道理を聞き得て生れて天中に在り特に來つて謝を致すなど、云ふたも、畢竟精魂を弄したものよと向上の眼から見下してしたる下語なり。

師曰、汝本有_二之_レ性_一、非_ニ吾_レ強_レ言_一。下語云。車不_ニ横_レ推_一。

我が云ふやうなことではないぞと眞直に示されたところが車不_ニ横_レ推_一のところなり。

神再拜而沒。下語云。其理自彰。

侍者曰。某甲等久參_二侍_一和尚_一、未_レ蒙_二指_レ示_一。竈神得_二何_レ徑_一旨_一、便乃_レ生_レ天_一。下

語云。貪_レ看_二天_一上_一、月_ニ、矢_レ却_レ掌_一中_一、珠_一。迷_レ已_ニ影_レ影_一。

吾は久しく和尚に參侍すれども何事も指示を蒙ることはなきに、竈神は何の徑旨を得てか生天したぞと不審に思ふた處を落して此くの如く下語するなり。

師曰、我_レ只_レ問_レ伊_レ道_一。汝本_ニ博_レ士_一、合_レ成_二靈_一、從_レ何_レ來_一、聖_レ從_レ何_レ起_一。下語云。落_レ草_一求_レ人_一。

爲人して云はれたなり。

侍僧俱無_レ對_レ。下語云。不_レ妨_二實_レ頭_一。一隊不_レ啣_二噉_一漢。

二人共に盲目ぢやと云ふ心なり。一隊と云ふたは一對と云ふこゝろなり。

師云、會_レ麼_一。下語云。老婆心切。

猶も爲人して云へり。

僧云、不_レ會_一。下語云。實_レ頭_一、人_レ難_レ得_一。

師云、禮_レ拜_一着_一。下語云。再_ニ三_レ懇_レ懇_一、機_レ見_レ不_レ覺_レ識_一。

猶もねんごろに爲人して云はれたなり。懇懇はネンゴロなり。

僧禮_レ拜_一。下語云。隨_レ便_一、傲_レ漢。

不足を見かけてなされたぞ。

師云。破也。破也。墮也。墮也。下語云。月白風清。百花春到。爲誰開。

落居何の道理もなきところを爲人して云へり。備は博士合成ちやなど、種々のことを云ふたも、現成の上の落居なんの道理もないことぞと、深う爲人して破なり破なり墮なり墮なりと云はれたぞ。

侍者忽然大悟。下語云。瓦解氷消。

第九十七則 先世罪業

第一節 垂示

垂示云。拈一放一。未是作家。舉一明三。猶乖宗旨。直得天地陡變。四方絕唱。雷奔電馳。雲行雨驟。傾瀉倒嶽。壘瀉盆傾也。未提得一半在。還有解轉。天關能移地軸。底上麼。試舉看。

【讀方】一を拈し一を放つ未だ是れ作家に在らず。一をあげて三を明らむ猶ほ宗旨に乖く。直ちに天地陡變し四方絶唱し雷奔り電馳せ雲行き雨驟ぎ瀉を傾け嶽を倒し壘を瀉ぎ盆を傾むくことを得るも也た未だ一半を提げ得ざることあり。還つて天關を轉ずることを解し能く地軸を移す底ありや。試みに舉す看よ。

【講義】一を拈し一を放つも未だ是れ作家にあらず。一は即ち第一義と云ふことで、二に落ちず三に墮せざる孤峯頂上の眞風光である。其の第一義を把住して拈起し或は放行して自由にまかせる。と云ふ風に、寢ても起きても四六時中全く第二義のところへは下らぬと云ふ謂ゆる孤峯頂上に立つて居たからとて、未だ以つて必ずしも作家の衲僧とは申されぬ。一を擧げて三を明らむ猶ほ宗旨に乖く。一を擧げて三を明め目機に鉄兩を辨すると云へば、如何にも俊發伶俐には相違ない。

が、然しながら元來佛法は憐愍の不憐愍のと云ふべきものではないからして、それで以つて此の宗旨に明るいとは申されないのである。直ちに天地陡變し四方絶唱し。陡變の陡は峻なり頓なり。遽なりとあるから、天地間の一切萬物。日月星辰山河大地を遽然と立ちどころに轉變覆没する力がありても、又東西兩洋は勿論南北兩極に至るありとあらゆる世界中の人に絶唱とグウの音も出さないやうに働き。雷奔り電馳せ雲行き雨驟ぎ湫を傾け嶽を倒し甕を瀉ぎ盆を傾くることあるも。或は拂拳或ひは棒喝と、彼の徳山や臨濟の様にとれほど惡辣峭拔の機鋒を逞くして本分の正命を行するやうであつても、又大海大川を傾け大山高嶽を倒破せんとする勢ひを以つて、甕の水をくつがへし盆の水をふりまくやうな謂ゆる富樓那の大雄辯を振つて講説提唱しても、也た未だ一半を提げ得ざることあり。またまた以つて金剛般若の一半四半をも提起し得たとは云はれないのである。還つて天關を轉ずることを解し地軸を移す底ありや。天關は天界の關門、地軸は地球の心棒であるから、其れを轉じ移すと云へば、即ち天地の根本を抜くことで謂ゆる迷悟を離れ凡聖を超越し、宇宙法界以外に立つて然も能く宇宙法界に出入し。生死凡聖を超越して然も能く生死の稠林に遊ぶと云ふ其の處に於いて、眞實に金剛不壞の般若波羅密を受用不盡ならしむるはとうしたものであらう。試みに擧す看よ。それには此の公案に參して能く此の事を究明するが宜しい。

第二節 本則

擧金剛經云。若爲人輕賤。又且何妨道。是人先世罪業。應墮惡道。了脫以今世人輕賤。故只得忍受。先世罪業。向什麼處搜索。則爲消滅。雪上加霜。又【讀方】金剛經に云く。若し人のために輕賤せられんには。一線道を放てり。又且つ何ぞ妨げん。是の人先世の罪業ありて。驢駝馬載。應さに惡道に墮すべきに。陷墮し了れり。今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に。本に酬ひて未に及ばず。只忍受することを待たり。先世の罪業。什麼の處に向つて搜索せん。穀を種へては豆苗を生ぜず。則ちために消滅す。雪上に霜を加ふること又一重。湯の水をけすが如し。

【字解】一。金剛經に云く。金剛經のことは第六十七則の傳大士講經の條で詳しく申して置いたから、開いて見るが宜しい。新譯の大般若六百卷の中では第五百七十九卷目に能斷金剛分と申す一品であるが、それが古くから別譯になつて行はれたもので總計合せて六譯ある。その中で東晋の安帝の隆安五年に鳩摩羅什三藏に依つて翻譯させられた金剛般若波羅密多一卷が最も盛に行はれて居る。吾が佛心宗に於いては、第六祖曹溪の慧能大師が此の經文の中の第十莊嚴淨土分在る應無所住而生其心と云ふ語に感じて出家得道せられたと云ふところから、古來盛に用ゆることとなつて、普門品、楞嚴咒と共に禪の三經とまで申して日夜に讀誦することになつて居る。借雪寶が頌古の題として抄出せられた此の文は、梁の昭明太子が此の經を三十二段に分解した中では第十六の能淨業障分と名けられた一段の文で、餘り長くないから此の一段全部を抄出して見よう。復次に須菩提よ。若し善男子善女人あつて、此の經を受持し讀誦せんに、若し人のために輕賤せられなば、是の人先世の罪業ありて應さに惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるゝを以つての故に、先世の罪業即ちために消滅して當さに

阿耨多羅三藐三菩提をうべし。須菩提よ我れ過去無量阿僧祇の劫を念ふに、然燈佛の前に於いて八百四十萬億那由他の諸佛に値ひたてまつることを得て、悉皆供養し承事して空しく過すものなかりき。若し復た人ありて後の末世に於いて能く此の經を受持し讀誦せんに、得るところの功德は我が諸佛を供養し上るところの功德に於いて百分が一にだも及ばず、千萬億分も乃至算數譬喩も及ぶこと能はざるところなり。須菩提よ。若し善男子善女人ありて後の末世に於いて、此の經を受持し讀誦することあらば、得るところの功德を我れ若し具さに説かば、或は人あつて聞いて心即ち狂亂し狐疑して信ぜざらん。須菩提よ。當に知るべし是の經の義は不可思議なり。果報も亦不可思議なることを。此の須菩提は即ち空生のことと此れ迄度々出たことであるから照し合せて見るが宜しい。此の文意は讀んで字の如く至極解し易いから。別段解釋するまでもなからうと思ふ。

- 二。一線道を放てり。眞の金剛般若の正體は、人のために輕賤せられるとか或は尊重せらるゝとか云ふやうな二邊に涉る底のことは決してない筈であるから、茲は暫らく利生の方便として一線の間道を開かれたものであらう。
- 三。又且つ何ぞ妨げん。作家の衲僧ならば、人のために輕賤せられたからとて別段支し障へもないことであるから、そのやうなことに頓着する必要はないのである。
- 四。驢駝馬載。鐵車汽船に載せても到底載せきれない位の澤山な罪業があると云ふ。
- 五。陷墮し了れり。そんなことを云ふて居るがハヤ無間地獄へ落ちて居るのである。
- 六。本に酬ひて末に及ばず。善因善果惡因惡果。まかね種は生へぬと云ふから、何のことはない。打てば響くと云ふまでのことである。
- 七。只忍受することを得たり。どれほどの毀謗でも侮辱でも平氣でうけたお蔭であると云ふのであるが、これが醫學上で面皮八寸と云ふ病氣の標本である。
- 八。什麼の處に向つてか摸索せん。其の先世の罪業と云ふものは一體何んな形をして何に何うしてあつて、其れをどうし

たならばさがすことが出来るのであらう。

- 九。穀を種ては豆苗を生ぜず。瓜の蔓には茄子はならないやうなもので、因果の道理は味ますことの出来ぬものである。
- 一〇。雪上に霜を加ふること又一重。先世の罪業など云ふが抑も餘計なことであるに、それを消滅したなどいば愈々もつて餘計な申し方である。
- 一一。湯の水を消するが如し。湯も氷も孰れにしても水より外はないのである。

第三節 本則提唱

金剛經云。若爲人輕賤。是人先世罪業應墮惡道。

茲に下語をすれば無明を長すること莫くんば好しと付くるなり。付けざるも可なり。
以今世人輕賤故。先世罪業則爲消滅。下語云。前三々後三々。

先世の罪業の悪いなど云ふも畢竟色相の上のことなり。色相と見れば截斷ぞ。輕賤と云ふは、已起の者を閑事と用ゆるを云ふなり。先念の罪業を後念を以つて勦絶するなり。六祖口訣に云く。佛の言はく持經の人はまさに一切の人の恭敬供養を得べきに、多生重業障あるがための故に、今世に此の經を持すと雖も、常に人に輕賤せられて恭敬供養を得ず。自ら經を持するを以ての故に我人等の相を起さず。疎親を問はずして常に恭敬を行す。犯すこと有りとも校せず。常に般若波羅密多を修す。劫を歴て重罪悉く皆消滅すと。乃至又理に約して言ふときは、先世は即ち

是れ前念の妄心なり。今世は即ち是れ後念の覺心なり。後念の覺心を以つて輕賤するときは、前念の妄心といまることあたはず。故に云く先世の罪業即ちために消滅すと。妄念既に滅して罪業成せずんば即ち菩提を得と云云。此の則は大意教意と同じきなり。又此の經を持す者とは本分を受用し得る者を云ふなり。先師抄しく曰く、先世と今世とは何を云ふたぞ辯せよ。云く、先世とは先念今世とは後念なり。一切人は一念の起しやうによつて善にも惡にも墮するぞ。先念の錯を以つて今世に惡業に墮するなり。喩へば因と果との如し。因果は二つなり。言ふこゝろは花の咲くは因なり。實のなるは果なり。此くの如くはあれども是れは教者の云ふことなり。衲僧の用いは、即今々々と善惡にかゝはらず用ゆるが禪の手段なり。即今に何事をも悉く切斷して見たがよいぞ。色身の上を何事も閑事と見るが則爲消滅なり。

【請益】 下語に云く、萬里一條鐵。畢竟色身は本分に歸して消滅するぞ。

第四節 本則評唱和譯

金剛經に云く。若し人の爲めに輕賤せられんに、是の人先世の罪業あつて、應さに惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業即ちために消滅すと。只平常の講究によらば、乃ち經中常に論ず。雪竇拈し來つて這の意を頌して教家鬼窟裡の活計を打破せんと欲す。

す。昭明大子此の一分を科して能淨業障となす。教中の大意、此の經の靈驗を説く。此くの如きの人、先世に地獄の業を造る。善力強きがために未だ受けざるに今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業即ちために消滅す。此の經故らに能く無量劫來の罪業を消して重を轉じて輕となし、輕を轉じてうけしめずして、復佛果菩提を得しむ。教家に據らば此の二十餘張の經を轉ずるを便ち喚んで持經と作す。什麼の交渉があらん。有る底は道ふ、經に自ら靈驗ありと。若し恁麼ならば備試みに一卷を將ちて閑處に放在して看よ。他感應ありや也た無しや。法眼云く、佛地を證する者を此の經を持つと名く。經中に云く、一切の諸佛及び諸佛の阿耨多羅三藐三菩提の法は皆此の經より出すと、且らく道へ什麼を喚んでか此の經と作さん。是れ黃卷赤軸底是なることなしや。且らく錯つて定盤星を認むること莫れ。金剛は法體に論ふ。堅固なるが故に。物に壞すること能はず。利用なるが故に能く一切の物を摧く。山に擬すれば則ち山摧け、海に擬すれば則ち海竭く。論に就いて名をあらはず。其の法亦然り。此の般若に三種あり。一には實相般若。二には觀照般若。三には文字般若なり。實相般若は即ち是れ眞智なり。乃ち諸人脚跟下、一段の大事古今に輝騰してはるかに知見を絶す。淨裸々赤灑々たる者は是れなり。觀照般若とは即ち是れ眞境なり。二六時中放光動地聲を聞き色を見る者は是れなり。文字般若とは即ち能詮の文字なり。即ち如今說者聽者は且らく道へ。是れ般若か是れ般若にあらざるか。古人道く。人人一卷の經あ

り。又道ふ。手に經卷を執らずして常に如是の經を轉ずと。若し此の經の靈驗によらば何ぞ止だ
 重を轉じて輕からしめ、輕を轉じてうけざらしむるのみならん。設令聖に敵する功能も未だ奇特
 となさず。見ずや。龐居士金剛經を講ずるを聞いて座主に問ふて曰く。俗人敢へて小問あり。知
 らず如何、主の云く、疑ひあれば請ふ問へ。士云く、無我相無人相と云ふ、既に我人の相なくんば
 阿誰をかして講せしめ阿誰をかして聽かしめん。座主對ふるなし。却つて云く文に依つて義を解
 す此の意を知らずと。居士乃ち頌あり云く。我なく亦人なし。作麼疎親あらん。君に勸む座を歷
 ることを休めよ。争でか直ちに眞を求むるに似かん。金剛般若の性、外一纖塵を絶す。我聞並び
 に信受、總に是れ假りに名を稱すと。此の頌最も好し。分明に一時に説き了れり。圭峯四句の偈
 を科して云く、凡そ所有の相は皆是れ妄虚なり。若し諸相は相に非ずと見ば即ち如來を見ん。此
 の四句の偈の義全く佛地を證するものを此の經を持すと名くと云ふに同じ。又道く。若し色を以
 つて我を見、音聲を以つて我を求めば、是の人邪道を行す。如來を見たてまつること能はずと。
 此れ亦是れ四句の偈、但だ中間其の義の全きものを取る。僧海堂に問ふ。如何なるか是れ四句の
 偈。海堂云く、話墮するも也た知らず。雪竇此の經上に於いて指出す。若人ありて此の經を持せ
 ん者は、即ち是れ諸人本地の風光、本來の面目なり。若し祖令當行に據らば本地の風光本來の面
 目も亦斬つて三段となさん。三世の諸佛も十二分教も一捏を消せず。這裏に到つて設使萬種の功

能あるも亦た管得すること能はず。如今の人只管に經を轉じて都て是れ箇の什麼の道理と云ふ
 ことを知らず。只管に道ふ、我れ一日に多少をか轉得すと。只黄卷赤軸巡行數墨を認む。殊
 に知らず全く自己本心の上より起ることを。這箇は唯是れ轉處の些子なり。大珠和尚云く、空屋
 の裏に向つて數函の經を堆む。看よ他光を放つや。只自家一念發する底の心是れ功德なるを以て
 なり。何が故ぞ。萬法は皆自心より出づ。一念是れ靈なり。既に靈なれば即ち通ず。既に通ずれ
 ば即ち變ずと。古人道く、青青たる翠竹盡く是れ眞如、鬱々たる黄花般若にあらずと云ふことなし
 と。若し見得徹し去らば即ち是れ眞如。忽ちまた見得せずんば且らく道へ作麼生か喚んで眞如と
 なさん。華嚴經に云く。若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば應さに法界の性は一切唯心の造
 なりと觀すべしと。爾若し識得し去らば境に逢ひ縁に遇ふて主となり宗となさん。若し未だ明得
 すること能はずんば、且らく伏して處分を聽け、雪竇眼を出して大槩を頌して經の靈驗を明めん
 ことを要す。頌に云く。

【字解】一。金剛經に云く等。金剛經の經題は第六十七則の傳大士講經の則で申して置いたから開いて見るが宜し
 い。金剛經具には金剛般若波羅密多經と申して、金剛は梵語の跋折羅を翻したもので、彼の金剛力士が手に持つて居る處
 の寶杵が金中の最剛なものであるから金剛の名を得るが如くに、帝釋のみが之れを有するもので薄福のものを見ることすら
 出来ないといふのである。今日で申さば先づ金剛石とでも云ふ物であらう。是の金剛の極利極堅にして、物として能く之れ
 を壞すべきなく、而も能く萬物を壞するの徳があるのを般若の實智が能く煩惱の怨敵を破して佛果菩提の境に至らしむるに

嘘へたものである。波羅密多は即ち到彼岸で此の般若の大船に據つて、生死の此岸より涅槃の彼岸に到着するを到彼岸と云ふのである。偕昭明太子の謂ゆる能除業障分の文を古人はどう見て居られるかと云ふことを見るために、元賢の金剛略疏の文を抄出して、参考に供することにしやう。四つに（此の前に經の功德を讀するに凡そ五重ありとして其の中第三迄を明しあり）罪を轉して成佛するの勝を明かす。若し人經を持して而も人の輕賤をうけんには、乃ち是れ先世の罪業を以つて、三途に墮すべきに持經を以ての故に、遂ひに現に輕賤の事に遭ふを以て、將來惡道の苦にかふ。然もたゞに罪業消滅するのみにあらず。且つ能く菩提を成ずることを得ん。蓋しおもん見るに、持經は能く實相を生ず。即ち是れ菩提の眞種なり。又た我等の相なし。即ち煩惱障盡き罪消滅すれば即ち業障つき、墮せざれば即ち報障つく。故に當きに菩提を得べしと道ふなり。五に多佛に事ふるの勝を明す。那由陀と云ふは、十億を一洛又となす。十洛又一俱胝と爲す。十俱胝と一那由他となす。佛を供養すること多しと雖も其の所得の功德持經の少分にも及ばざるは、供佛を以つてはたゞ福德を得。持經をもつては乃ち菩提をうるが故に及ぶべからざるなり。須菩提等とは前に五重をあげて極めて其の功德の勝るゝことを明す。今更に説くべきなし。但た總結して經義不可思議果報亦不可思議と云ふのみ。と申してある。

二。敎家に據らば此の二十餘張の經を持するを便ち喚んで持經となす。敎家では二十餘枚五千一百八十一字の此の經の文字を讀誦するのが即ち此の經を護持することぢやと思ふて居ると云ふのである。

三。法眼云く佛地を證する者を等。大法眼禪師即ち清涼文益禪師であつて、傳燈錄第二十九卷目に、一十四首の偈を出す中に金剛經爲人輕賤章を頌する偈があつて、其の註に、持經とは佛地を證するなりと申してある。佛地は即ち如來立脚の地は本より清淨圓滿のものであつて、罪福だの幸福だの迷たの悟だのと云ふ二邊に涉つたことの絶えて無い處であつて見れば先世の罪業も現世の消滅もあるべきではない、此のゆへはれを證得するのが即ち眞の持經であると申されたものである。因みに法眼の頌は、寶觀不失。虛舟不刻。不不失不刻。彼子爲得。倚待不壞。孤然仍則。鳥迹虛空。有無爾。或イヨクハナクダレと云ふのである。

- 四。什麼を喚でか此の經となさん。一體に金剛經と云ふは何に名けた名前であらう。二十餘張の紙にであらうか。五千一百八十一字の文字にであらうか。或は又文であらうか、或は義にであらうか、乃至は夫れ等を讀む音聲であらうか、然らずんば自己本有の靈性であらうか。抑も何に名けた名前であらうか。爰は人々各自に參究を要する處である。此の一切諸佛等の文は昭明太子の物によれば第八依法出生分の文である。
- 五。古人道く人人一卷の經あり。之れは天台宗の開祖智者大師の申されたことばであるが、此の經は金剛經であらうか。法華經であらうか。阿彌陀經であらうか。般若心經であらうか。爰は是非とも調べて居かねばなるまい。
- 六。又道ふ手に經卷を執らずして等。これも智者大師の申されたことで、手に經卷を執らずして常に此の經をよみ。口言音なくして徧く衆典を誦す。佛說法せざれどもつれに法音をきく、心思惟せざれども普く法界を照すと云ふのである。行住坐臥悉く轉經。喫茶喫飯之れ看經。蟬のなくも蜻蛉のなくも一に皆看經ならざるはないのである。
- 七。廳居士。在家の居士であつて法を馬大師に嗣いだ。生れは衢州衢陽縣の人、字は道玄と云ひ有名なる儒者であつた。初め石頭大師に見みへ又丹霞禪師とも親交があつたが遂に馬大師の法をつがれた。此の機縁は傳燈錄などにも見へて居る。一頌の大意は、向上の眼から見れば、本來我とが人と云ふ差別はないのであつて、一相平等の眞性にすぎぬのであるから、従つて其の間に我他彼此親疎の區別はないのである。然しながら此の境界は決して文字言句の詮案に依つては得られるものでないから、經に求め論に求め、師に尋ね人に問ふて他に求めると云ふことは一切止めてしまつて、直ちに自己は本來何者ぞと返照して見なければならぬ。勿論般若の眞智なるものは一切の差別妄念を絶して居るから、經に如是我聞乃至信受奉行と云ふやうに説いてあるのは、只是れ假名で月を指すの指、方を示すの地圖に過ぎないのであるから。決してそれにとらはれてはなりませんと云ふのである。
- 八。圭峯四句の偈を科して云く。圭峯は即ち宗密禪師で支那華嚴の第五祖であるが、禪を荷澤下の大德道圓禪師にうけて中々造詣も深かつた。爰は類則として參究するところであるから、提唱の下を見るが宜しい。

九。又道く。之れは金剛經三十二段の中では法身非相分第二十六の文であつて、圭峰は見聞不及と申して居らるゝ、これが即ち本統の金剛經で二十餘帳の金剛般若經を知つて居るものも知つて居らぬものも、本來具足成就して持つて居る大經典である。

一〇。晦堂くわいどう。晦堂祖心禪師と申して法を黃龍慧南禪師にうけた人であるから、即ち黃龍宗の第二祖である。問答の意は、如何なるか是れ四句の頌と抄して來たから、語墮するも也た知らず、猶僧のもの云ふすべも知らぬ男ぢやと答へられたものである。

一一。若し祖令當行によらば等。これは若し正眼に見來れば本來の面目と云ひ本地の風光と云ふも又之れ第二第三ハヤ既に本分の徳をけがして居るのであるから、用捨なく三段四段粉微塵に切つてするが宜しい。ましてや三世諸佛の、八萬の法門の、列祖一千七百の語頭公案のと且得没多涉。早く火をつけてもやしてしまふがよいぞと云ふのである。

一二。大珠和尚云く。越州の大珠慧海禪師は法を馬大師にうけた人で、百丈大智、南泉普願、大梅法常等の諸師と共に、馬大師の高足中の高足である。一僧が大師に向つて、聞くならく般若經を持すれば最も功德多しと師選つて信するやと問を起した。すると師は不信と答へられる。僧問ふ若し然らば靈驗傳十餘卷は皆な信するに堪へざるか。師答ふ、生人考を持して自ら感應あり。是れ白骨の能く感應あるにあらず。經は是れ文字紙墨にして性空なり。何れのところにか靈驗あらん。靈驗は持經の人の要心にあり。所以に神通して物を感ず。試みに一卷の經を取つて案上に安着せよ。人の受持するなくして自ら能く靈驗あらんやと申されたこと云ふことである。

一三。古人道く青々たる等。羅什門下の大德道生法師が無情にも亦佛性ありと云ふことを説かれた一節の文であつて、義は極めて取りやすいから文に就いて見るが宜しい。

一四。華嚴經に曰く等。唯心の偈と申して六十華嚴經第十一卷目の夜摩天宮菩薩說偈品に如來林菩薩が説かれた五言一句、四句一頌の偈が十頌ある中の最後の偈であつて、古來破地獄の文と稱して各宗共に珍重して居る偈文である。彼の大龍鏡鬼

などの初めに安じてある文は即ち此の偈である。文は解しやすから別段講ずる迄もあるまいと思はれる。

第五節 類則提唱

其一 四句偈

圭峯科シテ四句偈ヲ云フ。凡ソレ所有相皆ハ是虛妄ナリ。下語云。道老賊。

本分上には有相無相と云ふこともないを。あるに落しつけて皆是れ虛妄と云ふは賊なり。釋尊に賊語はなけれども向上の眼からオツ取つて賊と云ふぞ。是れを轉語の機關と云ふのは、何たる語をもオツ取つて轉じて用ゆる故なり。又轉作の機關と云ふもあり、其れは或は手をのべて模様をなし、或は拄杖を取つて龍となし用ゆる如きぞ。轉じて機關となすと云ふ義なり。轉語の機關をも轉作の機關と云ふこともあれど大體は右にわくるが如き也。

第六節 頌

明珠在レ掌ニ。上ニ通ニ霄漢ニ。下ニ徹ニ黃泉ニ。道ニ什ニ。有レ功者賞ス。多ク少ク分明ニ。隨レ他去也。忽ニ胡漢不レ來也。内ニ外ニ絶ニ消息ニ。全ク無ニ伎倆ニ。展レ轉ニ沒ニ交涉ニ。向レ什麼處ニ。伎倆既ニ無ニ。休レ去也。歇ニ波旬失レ途也。勸レ破了也。道ニ外ニ道ニ。瞿曇瞿曇ニ。佛眼觀ニ。識レ我也ニ無ニ。咄レ勸レ破也。復ニ云ニ勸レ破了也。

也。一棒一條痕。已在言前。

【讀方】

明珠掌に在り。上は霄漢に通じ下は黄泉に徹す。什麼と道ふぞ。四邊語訛八面玲瓏。功ある者は賞す。多少分明。他に隨ひ去るや。忽ち若し功なき時作麼生が賞せん。胡漢來らず。内外消息を絶す。猶ほ些子に較れり。全く伎倆なし。展轉して没交涉。什麼の處に向つてか摸索せん。漆桶を打破し來て相見せん。伎倆既になし。休し去り歇し去る。阿誰か怎麼に道ふ。波旬途を失す。這の外道魔王蹤跡を尋ねるに見えず。瞿曇瞿曇。佛眼に觀れども見えず。唯我を識るや也た無しや。唯勘破了也。復た云く勘破了也。一棒一條痕。已在言前に在り。

【字解】

- 一。上は霄漢に通じ下は黄泉に徹す。其の明珠の光明は上は霄漢より下は黄泉に至る無限の空間に充足して謂ゆる光明遍照のものであるのに、何故に吾々は其の本體たる明珠をつかむことが出来ないのであらう。
- 二。什麼と道ふぞ。雪竇は明珠掌に在りと申さるゝが、それは偽せ玉ではなからうか誠に怪いぞとの意味であつて、低意は人人各自に此の明珠を握つて居りながら、それを知らぬに誠に嘆かほしいことであると云ふのである。
- 三。四邊語訛八面玲瓏。昔の者此の明珠が見へるかな。語訛なやうで而も玲瓏。伺んとも結構な寶珠である。
- 四。多少分明。其の論功行賞は如何にも公明正大であつて少しも誤りもない。
- 五。他に隨ひ去る。功があれば賞が伴ふてくるは勿論のことである。
- 六。忽ち若し功なき時作麼生が賞せん。其の功の見へるものは賞することが出来るが、無功の大功はどうして賞したものであらう。
- 七。内外消息を絶す。内に照すべき智もなければ外に照さるべき對境もない。これが即ち光境俱に忘したる妙境である。

八。猶些子に較れり。少しは許せるがまだ、前途は遠道である。

九。展轉して没交涉。何に角と様々にお話しが變つて來て到當何のことだかわからなくなつてしまつた。

一〇。什麼の處に向つてか摸索せん。サア此うなつた以上は何として明珠の體用を參究したものであらう。

一一。漆桶を打破し來れ相見せん。兎角四の五のと面倒であるから、其の一切の思慮分別を放却し、言句伎倆をうちすて來たならば、始めて此の全く伎倆なき底の明珠を見ることが出来るであらう。

一二。休し去り歇し去る。一切の思慮分別を離れて妄想妄念をすてしまつた姿である。

一三。阿誰か怎麼に道ふ。既に伎倆をなくしてしまつたからには其の様なことは云はれぬ答ではないかと云ふのである。

一四。勘破了也。この着語は削つた方が好いやうに思はれる。古本の碧巖にも較つて居ないと云ふことである。然し強い辨を付ければ、波旬途を失すと云はれるが、ソレは疾くの昔に見破つて居ると云ふほどのことであらう。

一五。這の外道魔王蹤跡を尋ねるに見えず。到當。其の波旬が途を失して行衛が見へなくなつてしまつたと云ふので即ち本分の家郷には外道や魔王のあとかたもないことを申したものである。

一六。佛眼にみれども見えず。雪竇は頻りに親分の釋尊を喚び掛けられるやうであるが、元來此の一事は佛の五眼も窺ふに由なきところでありませと云ふのである。

一七。唯。此の老賊奴と瞿曇を叱りつけた。

一八。唯。此の自點胸奴。餘計なことは云はなくとも好いと叱りつけた。

一九。勘破了也。云はなくとも知つて居ると云ふのであらう。

二〇。一棒一條の痕。サスがに此の勘破はこたへた。それ此の痕を見られよと腕をまくる。

二一。已在言前に在り。そんなことは言はぬ先きから分りきつて居ると云ふのである。

【講義】

明珠掌に在り。これは法華經の安樂行品に、『文殊師利よ。譬へば疆力の轉輪聖王の如

き、威勢を以つて諸國を降伏せんと欲すれども諸の小王其の命に順はず。時に轉輪王種々の兵を起して往いて討伐す。兵衆の戦つて功ある者を見て即ち大いに歡喜して功に隨つて賞賜して或は田宅聚落城邑を與へ、或は衣服嚴身の具を與へ、或は種々の珍寶金銀瑠璃瑪瑙珊瑚琥珀象馬車乘奴婢人民を與へて、唯警中の明珠のみ以つて之れを與へず。所以はいかんならば、獨り王の頂上に此の明珠あり、若し以つて之れを與へば王の諸の眷屬必ず大いに驚恠せん』とある譬を借りて來たもので、明珠は即ち金剛般若波羅密と云ふ寶珠で此の寶珠は轉輪聖王とも申すべき衲僧と衲僧とが心を以つて心に傳へる寶器であるから、謂ゆる唯佛與佛の智見で、決して局外から窺ひ知ることの出來ないものであるが、其れを此の通りチャンと掌中に握つて居るぞと云ふのである。功あるものは賞す。若しよく佛地を證するものがあれば、其の恩賞として此の金剛不壞の明珠を遣はずぞ。胡漢來らざれば全く伎倆なし。そも此の明珠は、如意寶珠とも名けて、胡人が來れば胡人を現じ、漢人が來れば漢人を現じ、來るものはこばまず去るものは逐はず。月も花も山も川も森羅萬象歷々分明に映現して遍く一切の諸法を照すの大伎倆を持つて居るけれども、然しながら漢人も胡人も月も花も迷も悟も絶えて其の形象を見ざる本分の地に至りては、之れ等の伎倆には全く要事はないからして従つて亦更に勳功の論量すべきものもない。金剛經を受持すると云ふも亦復かくの如しで、眞の金剛經。即ち宗門向上の眞際には、先世の罪業もなければ亦現

在の消滅もない。此の罪業なく消滅なく、全く分別思慮の絶へ果てたる處が本統に能く金剛經を受持し讀誦すると云ふものである。伎倆既に無し波旬途を失す。波旬は具さには魔波旬。或は波旬ひんと申して之れを殺者又は奪命と翻譯をする。彼の惡魔は常に惡意を懷いて惡法を成就し僧をみだして能く人の慧命を斷滅せしむるからそこで波旬と申すのであるが、此の惡魔波旬と雖も此の無伎倆底の處は何とも手を下して見る途もないと云ふので、即ち思慮分別も、智解も作略も一切忘れてしまへば、更に煩惱妄念のくもりを止めないから、従つて都べての煩悶苦痛に支配されると云ふことはないのである。瞿曇々々。瞿曇は新譯に喬答摩じやうたまたとうつしてある梵語でこれが釋種の元の姓であるから、その姓をよんで釋迦老人を喚び出したのである。我を識るや也た無や。此の明珠を握つて居る雪竇を御存じであるかなと云ふのであるから、久しく別れて居つた兄弟が會つて親から分けてもらつた割符を合せて見るやうなあんばいと見へる。此れが古佛と古佛との相見である。復云く勘破了也。然し貴公は餘程老耄して居るから、モウ記憶をして居られぬであらう。此の雪竇は悉く勘破してしまつたと云ふので、これが佛も魔も悉く勘破してしまつて其の廣々たる地位を占めて十方法界を眼下に睥睨した姿である。

第七節 頌評唱和譯

明珠掌に在り功ある者には賞す。若し人ありて此の經を持し得て功驗ある者には、則ち珠を以つて之れを賞す。他此の珠を得て自然に用ゆることを會す。胡來れば胡現し漢來れば漢現して萬象森羅縱横に顯現す。此れは是れ功勳なり。法眼云く、佛地を證する者を此の經を持すと名くと。此の兩句に公案を頌し畢れり。胡漢來らず全く伎倆なし。雪竇鼻孔を裂轉す。也た胡漢あつて來るときは則ち備をして現せしむ。若し忽ち胡漢俱に來らざる時は、又且つ如何。這裏に到つては佛眼も也た覩れども見へず。且らく道へ是れ功勳か是れ罪業か。是れ胡か是れ漢か、直ちに羚羊の角をかくるに似たり。道ふこと莫れ聲響蹤跡と。氣息も也たなし。什麼の處に向つてか模索せん。諸天をして花を捧ぐるに路なく、魔外をして潜かに覩がうに門なからしむるに至る。是の故に洞山和尚、一生住院、土地神他の蹤跡を覓むるに見ず。一日厨前に米麪を抛撒す。洞山心を起して曰く、常住の物色何ぞ作踐すること此の如きことを得たると、土地神遂ひにひとたび見ゆることを得て便ち禮拜す。雪竇道く、伎倆既になしと。若し此の無伎倆の處に到つては波旬も也た途を失せしむ。世尊一切衆生を以つて赤子となす。若し一人あつて發心修行せば波旬が宮殿それがために振裂す。他便ち來つて修行者を惱亂す。雪竇道く。たとひ波旬恁恁にし來るも也た須らく途路を失却して近傍のところなからしむべしと。雪竇又更に自ら點胸して云く。瞿曇瞿曇。我を識るや也た無しやと。道ふことなれば波旬と。たとひ是れ佛來るも還つて我を識る

也た無しや。釋迦老子尚ほ自ら見ず。諸人什麼の處に向つてか模索せん。復云く、勘破了也。且らく道へ是れ雪竇瞿曇を勘破するか、瞿曇雪竇を勘破するか。具眼の者試みに定當して看よ。
【字釋】一。直ちに羚羊の角を掛くるに似たり。 沒蹤跡と云ふことを小羊の角なくして角にかけやうとするにたとへたものである。
二。自ら點胸して云く。 サメホレチと云ふ程のことである。

第八節 類則提唱(其二)

其二 洞山土地神

洞山和尚 一生住院。土地神 覓他蹤跡不見。下語云。通身無影像。
臨濟宗には沒蹤跡のところを大地黒漫々とも乾坤を逼塞すとも用ひ、有るとも無いとも用ゆるなり。洞山は悟本禪師と云ひ曇晟の弟子なり。曹洞宗なる故に偏固に沒蹤跡とばかり心得たに依つて、覓るに見へずと云はれたなり。通身無影像とは、曹洞宗は法身無相と本分を無いとばかり偏固に用ふるゆへに、通身に影像なしと云ふ句を用ゆるなり。無相ならば影は何としてあらうぞ、相があつてこそ影はあるものなれ。臨濟宗ならばあるともないとも自由自在に用ゆるなり。
一日厨前抛撒米麪。洞山起心曰。常住物色。何得作踐如此。土地神遂得

一 見^{カヒル}便^{トク}禮^レ拜^ス。下語云。通身有^リ影像。

洞山の前は無心に用ゐる切つて居られたが、初めて心意を起して有心に用ゐられた處を、土地神が近頃殊勝なる住持にて候ふと云ふ心で窺ふて禮拜したなり。下語に云ふ通身に影像ありとは、前は通身無^シ影像と無心に用ゐたが、心意を起して有心になつたほどに通身に影像ありと云ふ句を用ゆるぞ。曹洞宗の偏固に用ゆると云ふ義なり。

拶して云く、曹洞宗は偏固に用ゆるに依つて土地神が窺ふぞ。臨濟宗は窺れやうするか窺れまいか辯せよ。

云く。臨濟宗は窺れまい。其の受用は有心を無心と用ゆれば、没蹤跡なる程に心意を起したりとも窺れまいぞ。腹を立つる心と云ふも根本は無心なもので。又窺れたくば無心を有心とばかり受用したらば窺れやうぞ。窺れやう窺れまいは己が受用次第にして自由自在なり。有心を無心、無心を有心と用ふるとも心のまゝなり。秘の一なり。

其二 南泉土地神

南泉擬^ス取^ラ明^ニ日^ト遊^ビ莊^ノ舍^ニ。其夜土地神先^ニ報^ス莊^ノ主^ニ。莊^ノ主^乃預^シ爲^シ備^フ。師到^リ問^フ莊^ノ主^ニ。爭^ヒ知^ラ老^ノ僧^ノ來^ル排^シ辨^ス如^ク此^ノ莊^ノ主^ニ云^ク。昨夜土地神報^シ道^ノ和^ノ尚^今日^來。師云^ク。王

老師修行無^シ力^ニ。被^レ鬼^ノ神^ノ覷^ル見^ル。有^リ僧^ノ便^チ問^フ。既^ニ是^レ善^キ知^識。爲^シ什^ニ麼^ト被^レ鬼^ノ神^ノ覷^ル見^ル。下語云。要^シ持^シ虎^ノ鬚^ヲ。

是より前は表白といふて古則の起りを云ふたぞ。拈香などにも表白と云ふことはあるぞ。

師云。土地神更^ニ下^シ一^分飯^ヲ。下語云。我^ハ爲^シ法^王於^テ法^ニ自^在。

莊舎へ趣をなす處に早く莊主に報しまはりた骨折りに。一分の飯を下せと云ふたものなり。下語に云く我^ハ爲^シ法^王於^テ法^ニ自^在と。南泉は的傳に近き善知識なれば、本分を有心にも無心にも自由自在に用ひたに依つて、土地神が先づ莊主に報じたぞ。有心と云ふは充塞六合と云ふ境界なり。無心と云ふは没蹤迹の境界なり。本分を有心にも無心にも自由自在に用ゆることぞ我^ハ爲^シ法^王於^テ法^ニ自^在なるところなり、洞山の用ゐるとは天地遙かに隔る也。

(此の古則は近くは傳燈錄第八南泉章に見へたり。土地神の覷見のことにつき、洞山土地神の則と比對して參究すべきものなり。此の古則に對し、玄覺は什麼の處か是れ土地の神に一分の飯を下すと評し、雲居の錫は、是れ伊を賞するか伊^カを罰するか、只土地前に見るが如きは是れ南泉か是れ南泉ならざるかと云へり。爰等はお互ひに參究すべき處なり。)

第九十八則 西院錯

第一節 垂示

垂示云收因結果。盡始盡終。對面無私。元不曾說。忽有箇出來。道。一夏請益爲什麼。不曾說。上待。爾悟來。向。爾道。且道。爲復是。當面諱却。爲復別有。長處。試舉看。

【讀方】 因を收め果を結び始を盡し終を盡す。對面に私なく元曾つて説かず。忽ち箇の出で來つて、一夏請益して什麼としてか曾つて説かざると道ふことあらば。爾が悟り來らんを待つて爾に向つて道ん。且らく道へ復た是れ當面に諱却すとせんか、復別に長處ありとせんか。試みに舉す看よ。

【講義】 世上流布の碧巖集を見ると、此の第九十八則の垂示は、一夏嘮々として葛藤を打す云々と先づ始めに碧巖集一百則の結末を告げる偈を一首提示して、次に且らく道へ等と更に本則を喚び出すことになつて居つて、今拙稿が最初に安した、因を收め果を結び等と云ふ頌は却つて第一百則の巴陵吹毛劔の古則の垂示となつて居る。尤も此の垂示にも百則の提唱の終局を告げる意味は充分に含まれて居るけれども、能く味ふて見ると、一夏嘮々等と云ふ垂示は其の體裁と云ひ内

容と云ひ全く第百則の公案に對するものであつて、第百則の垂示が却つて此の則の垂示と見た方が適當であるやうに思はれる。これは單に私自身の臆断ではないので、古人の中にも此の意見を持つて居られる人が幾くもある。それで今便宜のために全くあれとこれとを取り差へて第百則の垂示を爰へ持つて来て、爰の垂示を第百則の處へまはして講義をすることにした。謂ふに碧巖集は長い間多くの人に寫し傳へせられたものであるから、其の間に色々の間違ひを生じて或は彼此全く場所を異にしたり。或は後人の書き入れを本文の中に差入れたり。或は本文の幾分を脱落したりして誠に甚だしい混雜を來たすやうになつた。着語の如きは錯りの最も甚だしいものゝ一つである。今回の講義も若し出來うならば出來る丈けそれ等の錯りを正して見たいと思ふて見たけれども、更に思へば、それは頗る難事業であつて、餘程綿密に調査した上でなければ却つて人を錯まるやうなことになるであらうし。又それ丈けでも充分一書を成すに足るから、折を見て訂正碧巖集として世上に問ふて見たいと思ふから、今のところは餘程の間違は兎に角、大抵の處は從來の流布本の通りに講義をして來たことであるから、其のつもりで見下さる方が宜しい。因を收め果を結び始を盡し終をつくす。従上來、一夏九十日の間、大衆を相手に雪竇の頌古一百則を提唱して來たことであるが、愈々爰一兩日の中に大團圓千秋樂を告げることになり相成つた。對面私なく元と曾つて説す。偕其の間、横説豎説色々に説き來り説き去つたことであるが、それに

は一點の私情をも交へることなく、全く本分の儘を提起し來つたのであるから、佛釋尊が曾つて四十九年一字一説と仰せられた通り、千萬言を吐いた其の儘にして全く一字不説である。忽ち箇の出で來りて一夏請益して什麼としてか曾つて説かずと道ふあらば。爰に若し一人の人があつて拙稽に向つて、貴公は一夏九十日の間、多くの僧衆に請益を許して、意に従ひ口にまかせて、雪竇の頌古一百則を種に一代藏經も千七百則の語頭公案も悉く説き盡し説き去つておきながら、今となつて元曾つて説かずなどは一體どう云ふわけであるかと問ふて來るならば、圓悟は其れに答へて備が悟り來るを待つて備に向つて道はんと答へるより外はない。今まで幾くたびも申して來た通り。此の事に限つては、到底他人に教へてもらふことも、又教ゆることも出來ないのであるから、人人各自に脚實地を踏んで、冷い熱いを自知自得する時になれば、自づと此の曾つて説かずと道ふ味ひがわかることであるから、其の時節をまつより他に仕方はないのである。且らく道へ又是れ當面に諱却すとせんか復た是れ別に長處ありとせんか。それならば其の一夏の請益中に曾つて説かずと云ふのは、何ぞ説いては諱にふれるやうなことがあつて、それがためにとかないのであるか。或は又しは、其の説かないところに特別に尊いところでもあると云ふのであるか、其この處は、試みに擧す看よ。この天平兩錯の話を參得して見たならば自然に會得が行くであらうから、能く參究して見るが宜しいと本則を喚び出したのである。

たつもりであるから、従つて諸方幾多の宗匠たちをも輕蔑して見て居られたやうである。此の則の事實もその時分のことであると思はれる。此の氣焔の意味は今の世の中に佛法を會したものは絶えてない。古則公案を擧示することを知つたものさへ一人もないと云ふのである。

二。西院。汝州西院の思明禪師は寶壽院の延沼和尚の弟子であるから即ち臨濟大師の孫であつて、鎮州寶壽院の開山始祖となつた人である。

三。漏逗少ならず。イヤハヤお籠末千萬な御説であると云ふ。

四。道の漢是は則ち是なれども靈龜尾を曳くを争奈せん。一應は御尤もな御説の様であるけれども、尻あとの見へるのは感心致しませんと云ふのであるから、一應は天平和尙の怪氣焔が時弊に適中して居ることを認めて、然しそう仰せられる御自分は未だ垢ぬけが出来て居ないやうであると云ふたものである。

五。鏡鈎搭索し了れり。もう是れて天平の胃は西院の熊手に引きかけられてしまつたと云ふ。

六。着。それ見る熊手に引きかけられてしまつたと冷やかす。

七。兩重の公案。平生の高言が一重の失敗で今の擧頭が兩重の失敗である。

八。西院云く錯。オツと錯つたぞと云ふのであるが、いつも申す通り此の錯と云ふ言葉につきまとうてはならぬ。咄でも三十棒でも喝でも何でもよいのである。

九。也た須らく是れ體裡に鍛過して始めて得べし。これは西院の機鋒を讚嘆したもので、西院の此の勘破は到底尋常一様のものでは出来ることではないので、實に百鍊の功を積んだ本分の衲僧でなければ出来ぬことであると云ふのである。

一〇。劈腹剗心。これは實に西院老漢が五臟心肝をうちあけて爲人せられたもので、實に大慈大悲の提携であるぞと云ふのである。

一一。三要印開して朱點穿し未だ擬議を容れずして主賓分る。三要印開と云ふに付ては第三十八則の本則の着語の三要印

開して鋒銚を犯さずとあつた處で申して置いた。詳しいことは臨濟錄の講義にゆづるとして、ザツと申すと。この語は臨濟大師が、或る時の上堂に、一人の僧が大師に向つて如何なるか是れ第一句と問ふたのに對して答へられた言葉で、臨濟錄には朱點側つとなつて居る。三要印開は即ち宗乘の三支三要を印判にたとへて、凡そ印判と云ふものは朱肉をつけて押しさへずれば擬議に迷らずして誰れがやつても直ぐにハツキリと形がついてよく分ると云ふので、西院の錯と云はれたのが實に能く臨濟大師の面影をあらはして居ると稱揚したものである。

一二。已に是れ中前後。イヤあとさきどつちつかずの働きであると云ふ。

一三。道の漢泥裏に土塊を洗ふ。愈々出で、拙くなることと云ふのである。

一四。劈腹剗心。實に深切の蘊奥をつくした腹一杯の提撕であると讚嘆する。

一五。人皆喚んで兩重の公案となす殊に知らず水を水に入りに似て金を金に博ゆるが如くなることを。前の錯と今の錯とを別物に考へてはなりません。只是れ一等の錯であつて、先にあつた池の水と後に入つた池の水とが同一無二の水であるやうなものである。

一六。依前として落處を知らず。どこ迄も悟りの悪い男では程指示せられてもまだ讀めぬらしいと云ふのである。

一七。展轉して摸索不着。進んだり退いたりその様なことでは到底摸しあてられるものではない。

一八。前箭は猶ほかるく後箭は深し。前の兩錯の箭よりも今度の一箭は一層深く五臟心肝を射透したやうであるに、それでもまだ痛みが知れないのかと云ふのである。

一九。錯つて驢鞍橋を認めて喚んで爺の下領と作す。これは驢馬の鞍の鞍骨は人間の骸骨の下領のやうな形をして居るか、それを或る頓馬者が見て此れは拙者の父の下領で御坐ると云ふたと云ふことであるが、丁度その位の大間違であると云ふのである。

二〇。慙慙の衲僧に似たらば千箇萬箇を打殺するも什麼の罪かあらん。天平の様な質坊主は幾ら打ち殺した處で少しも支

- し障へはないと云ふのである。
- 二一。雪上に霜を加ふ。幾たび言ふも同じことぞと云ふのである。
 - 二二。錯つて定盤星を認む。天平は自分免許の偽悟りを杓子定規にして居るものであるから、折角資の山へ入りながら、よう得ずして出て往つてしまつたのであると云ふ。
 - 二三。果然として落處を知らず。案の定西院の落處を認め得ずして往つてしまつたと云ふのである。
 - 二四。軒が知る備が鼻孔別人の手裡にあり。天平は到當西院の處にせられてしもうたから、死ぬも生きるも西院のなまけにすぎるより外はない。
 - 二五。西院尋常脊梁の硬きこと鐵の如し。西院は實に鐵脊梁の大丈夫であると云ふのである。
 - 二六。當時何ぞ趕ひ將ち出し去らざる。且らく這裏にあつてなど、手緩らいことを云ふて居らずに、打ち擲つて逐い出してしまへば宜しかつたにと云ふのである。
 - 二七。也た納僧に似たり。一寸見た姿は納僧には似て居るけれども、いづれカマシに過ぎないであらう。
 - 二八。似たることは則ち似たり是なることは未だ是ならず。似ては居つても雪と擲との相違であると云ふ。
 - 二九。貧兒舊債を思ふ。貧乏人が古借金を思ひ出したやうであると擲掇する。
 - 三〇。也た須らく點過すべし。然し改めて彼の兩錯を點検して見るも宜しからう。
 - 三一。我れ當初行脚の時に等。これは西院の後悔話であつて、大體の意味は私が未だ行脚して居つた時代に、西院の思明長老の處へ往つた時に、西院が拙僧に向つて兩度遠錯と申されたことがある。其のなり西院が此れは誰の錯ちと申されたがら、其れは私の錯であると言へたけれども、今思ふて見れば、あれは其の時に始めての錯ではなかつたので、私が最初行脚に出掛ける時に、已に早や錯と言ひ了つてあつたのであるから、我が錯は即ち蓋天蓋地の錯であるぞと自分の門下生に對してすらも徹頭徹尾自點胸をやつたので、つまり天平が昔の失策を失策とも思はずに自分免許の似而非悟を得意がつて居る處

を雪寶が同じやうな一類のものゝために誡めとして拈提せられたものである。

三二。道の兩錯を争奈何せん。早く自ら知つたと云ふ自分の錯はさて置いて。一體に貴公は西院に兩度遠云はれた錯をどうするつもりであるぞと抑へたのである。

三三。千錯萬錯も没交渉を争奈せん。自分免許の錯がどの位澤山あつたところで、西院の兩錯とは千萬里の隔りであると云ふのである。

三四。轉た見る耶當として人を愁殺せしむ。諸君はどう見るかしらんが。某甲などは餘りに氣の毒で見て居られんとスツカリ排斥してしまつたのである。

第三節 本則提唱

天平和尚行脚時參西院。常云。莫道會佛法。竟箇舉話也無。下語云。自尿不覺臭。

根本の上には何事を會せうぞ。自瞞して云はれたなり。去れども奥の働きを見かけて茲より落すなり。

一日西院遙看召云。從瀟。下語云。鏡鈎搭索。探掌影草。掃草瞻風。

天平を見届けんとなり。從瀟は天平の名なり。

平舉頭。下語云。迷己認影。

西院云、錯。下語云。無孔、鐵鏈當面擣。

本分上には問ふすることも無きを、口ききなどをして問着したは錯りなりと爲人したぞ。辨じ難き大事の辨なり。

平行三兩歩。下語云。脚跟不點地。一死不三再活。脚不踏實地。

西院又云。錯。無孔、鐵鏈重下擣。一點水墨兩處化龍。

前に錯と云ふて又茲で錯と云はれたところが兩處化龍なり。これも本分を爲人して云はれたなり。

平近則。下語云。倒退三千里。

いづかたへも行けとなり。

西院云。適來這、兩錯是西院、錯是上座、錯。下語云。捉禪見肘。

平云。從漪錯。下語云。至不知非不足覺。

錯は心得へても句中を見はずしたぞ。

西院云。錯。下語云。兩三回句尤毒。

前より爰は猶も恐ろしいぞ。毒とは句中を云ふぞ。此の錯は從漪の錯は錯まりちやと云ふ錯なり。

平休去。下語云。弓折箭盡。

力盡きて休め去つたなり。

西院云。且在這裏過夏。待共上座商量。這兩錯。下語云。憐兒不覺。

天平を助けて憐んで云へり。兒を憐れむがために其の醜を覺へざるなり。

平當時便行。下語云。可惡可傷。

西院の慈悲爲人して仰せられたとも遂に心得ずして便ち出て行つたものなり。

後住院謂衆云。我當初行脚時。被業風吹到。思明長老處。連下兩錯。

更留我過夏。待共我商量。我不道什麼時錯。我發足向南方去時。早

知道錯了也。下語云。蝦跳不出斗。

錯をば知つても句中を見はずした程に蝦跳不出斗となり。又云く、天平の隨分と思ふて云はれたとも、向上の眼から見ればラドラズぞ。此の古則は西院の兩錯と云ふ一段で折角誦詠の祕曲なり。思明は西院の名なり。

第四節 本則評唱和譯

思明先づ大覺に參じ。後に至りて前の寶壽に承け嗣ぐ。一日問ふ。化城を踏破し來るの時如何。

壽云く、利劔は死漢を斬らず。明云く斬。壽便ち打つ。思明十回斬と云ふ。壽十回打して云く、この漢甚の死急を着てか箇の死屍を將つて他を痛棒に抵すと云ふて遂ひに喝出す。其の時一僧あり、寶壽に問ふて云く、適來問話底の僧甚だ道理あり。和尚方便して他を接せよ。寶壽亦打つてこの僧を趕ひ出す。且らく道へ、寶壽亦この僧を趕ふ。唯當さに他是と説き非と説くと道ふべし。且らく別に道理ありや意作麼生。後來俱に寶壽に承け嗣ぐ。思明一日出で、南院に見ゆ。院問ふて云く、甚れの處よりか來る。明云く許州より來る。院云く什麼をか將ち得て來る。明云く、箇の江西の剃刀を將ち得たり和尚に獻與せん。院云く既に許州より來る。甚に因つてか却つて江西の剃刀ある。明院の手を把りて拵一拵す。院云く、侍者收取せよ。思明衣袖を以つて拂一拂して便ち行く。院云く、阿刺刺阿刺刺。天平曾つて進山主に參し來る。他諸方に到つて些の蘿蔔頭の禪を參得して肚皮裏に在くがために、到る處に便ち輕しく大口を開いて道ふ。我れ禪を會し道を會すと。常に云く、道ふこと莫れ佛法を會すと。箇の舉話の人を覓るに也た無しと。屎臭氣人を薰す。只管輕薄を放つ。且らく諸佛未だ出世せず。祖師未だ西來せず。未だ問答あらず。未だ公案あらざる己前の如くんば、還つて禪道ありや。古人事止むことを獲ずして機に對して垂示す。後人喚んで公案の因縁となす。世尊の拈花し玉へば迦葉微笑す。後來阿難迦葉に問ふ。世尊金剛を傳ふるの外別に何の法をか傳ふ。迦葉云く阿難。阿難應諾す。迦葉云く、門前の刹竿を倒却し

着せよと。只未だ拈花せず阿難未だ問はざる己前の如くんば、甚の處よりか公案を得來らん。只管に諸方冬瓜の印子に印定し了られて便ち道ふ。我れ佛法の奇特を會す人をして知らしむることなかれと。天平正さに此くの如し。西院に呼び來つて兩錯を連下せられて直ちに得たり周章惶怖して分疎不下なることを。前へ村に構らず後へ店に迭らざることを。有る者は道ふ箇の西來意を説くも早く錯り了れり。殊に西院這の兩錯の落處を知らず。諸人且らく道へ什麼の處にか落在する。所以に道ふ他活句に參じて死句に參せざれど。天平頭を擧ぐ。已に是れ二に落ち三に落ち了れり。西院云く錯。他却つて當陽の用處を薦得せず。只我が肚皮裏に禪ありと道ふて他を管すること莫くして又行くこと三兩歩す。西院又云く錯。却つて舊に依つて黒漫々地なり。天平近前す。西院云く、適來の兩錯是れ西院が錯か是れ上座が錯か。天平云く、從流が錯と、且得沒交涉。已に是れ第七第八頭にし了れり。西院云く、且らく這裏に在つて夏を度り上座と共に這の兩錯を商量せんを待てと。天平當時便ち行く。似たることは則ち也た似たり是なることは則ち未だ是ならず。也た他不是とは道はず。只是れ趕へども上らず。然も此くの如くなりと雖も却つて些子衲僧の氣息あり。天平後に院に住す。衆に謂つて云く、我れ當初行脚の時業風に吹かれて思明和尚の處に到るに連りに兩錯を下さる。更に我を留めて夏を度つて我と共に商量せんことを待しむ。我れ恁麼の時錯と道はず、我れ發足して南方に向つて去りし時早く知んぬ錯と道ひ了れることを。

この漢也た慈だ道ふ。只是れ第七第八頭に落つと。料掉として没交渉。如今の人他の發足して南方に向つて去りし時早く知んぬ錯と道ひ了ると道ふことを聞いてなり。便ち去つて卜度して道ふ未だ行脚せざるの時自ら許多の佛法禪道なし。行脚するに至るに及んで諸方に熱瞞せらる。未だ行脚せざる時も地を喚んで天と作し山を喚んで水と作すべからず。幸ひに一星事なしと。若し總に恁麼に流俗の見解を作さば何ぞ一片の帽を買つて戴いて大家に時を過ぎさる。什麼の用處か有らん。佛法は是れ這箇の道理にあらず。若し此の事を論せば豈に許多般の葛藤あらんや。爾若し我れ會つて他會せずと道ひて一擔の禪をかついで天下を遶つて走るとも、明眼の人に勘破せられて一點も也た使ふことを得ざらん。雪竇正に此くの如く頌出す。

【字解】一。大覺。魏府の大覺禪師と申して臨濟大師の法嗣二十二人中での高德である。

二。寶壽。鎮州寶壽の延沼禪師と申して同じく臨濟の法を嗣いだ人で。機縁は傳燈錄十一卷目に見えて居る、一日間化城を踏破し來る時如何。此の因縁は會元第一によると寶壽延沼和尚の章に見えて居るけれども、傳燈錄の方では、其の弟子の第二世寶壽和尚の條に見えて居る。碧巖は會元の説に依つたものと見へる。

三。思明。一日出でて南院に見みゆ。南院は汝州の寶應和尚と申して即ち魏府興化寺の存獎和尚の法を嗣いだ南院の第一世慧願禪師のことである。此の因縁は類則として參究すべき處であるから。次節を見るが宜しい。

四。天平。曾つて焦山主に參し來る。焦は進の字の間違ひて即ち蕪州清谿山の洪進禪師のことである。禪師は法を羅漢院の桂琛禪師に嗣いだ人であるから。即ち法眼禪師の法兄弟弟であつて、玄沙宗一大師の孫に當る人である。

五。他諸方に至つて些の蘿蔔頭の禪を參得して等。これは天平和尚は本來餘程自點胸な我慢の強い人であつたものである

から、諸處の宗匠を歴訪して謂ゆる高腹虚頭の禪を參得し、之れを腹に在いて居いて自分には非常に立派な悟りが開けたつもりで、従つて大方の宗匠たちをも輕蔑して至る處に大口をたいて我れ禪を會し道を會したと自稱し、又常に今の世の中に佛法を會したものは絶えてない。古則公案を擧示することを知つた者さへ一人もないと大氣焔をばかれたと云ふのである。

六。屎臭人を薰す。實に悟り臭くて鼻もちもならぬと唾棄したのである。

七。諸方冬瓜の印子に印定し了られて等。冬瓜の二字を一本に蘿蔔に作つてある。冬瓜なれば京都で鴨瓜と稱する南瓜のやうな實のなる野菜であり、蘿蔔ならばカブラのことであるが、何れにしても虚頭の禪を指したもので、天平の自分免許のお悟りを申したものである。

八。直ちに得たり周樟惶怖して分疎不下なることを。天平は口では大きなことばかり云ふて居るけれども、元來が空腹高心の生悟りであるから、一度西院老漢の勘檢をうくるや實に周樟狼敗とアハテフタメいて其れに對して申し譯けよう出来ない様な醜體を暴露して、前へも後へも一步も進むことも退くこともならぬやうになつたと云ふのである。

九。天平頭を擧す既に二に落ち三に落ち了れり。若しも作家の漢ならば此で衲僧の機鋒をあらはさなければならぬところであるに、喚びつけられて平々凡々に頭をあげるやうではもう駄目であると評するのである。

一〇。只我が肚皮裡に禪ありと道ふて等。こゝが何處迄も天平の自點眼なところで飽くまでも自分免許の生悟りをふりまはして行くこと兩三步と活機輪を轉するやうな形を見せたと云ふのである。

一一。且喜没交涉已に是れ第七第八頭にし了れり。天平はイヤ其れは拙者の錯で御坐るなどい、ど、迄も自分免許の悟りを振りまばすつもりであるか、イヤハヤお話にもならん話して、丸きり聳者が人の話を聞いて一向わかりもせぬのに他人が笑ふて居るのを見て自分も笑ふて見せるやうで實に何とも評のして見やうのないことである。

一二。只是れ趕へども止らず。一本には跳不出となつて居る。天平の働きは一見處あるやうではあるけれども、活發自在に働くことが出来ないものであるから、あれほどの西院の深い慈悲にも感じがなくして、何の西院かと云ふやうな我慢を逞

うして西院の會下を去つてしまつたことを申したものである。

一三。料りやうたく 掉たうとして没交渉。料掉の料は計なり數なり。掉は頭なり搖なりとあるから。度々頭をふるつて肯ぜざるものゝ貌で。聞悟がイヤ／＼それではいかぬと評をせられたのである。

一四。何ぞ一片の帽を買つて等。一片の帽は烏打帽とか大黒帽とか云ふ風の在俗の者の戴く帽子であるから、そのやうなことをするならば、寧ろ町家の手代か番頭にでもなつて月日を過した方が勝しぢやと云ふのである。

第五節 類則提唱

其一 思明剃刀

思明 一日出見テ南院ニ。下語云。魚行水濁。

院問云。甚處來ニ。下語云。似タリ要スル知ニ來ル處ト。

明云。許州來ル。下語云。有レ問ハ有レ答。

院云。將チ得テ什麼ヲ來ル。下語云。路ハ從ニ平ニ處ニ。噴シ舌ニ頭ニ有リ骨ト。

明云。將チ得テ箇ノ江西ノ剃刀ヲ一ツ獻ス與ニ和尚ニ。下語云。爛泥裏ニ有リ刺ト。袖裏ニ藏ル鋒ヲ。袖裡ニ藏ル刀ヲ。

何れも同意の語なり。

院云。既ニ從リ許州ニ來ル。因レ甚ク却テ有リ江西ノ剃刀ヲ。下語云。初心ニ不レ改ム。

句中を改めずして問ふなり。

明 以テ衣ヲ袖ヲ拂ス一ツ拂ス。下語云。憤レ戰ム作家。

前は句中を押藏して働いたが、一拂したところで句中があらはれたなり。

院云。侍者收取セヨ。下語云。獅子咬ム人ヲ不レ露ハ牙ヲ。

明云。阿刺々ト。下語云。中ニ毒ニ者ハ知ル毒ノ用ヲ。作家々々。

互によく句中を知りて劣りこもなく働いたなり。中ニ毒ニ者ハ知ル毒ノ用ヲと云ふ句は知音の方に備るなり。阿刺々は句中をさしとをすことなり。

其二 世尊拈華

世尊拈華。下語云。柳綠花紅。桃花紅。李花白。

心法無心のところを、花の如く有に似て無いものちやと云ふことを大衆に知らせうとて拈華せられたなり。

迦葉微笑。下語云。桃花ハ咲ク春風ニ。

世尊の心法無心の處を示されたを迦葉のやがて心得て微笑せられたぞ。これより奥は第十五の批判に明かなり(第拾五則の類則下迦葉利竿の條を見よ)。

【請益】 世尊拈華。下語云。當機觀面。八萬人の大衆は今日何たる大慈大悲なる説法があらうぞと思ふて頭を聚めた來機に當つて、爾等が思慮分別する處の萬法は唯一枝の花の無心なると同じことよと直指して示したなり。迦葉微笑。下語云。觀面當機。無心のところを心得て咲ふたは觀面ぞ。佛語に句中はなければ、祖師禪より轉語して佛語をオツ取つて見たなり。是れを轉語の機關と云ふなり又轉作の機關と云ふは、或は拂子を取り、或は拄杖を舉揚して龍と化し蛇と化すなど、云ふて、學者をかけたはかつて見るを云ふなり。轉語の機關を轉作の機關と云ふても可なり。轉作の機關を轉語の機關と云ふも可なり。されども右に書き分くる如く、轉作の機關と轉語の機關は別なり。

第六節 頌

禪家流。漆桶一。愛ニ輕薄。也。有。些。子。呵。佛。滿。肚。參。來。用。不。着。只。宜。有。用。處。方。木。參。他。同。堪。悲。堪。笑。天。平。老。天。下。納。僧。跳。不。出。不。怕。却。謂。當。初。悔。行。脚。前。錯。了。也。踏。破。草。鞋。堪。作。錯。錯。是。什。麼。雪。寶。已。西。院。清。風。頓。銷。鏢。西。院。在。什。麼。處。何。似。生。莫。道。何。用。一。筆。勾。下。錯。錯。錯。下。名。言。了。已。西。院。清。風。頓。銷。鏢。西。院。在。什。麼。處。何。似。生。莫。道。亦。須。倒。退。三。千。里。始。得。於。復。云。忽。有。二。箇。衲。僧。出。云。錯。猶。較。些。子。雪。寶。錯。何。似。天。平。錯。西。院。又。出。世。據。款。結。案。惣。沒。交。涉。且。道。畢。竟。如。何。打。云。錯。輕。薄。を。愛。す。也。た。些。子。有。り。佛。を。呵。し。祖。を。罵。る。麻。の。如。く。粟。に。似。たり。滿。參。肚。來。つ。て。用。不。著。只。宜。し。く。用。處。有。る。べ。し。方。木。は。圓。孔。に。返。せ。ず。開。察。も。他。と。同。參。也。悲。む。に。堪。へ。た。り。笑。ふ。に。堪。へ。た。り。天。平。老。天。下。の。衲。僧。も。跳。不。出。旁。人。の。眉。を。攪。む。る。を。怕。れ。ず。也。た。人。の。鈍。問。を。得。たり。却。つ。て。謂。ふ。當。初。悔。ら。く。は。行。脚。し。た。る。こ。と。を。未。だ。行。脚。せ。ざ。る。日。前。に。錯。し。了。り。草。鞋。を。踏。破。し。て。何。の。用。を。か。作。す。に。堪。へ。ん。一。筆。に。勾。下。す。錯。錯。什。麼。と。道。ふ。ぞ。雪。寶。既。に。錯。つ。て。名。言。を。下。し。了。り。西。院。の。清。風。頓。に。銷。鏢。す。西。院。什。麼。の。處。に。か。有。る。何。似。生。道。ふ。こ。と。莫。れ。西。院。の。み。と。三。世。の。諸。佛。も。天。下。の。老。和。尙。も。亦。た。須。ら。く。倒。退。三。千。里。し。て。始。め。て。得。べ。し。斯。に。於。いて。會。得。せ。ば。爾。に。放。す。天。下。に。橫。行。す。る。こ。と。を。復。た。云。く。忽。ち。箇。の。衲。僧。あ。つ。て。出。で。錯。と。云。は。ん。一。狀。に。領。過。せ。ん。猶。ほ。些。子。に。あ。た。れ。り。雪。寶。が。錯。は。天。平。の。錯。に。何。似。ぞ。西。院。又。出。世。す。款。に。據。つ。て。案。に。結。す。總。に。沒。交。涉。且。く。道。へ。畢。竟。如。何。打。つ。て。云。く。錯。

【讀方】 禪家流。漆桶一狀に領過す。輕薄を愛す。也。た些子あり。佛を呵し祖を罵る麻の如く粟に似たり。滿

肚參し來つて用不著。只宜しく用處あるべし。方木は圓孔に返せず。開察も他と同參也。悲むに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。天下の衲僧も跳不出。旁人の眉を攪むるを怕れず。也。人の鈍問を得たり。却つて謂ふ當初悔らくは行脚したることを。未だ行脚せざる日前に錯し了り。草鞋を踏破して何の用をか作すに堪へん。一筆に勾下す。錯錯。什麼と道ふぞ。雪寶既に錯つて名言を下し了り。西院の清風頓に銷鏢す。西院什麼の處にかある。何似生。道ふこと莫れ西院のみと三世の諸佛も天下の老和尙も亦た須らく倒退三千里して始めて得べし。斯に於いて會得せば爾に放す天下に横行することを。復た云く。忽ち箇の衲僧あつて出で、錯と云はん。一狀に領過せん。猶ほ些子にあたれり。雪寶が錯は天平の錯に何似ぞ。西院又出世す。款に據つて案に結す。總に沒交渉。且く道へ畢竟如何。打つて云く錯。

【字解】 一。漆桶一狀に領過す。イヤ誰も彼も漆桶坊主ばかりであるから衆人同罪であると、蕩々たる禪家流を評したものである。漆桶は黒漆の桶であるが眼鼻もつかぬデモ坊主のことである。
 二。也。た些子あり。處が其の漆桶坊主の中にも又幾分見識のありそうな者が無いにも限るまい。
 三。佛を呵し祖を罵る麻の如く粟に似たり。大層な空見識の徒が多くて釋迦や達磨を奴僕の如く思ふて居る手合が少くないと云ふので、當時の虚偽な禪弊を諷められたものである。
 四。只宜しく用處あるべし。何處ぞで何かの用に立たなくては參し來つた效がないではないかと云ふ。
 五。方木は圓孔に返せず。然しながら、最初から輕薄なものは到底誠實の用には立たないのである。
 六。開察他と同參。雪寶禪師に向つて、サテ貴公も其のお仲間と見へると冷かしたものである。
 七。天下の衲僧も跳不出。此れは只に天平老計りに限つたことではないので、滿天下の禪家者流の中で此の悲笑を免るゝも

のは恐らくは少ないであらうと云ふのである。

八。旁人の眉を攢むることを怕れず。他人に厭かられるのも知らずに自點胸の空我慢を逞くして居る様は如何に面憎いものである。

九。也た人の鈍悶を得たり。悶は愁なりであるから、何となく心が悶へ悲しむことで、即ち自點胸を逞くましくして居るのを見ては、如何にもはがゆくて、又氣の毒な感が起ると云ふのである。

一〇。未だ行脚せざる已前に錯り了れり。發足の時に錯と云ふのは遅い。其の已前にハヤ錯り了つて居るのである。

一一。草鞋を踏破して何の用をが作すに堪へん。態々行脚などに出かけて餘計な草鞋などを費やすにも及ばぬことであると擲論したものである。

一二。一筆に勾下す。それは消してしまつたがよからうと云ふので天平を評したものと見へるが、又雪竇が此の一句で以つて天平を彈呵し盡した景況と見ることも出来る。

一三。什麼と云ふぞ。此の兩錯は聞き漏してはならぬぞと云ふのである。

一四。雪竇已に錯つて名言を下し了れり。本來言詮不及のところへ向つて、錯々だの咄々だのと四の五の餘計のことを云ふのはハヤ間違つて居る。

一五。西院什麼の處にか在る。已に銷鑿して跡を絶つてしまつたから、丸きり其の行衛が知れないと云ふのである。

一六。何似生。然らば其の銷鑿した様子は何に似て居るであらう。

一七。道ふこと莫れ西院のみと三世の諸佛も天下の老和尚も亦須らく倒退三千里して始めて得べし。イヤ西院和尚ばかりではない。此の雪竇の兩錯に遇ふては三世の諸佛歴代の祖師、近くは天下の老和尚も只徒足で逃げ出さうより外はあるまい。

一八。斯に於いて會得せば爾に許す天下に横行すること。若し此の雪竇の錯々が會得が出来れば、それこそ虎に翼を生じ蛟龍の水に靠つたが如くで宇宙萬象皆手の中にあつて自由自在であらう。

一九。一狀に領過せん。それは同罪であるから同じ刑罰に處するまでのことである。

二〇。猶ほ些子に較れり。然し其の錯では未だ十分とは許せないと云ふのである。

二一。西院又出世す。雪竇の今の口吻は丸きり西院和尚が再來して來られたやうに思はれる。

二二。款に據つて案に結す。雪竇判官の宣告は誠に公明正大な判決であると稱揚する。

二三。總に没交渉。然し何とも角とも手のつけて見やうもないことである。

二四。且らく道へ畢竟如何。サア會下の大衆方。何んと合點が往くかなと一歩して。

二五。打つて云く錯。ドシンと一棒下に天平西院は愚か、雪竇の兩錯も一切掃蕩し盡したから、其のお陰に依つて世の中治まりて天下は再び安穩無事の幸福をうけるやうになつた。

【講義】 禪家者流輕薄を愛す。都べて何事によらず誠實眞摯でなければならぬことであるが、別けても箇の事を究明すべき佛祖の大道は、決して輕々薄々なる皮相觀では往けるものでないのである。然るに今時の禪家者流をながめて見るに、都べてが浮き足で、只徒らに言語伎倆の末に拘泥し、新を好み奇をてらうて眞實に此の事を究明するものは實に寥々として暗夜の星の如くであるとは、何ともハヤ痛心に堪へぬことである。満肚參し來りて用不着。東奔西走。諸方の宗匠を訪ねて肚一杯飽くまで參禪して來たつもりであらうけれども、皆悉く輕々薄々で少しも誠實がないものであるから、愈々臘月三十日のサア爰ぞと云ふ場合に臨んでは何の役にも立つものではない。悲しむに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。偕この西院の思明和尚があればほどまで親切に涙の

こぼれる程のありがたいお諭しをせられたけれども、自分免許の似而非悟りにどこまでも自點胸て居る天平は、遂々我慢の角が折れずして失策の上にも失策を重ねたありさまは、傍から見ても氣の毒なことでもあれば又可笑もある。却つて謂ふ當初悔ゆらくは行脚したるを。これは天平が住院の後に門下の諸生に向つて、我恁麼の時の錯と道はず我れ發足して南方に向つて去りし時に早く知る錯と道ひ了れることを。と申したのを評したもので、昔の失策を失策とも思はずに相も變らず自點胸な馬鹿なことを云ふて居ると云ふのである。錯々。此れは雪竇が聲も朗かに錯なるかな錯なるかなと謠ひ出したもので、西院の清風も頓に銷鑠す。一寸見れば如何にも雪竇が自慢したやうであるけれども、そうではないので、彼の楞嚴經の中に一人ありて眞を發して源に歸すれば十方虚空も銷殞すとあると同じ味ひで、即ち雪竇が西院の兩錯をば體得してそれを吾が物として更にそれを活動させたのであるから、十方法界峯。蓋天蓋地只此の兩錯となつて、森羅の萬象頓に銷鑠してしまつた有り様である。そこで昔し西院和尚が錯々と謠ひ出して見れば、其の颯々たは、如何にも清風颯々の佳境であるけれども、然し今爰で錯々と謠ひ出して見れば、其の颯々たる西院の清風も忽ちにして吹き止んでしまつたぞと云ふのである。復た云く、雪竇が亦言葉を改めて門下の大衆に向つて、自問自答を設けて示されたもので、忽ち箇の僧あり出で、錯と云はん。若しも此處へ一人の作家が出て来て、我れに向つて更に錯々と謠つて我が此の兩錯をば奪ひ去つ

てしまつたらどうしたものであらうぞと。先づ自問を設けて置いて、其の自答に、雪竇の錯は天平の錯に何似。拙衲が謠ひだしたあの兩錯と。天平の千錯萬錯とは是れ同であらうか別であらうかと。爰諸人辨じて見よと申されたのである。これは如何にも更に參せよ三十年と出かけねばなるまい處である。

第七節 頌評唱和譯

禪家流輕薄を愛す。滿肚參し來つて用ゆること着せず。這の漢會することは則ち會す。只是れ用不得。尋常目に雲霄を視て道ふ。他多少の禪を會得すと。烘爐裏に向つて纒かに煮る至るに及んで元來一點も使ふことを得ず。五祖先師道く、一般の人有つて參禪す。琉璃瓶裏に糞糞を搗が如くに相似たり。更に動轉することを得ず。抖擻し出さず。觸着すれば便ち破る。若し活潑々地ならんことを要せば但皮殼漏子の禪に參せよ。直ちに高山上に向つて撲し將ち來るも亦破せず亦壞せず。古人道く、設使言前に薦得するも猶是れ殼に滯ふり封に迷ふ。たとひ句下に精通するも未だ途に觸れて狂見することを免れずと。悲むに堪へたり笑ふに堪へたり。天平老。却つて謂ふ當初悔ゆらくは行脚せしことを。雪竇道く、悲しむに堪へたりと。他人に對して説き出さず。笑ふに堪へたり。他一肚皮の禪を會して更に些子を使ひ着せざることを。錯錯。這の兩錯有る者は

道ふ、天平會せざる是れ錯と。又有る底は道ふ、無語底是れ錯と。什麼の交渉かあらん。殊に知らず這の兩錯擊石火の如く閃電光に似たることを。是れ他の向上人の行履の處なり。劔に伏して人を斬るに直ちに人の咽喉を取つて命根方に斷するが如し。若し此の劔及上に向つて行得せば便ち七縱八横ならん。若し兩錯を會得せば便ち以つて西院の清風頓みに銷鏢することを見るべし。雪竇上堂に此の話を舉し了りて意に道く、錯と。我れ且らく爾に問ふ。雪竇が這の錯天平の錯に何似れ。且らく參せよ三十年。

【字解】一。目に雲霄を見て。雲霄は虚空のことであるから、諸法皆空の一遍を見てと云ふのである。

二。烘爐裏に向つて幾かに空るに至るに及んで等。斷末魔の火車來現に出遇ふては何のたしにもならぬと云ふのである。

三。五祖先師云く。圓悟老師の本師五祖法演禪師の申さるゝには、一般の人ありて參禪す。普通一般の人が辨道工夫するのを見るに恰も琉璃で、こしらへた瓶の中で燃糕を搗く様なもので到底搗き得られるものでないのである。琉璃瓶は早く云はゞガラス製の瓶と云ふ程のことで、燃糕は米や黍を粉にしてそれを蒸して作つた餅のことである。更に動轉することを得ず。琉璃瓶の中では少しでも杵を左右に動かすことも出来ない。抖擻し出さず。これは杵を擧げ振ふことであるから、即ち自由自在に動くことはならぬと云ふのである。觸着すれば便ち破る。少しでも杵を觸るれば琉璃瓶が忽ちして碎けてしまふと云ふのが、正眼の衲僧に拶着せられたならば忽ち參つてしまはばならぬと云ふのである。若し活潑々地の働きを得やうと思ふたならば、皮殼漏子の禪で、即ち彼の皮袋がどのやうに動轉しても、如何程たゞいても少しも破るゝことなく、轉々自在である如き禪に參しなればならぬ。直ちに高山上に向つて等。この皮袋はどのやうに引きづりまはしても打ちなぐつても少しも破れも碎けもしないやうに、若しこの皮殼漏子禪に參したものであるならば如何なる明限の衲子に勘檢せられても少しの滞りもなく自由自在に動くことが出来るのである。

四。古人道く等。風穴延沼禪師の申されたことで、殼に滞り封に迷ふは一色空々の處に執りついて少しの自由もきかないことを申したものである。

五。殊に知らず這の兩錯等。之れは雪竇の機鋒の格別に峻峻であることを申したもので、此の兩錯によつては、西院が會つて兩錯を下したあの如何にも清風颯々たる佳境も、忽ちにして其の清風が吹き止んでしまふたと雪竇の兩錯を讚嘆したものである。

第九十九則 十身調御

第一節 垂示

垂示云。龍吟霧起。虎嘯風生。出世宗猷金玉相振。通方作略箭鋒相拄。徧界不藏。遠近齊彰。古今明辨。且道是什麼人境界。試舉看。

【讀方】龍吟すれば霧起り虎嘯けば風生す。出世の宗猷金玉相振い、通方の作略箭鋒相拄ふ。徧界藏さず遠近齊しく彰れ古今明かに辨す。且らく道へ是れ什麼人の境界ぞ。試みに舉す看よ。

【講義】龍吟すれば霧起り虎嘯けば風生す。これは風雲互ひに交參するは、此れ天然の感應なりと申して。即ち同氣相求め同聲相應するの姿を以つて、本則の肅宗皇帝と忠國師との機々投合する様子を申したものである。出世の宗猷金玉相ひ振ふ。出世の宗猷は申すまでもなく佛法のことで、金玉相振ふは孟子に金聲玉振とある通り、我が忠國師の唱へられる所の宗乘は若し一言吐くときんば金の如くなり玉の如くに振ふて如何にも陽春白雲の曲を聞くやうな感じがある。通方の作略は鋒箭相拄ふ。これは國師が肅宗皇帝を接せられる通方の作略は、彼の弓術に堪能なる名人同士が双方から弓を射ると其の箭と箭とが途中でハツシと相拄へるやうなもので、其の間には髪を容るゝの隙もない。徧界藏さず遠近齊しく彰はれ。而して此の活機輪は淨裸々赤漉々と丸る

なりのむき出しで十方世界に其の光をかがやかせて居るから、遠いも近いも齊しくあらはして少しもくまらずところは無いのである。古今あきらかに辨ず。何時になつても判らぬと云ふことはないと云ふのであるから、前の空間的に對して今度は時間的の方面から申したものである。且らく道へ是れ什麼の境界ぞ。然らば其の境界はそも何人がどのやうに受用して居ることであらうぞ。試みに擧す看よ。其の證據には次の本則に擧揚する忠國師の如き人があるから。參究して見るが宜しいと本則を喚び出した。

第二節 本則

擧 肅宗帝問忠國師。如何是十身調御。作家君王。大唐天子也。合知。慈。國師云。
 檀越踏毗盧頂上行。須彌那呼把手共。帝曰。寡人不曾。何不領話。可惜許。好彩不。
作。什。國師云。莫認自己清淨法身。處。醉後耶當。慈。殺人。

【譯方】 肅宗皇帝忠國師に問ふ。如何なるか是れ十身調御。作家の君王。大唐の天子也。合に慈なることを知るべし。頭上の捲輪冠脚下の無憂履。國師云く、檀越よ毗盧の頂上を踏んで行け。須彌那呼に手を把つて共に行く。猶ほ這箇のあるあり。帝云く。寡人不曾。何ぞ領話せざる。可惜許。好彩分付せず。帝當時便ち喝すべかりしを更に會を用いて什麼かなさん。國師云く、自己清淨法身と認むること莫れ。然も葛藤なりと雖も却つて出身

の處あり。醉後耶當人をして慈殺せしむ。

【字解】 一。肅宗皇帝忠國師に問ふ如何なるか是れ十身調御。肅宗皇帝と忠國師のことは第十八則の國師無縫塔の古則で詳しく申して置いたから、細かなことはあれに譲るとして、順序として一言申して置くと。肅宗名は興。後に亨と改めた人で唐の玄宗帝の子代宗帝の父にあたる人である。國師の名は慧忠と申して、法を六祖大師に嗣いで詔によつて西京の光宅寺に住して居られた。肅宗二帝の帝師になつて非常な優遇をうけられたことは前にも申して置いた通りである。肅宗帝が始めて國師の門に入られたのは、未だ東宮で居られた頃のこと、此の本則の事實のあつた時分には餘程修行が進んで佛は即ち自分であつて、自分の外に佛はばないと云ふ見識に迄進んで居られたものと思はれる。如何なるか是れ十身調御と云ふは、大體佛しく申せばむづかしいことになるが、一言にして申せば如何なるか是れ佛と云ふも同じことである。十身と云ふは、大體佛教に於いて佛身のことを語るには普通法報應の三身と云ふて、無色無形の眞如法性そのものを指して法身の佛と云ひ、因位の發願修行に報いあらはれた佛身を報身と云ひ、衆生化益のために機に應じ感に報いて示現する佛身を應身と申すことであるが、更に化身を加へて四身とすることもあり。報身を開いて自受用身他受用身とすることもある。化身は即ち變化の身で衆生利益のために色々の相好を變現することである。自受用身は、佛自ら受用する處の佛身即ち佛の自受法樂の境界であるから、他から窺ひ知ることとは出来ないが、他受用身は元來衆生濟度のために現する身であるから、只一合相の姿ではなくして千差萬別種々無量の相好を現する。之れ衆生の機に千萬無量の差別があるからである。十身と云ふも畢竟此の邊から起つて來たことである。サテ十身と云ふは其の元華嚴經に説いてあることで、詳しく申せば解境の十佛行境の十佛と云ふことがある。解境と云ふは解悟照了の境界と云ふので、即ち華嚴圓教の菩薩の解領心を以つて宇宙萬有を照すときには情非情あらゆる森羅萬象悉く佛身ならざるはないから、實は千萬無量數へきれないけれども、かりに十種の佛身としてそれを解境の十佛と名けたものである。十身は即ち衆生身、國土身、業報身、聲聞身、辟支佛身、菩薩身、如來身、智身、法身、虚空身の十之れである。次に行境の十身と云ふは行境は解絶修證の境界と申して、菩薩の修行が圓滿成就した上で現する佛身である。十身とは正覺

佛、願佛、業報佛、住持佛、化佛、法界佛、心佛、三昧佛、本性佛、如意佛之れである。之れ等のことを詳細に説明する、
と、なると中々一席や二席の講話ではつきぬことであるが、今はこんなことを詮索する必要はなからうと思ふ。調御は佛の
十號の一つで、佛が一切衆生を心のまゝに自由自在に濟度なざることを調馬師が馬を調御するのになとへて佛の御號の一つ
としたものである。然し爰は要するに、只無雜作に如何なるか之れ佛と問ふたものと見れば宜しい。

二。作家の君王。如何にも御見識の高いことであると讃嘆したものである。

三。大唐の天子也た合に慙慙なることを知るべし。大唐四百餘州の天子で、お在りなさるからには、其の位の御見識は當り
前のことであると云ふのである。

四。頭上の捲輪冠脚下の無憂履。之れは天子の御正装を申したもので、今日で申せば大元師の御正装其の儘にして毘盧舍
那如來の御姿であると云ふところである。頭上の捲輪冠は天子の戴いて居られる左右の輪を捲きあげた冠のことで、無憂履
は一生破穿せざる底の御靴で即ち天下泰平にして玉體を動坐したまはぬ象によつて無憂履と申したものである。

五。檀越毘盧の頂上を踏んで行け。檀越又は檀那は梵語の陀鉢鉢底の訛略で布施主と申して布施を行ふ人と云ふ意味の言
葉である。支那は唐朝以前には有名な盧山の慧遠法師の沙門不敬王者論一卷の著がある位で、出家たる者は王者に向つて自
ら臣と稱することがないと共に、帝王に向つても陛下とは云はずに檀越とか檀那とか云ふことになつて居つた。處が宋朝以
後になると、僧史略を書いた贊寧などから臣僧とか陛下とか云ふ言葉を用ゐることになつたやうである。日本などでも弘法
大師などは賢道空海など、申して、臣とは云ふて居られぬやうである。サテ毘盧は毘盧舍那で、毘は遍の義、盧舍那は光明
照の義であるから光明遍照とか、廣博嚴淨とか譯するので、舊譯には三業滿或は淨滿とも譯してある。即ち智惠の大光明を
放つて十方徼塵世界を照すと云ので、宇宙の本體本性に奉つた尊號である。それで毘盧の頂上を踏んで行けと云ふのは、檀
那御自身が十身調御の佛陀になつたなど、云ふ其のやうな手緩い見識ではしかなかったから、其の十身の本體たる摩訶毘

盧舍那如來の頂上を踏んで、其の立脚地に立つて活動をなさられれば行かんと云ふので、謂ゆる百尺竿頭さらに一步を進めた
ところを指示せられたものである。

六。須彌那畔に手を把つて共に行く。これは國師が蕭宗の手を把つて孤峯頂上即ち須彌山へ散歩に出かけられたところを
申したものである。

七。猶ほ遺箇の有るあり。毘盧の頂上などい、そんな處はまだ、低いので、其れ以上に猶ほ遺箇と云ふ一物があるか
ら、其處迄帝を引きあげて行かればならぬ。

八。寡人不會。朕と云はずに寡人即ち徳の寡い私には會得が出来ませんと云ふのであるから、之れを以つても如何に蕭宗
が忠國師を尊敬して居られたかがわかるのである。寡人は天子の自稱である。

九。何ぞ領解せざる。分かりそうなものぢやかと云ふのである。

一〇。可惜評。これ位ぬのことが分からんでは誠に残念なことである。

一一。好彩分付せず。好彩は精細と云うも同じことで、忠國師がもつと精細に説明せられんでは會得が出来ぬのであらう
と云ふのである。

一二。帝當時喝すべかりしを。爰では是非とも大喝一聲して國師を喝破しなければならぬところであるに、帝にその活機
のないのは惜しいことである。

一三。更に會を用いて什麼か作さん。爰で會の不會のと云ふた處で仕方がないと云ふのである。

一四。師云く自己清淨法身と認むること莫れ。清淨法身は即ち摩訶毘盧舍那如來のことで、自分は自分のまゝ。人は人のま
ゝ。柳は緑のまゝ、花は紅いのまゝ。鶴の脚は長いがまゝ、鴨の脛は短いがまゝ。何の不足もなく其の儘なりで絶對である
のに、それを何不足あつて其の絶對なる自己に清淨法身だの毘盧舍那など、餘計な名前をくつつけるのであるぞ。其のやう
なことを思ふて居るのがハヤ已に自己を外にして佛を認め法身を認めて居るのでないかと、謂ゆる毘盧の頂上のふみこへ様

を指南せられたものである。

一五。然も葛藤なりと雖も却つて出身の處であり。老染心切に過ぎるけれども何處となく垢ぬけがして居ると、葛藤を打しながら然も出身の要路があつて凜然犯すべからざる機鋒のほの見へることを讚嘆したものである。

一六。酔後耶當人を懲殺せしむ。一杯氣盡であまりべら／＼饒舌せられるものであるから、まことに聞きづらいことであると云ふのである。

第三節 本則提唱

肅宗皇帝問_ニ忠國師。如何_{ナルカレ}是十身調御。下語云。向_{ツテ}鬼窟裡_ニ作_ス活計_ヲ。

十身調御は十號の一なり。教を随分と思ふて問はれたなり。

國師云。檀越踏_シ毘盧頂上_ニ行_ク。下語云。衝開碧落松千尺。

古は平生心膽向_{ツテ}人傾_ケ。落_シ草求_ム人_ヲと云ふ句を用いたれども近代改めて此くの如く下語するなり。此れは大燈國師が此の下語に御代へあつたものなり。十身調御など、理由もないことを云わうよりも本分を能く知れと云ふ處を截斷に用ゆるなり。毘盧頂上は本分なり。踏んで行くと云ふが截斷なり。國師の意には皇帝の十身調御を随分と思ふて問れたほどに其の様なことを問はうよりも、毘盧の頂上を踏んで行くと皇帝のいたみに當つて答へられたぞ。又檀越は喚び出す語なり。先師の云く、檀越と云ふたは國師の錯りかとなり。其の故は人々毘盧の頂上を踏んで行くとこそ

答ふべきにと仰せられたぞとなり。是れは一問の上を用ひて仰せられたことぞ。されど少しは先師の不可かとなり。然る時は、衝開碧落松千尺の句を用ゆるが可なり。是れは一問の上をば用ゐざるなり。此の時は檀越をよび出されたるこそ殊勝なれ。檀越の二字を嫌れたるは先師の御あやまりかと云ふなり。

帝云。寡人不會。下語云。可惜許。從_{ツテ}己逐_{ツテ}物_ヲ。一死不再活_{セズ}。一處不通兩處失_レ功_ヲ。

寡人は卑下の辭なり。

國師云。莫_シ認_ム自己_ニ清淨法身_ヲ。下語云。截斷江塵水一溪。

先師の時は土上加泥と云ふ句を用ひられたれども、近代改めて右の句を用ゆるなり。土上加泥と云ふは、爰では爲人の重なつた方に用ゆるなり。落し句にあらず。毘盧の頂上を踏んで行くと云ふたに猶も茲で爲人せられたなり。國師の答話の中自己清淨と云ふが色相。認むるなかれと云ふが截斷なり。根本の上に至つて十身調御はいらざるものよ。毘盧頂上こそよき清淨法身よと截斷して云ふなり。十身調御とは華嚴より出でたぞ。先師の云く、初問の處は忠國師に代つて我ならば高く眼をつけて看よと云ふべきなり。又二問の處で我れならば禮拜すべしと云々。不會と云はれた處を助けてなり。僧は天子を禮拜するものぢやと仰せられたなり。

第四節 本則評唱和譯

肅宗皇帝東宮に在りし時已に忠國師に參す。後來即位して之れを敬すること愈々篤し。出入迎送し躬自ら車輦を捧ぐ。一日箇の間端を致し來つて國師に問ふて云く、如何なるか是れ十身調御。師云く、檀越毘盧頂上を踏んで行け。國師平生一條の脊梁骨硬きこと生鐵の如し。帝王の面前に至るに及んで爛泥の如くに相似たり。然も答へ得て塵穢なりと雖も、却つて箇の好處あつて他道ふ備會得せんと要せば檀越須らく是れ毘盧頂上に向つて行つて始めて得べしと。他却つて薦ます。更に道ふ寡人不會と。國師後面忒怒郎當として草に落ちて更に頭上底の一句を註して云く。錯つて自己清淨法身と認むること莫れと。所謂の人人具足箇々圓成。看よ他の一放一收八面に敵を受くることを、道ふことを見ずや、善く師と爲る者は機に應じて教を設け風を看て帆を使ふと。若し只一隅を僻守せば豈に能く回互せんや。看よ佗の黃檗老善能人を接すること。臨濟に遇着して三回便ち痛く六十棒を施す。臨濟當下に便ち會し去る。表相國のためにするに至るに及んで葛藤はなはだし。此れ豈に是れ能く人の師となるにあらずや。忠國師善巧方便して肅宗帝を接す。蓋し他八面に敵を受くる底の手段あるがためなり。十身調御とは即ち是れ十種の他受用身なり。法報化の三身にては即ち法身なり。何が故ぞ。報化は眞佛に非ず。亦說法の者に非ず。法身

に據るときは即ち一片虚凝にして靈明寂然なり。太原の孚上座。揚州の光孝寺に在つて涅槃經を講す。遊方の僧あり。即ち夾山の典座なり。寺に在つて雪に阻てらる。因みに往つて講を聴く。講三因佛性三德法身と云ふに至つて廣く法身の妙理を談す。典座忽然として失笑す。孚乃ち目顧す。講じ罷んで禪者を請せしめて問ふて云く、某素と智狹劣にして文に依つて義を解す。適來講する次で上人の失笑するを見る。某必ず短乏する處あらん。請ふ上人説け。典座云く、座主問はずんば即ち敢へて説かず。座主既に問ふ、則ち言はずんばあるべからず。某實に是れ座主の法身を識らざることを笑ふと。孚云く、此くの如く解説す何の處が不是なる。典座云く、請ふ座主更に説くこと一偏せよ。孚云く、法身の理は猶ほ大虚の若し豎に三際をきはめ横に十方に亘る。八極に彌綸し二儀を包括す。縁に隨ひ感に赴いて周偏せずと云ふことなし。典座云く、座主の説不是とは道はず、只法身量邊の事を識得して實に未だ法身を識ちざるごとあり。孚曰く、既に然かも是くの如くならば禪者當に我がために説くべし。典座曰く、若し是くの如くならば座主暫く講を緩むること旬日、靜室の中に端然として靜慮心を收め念を攝して善惡の諸縁一時に放却して自ら窮究して看よ。孚ひとへに言ふ所に依る。初夜より五更に至つて鼓角の鳴を聞いて忽然として契悟す。便ち去つて禪者の門を叩く。典座曰く、阿誰ぞ。孚曰く某甲。典座咄して曰く汝をして大教を傳持して佛に代つて説法せしむ。夜半什麼としてか酒に酔ふて街に臥する。孚曰く、自來

の講經は生身父母の鼻孔をもつて抵擯す。今日より已後は更らに敢へて是くの如くならずと。看よ他の奇特の漢を。豈に只去つて箇の昭々靈々を認めて驢前馬後に落在せんや。須らく是れ業識を打破して一絲毫頭の得べきこと無かるべし。猶ほ只一半を得ることあり。古人道く、纖毫も修學の心を起さずんば無相光中常に自在なりと。但だ常寂滅底を認めて聲色を認むることなかれ。但だ靈知を識つて妄想を認むることなかれ。所以に道ふ。たとひ鐵輪頂上に旋るとも定慧圓明にして終ひに失せずと。達磨二祖に問ふ、汝雪に立ちて臂を断ち當に何の事をかなすべき。祖曰く、某甲心未だ安からず乞ふ師心を安んせしめよ。磨曰く、心を將ち來れ汝がために安せん。祖云く、心を覚むるに了に不可得なり。磨曰く、爾がために安心し竟んぬと。二祖忽然として領悟す。且らく道へ正當恁麼の時法身什麼の處にか在る。長沙云く、學道の入眞を識らざることは只從前の識神を認むるがためなり。無量劫來生死の本。癡人喚んで本來人となす。如今の人只箇の昭々靈々を認め得て、便ち瞠眼努目して精魂を弄す。什麼の交渉かあらん。只他の自己清淨法身と認むること莫れと道ふが如き、且らく自己法身の如くんば爾も也た未だ夢にだも見ざることあらん。更に什麼の認むることなかれと説かん。教家には清淨法身を以つて極則となす。什麼としてか却つて人をして認めしめざる。道ふことを見ずや。認着すれば依前として還つて不是と。咄。好し便ち棒を與ふるに。此の意を會得せば始めて他の自己清淨法身と認むること莫れと道ふことを會せ

ん。雪竇他の老婆心切なることを嫌ふ。爭奈せん爛泥裏に刺あることを。豈に見ずや。洞山和尚人を接するに三路あり。ゆはゆる玄路鳥道展手なり。初機の學道は且らく此の三路に向つて行履せしむ。僧師に問ふ、尋常學人をして鳥道を行かしむ。未だ審かし如何なるか是れ鳥道。洞山云く、一人に逢はず。僧云く如何んか行かん。山云く、直ちに須らく足下無私にして去るべし。僧云く、只鳥道を行くが如くんば便ち是れ本來の面目なること莫んや否や。山云く、閑黎什麼に因つてか顛倒する。僧云く、什麼の處か此れ學人顛倒の處。山云く、若し顛倒せずんば什麼としてか奴を認めて郎と作す。僧云く、如何なるか是れ本來の面目。山云く鳥道を行かすと。須らく是れ見て這般の田地に到つて方さに少分の相應あるべし。直下に打疊して迹を削り聲を吞ましむるも猶ほ是れ衲僧門下は沙彌童行の見解なることあり。更らに須らく首を塵勞に回して大用を繁興して始めて得べし。雪竇の頌に云く。

【字解】一。國師平生一條の脊梁骨硬きこと生戲の如し。これは國師が學人を接せらるゝに其の機其の機に應じて自由自在に接化せられることを申したもので、時には惡辣峻峻なこともあれば、時には落草爲人せられるともあると云ふのである。二。他の一放一收八面に敵をうくることは。國師の初めの答處は一放で後の答處は一收である。國師の接化は、強敵には強く弱者には弱く、其れ／＼機に相應じて働かれるから、如何なる敵に對しても自由自在であると云ふのである。三。只一隅を僻守せば豈に能く回互せんや。これは其の接化の手段が一本鎗であつたならば到底幾多無量の機に應じ時に隨つて自由自在に働くことは出来ないと申したもので、其の例として黃檗大師が臨濟を接する時と宰相の斐休を接する時と

の接化の相違を例に引いたものである。

四。太原の孚上座。前にも一兩度出たやうに思ふが、初めは出家であつて好んで涅槃經を講じられたけれども、後に教外の宗に歸して雲峰大師の法を嗣がれた人である。

五。三因佛性三德法身。三因は正了縁の三因で、三德は法身般若解脱の三德である。其の元涅槃經に説いてあることであるが、殊に天台家に於いては、三因三德と唱へて一家の重要な法相になつて居る。詳しく申せば限りのないことであるが、ツマリこれは彼の涅槃經に一切衆生悉有佛性と申して迷界の因たる吾々お互ひに、佛果衆人の相を具し居ることを説明するために、法相を開いて三因三德の義を語つたものである。正因佛性とは眞如實相の理其のものをさしたもので、了因佛性とは、其の實相の理を證する處の能證の智恵。縁因佛性とは、其の能證の智恵を助ける布施持戒等の六度の行法を申したものである。三德とは之の三因佛性が果上になれば即ち三德となるので、即ち涅槃の果體に備つて居る無量の德を煩惱業苦の三障に對して三德と分つのである。即ち煩惱に對しては涅槃に其の煩惱を斷じて眞如平等の理を觀照する般若の德がある。業に對しては、涅槃に自體本來清淨にして惑業の繫縛を離れたる解脱の德がある。苦に對しては、涅槃に其の生死の苦を離れ一切の功德法を成せる法身の德があると次第の如くに三德が具はるのである。詳しいことは爰に必要なから、今は只其の名義を釋するだけのことに止めておく。

六。古人道く纖毫も修學の心を起さずんば等。寶誌和尚の十二時の歌の語で、佛見法見を離れ一切の名相を離脱して無念無想の妙境界になれば無相光中常に自由であると云ふのである。

七。所以に道ふ鐵輪頂上等。永嘉大師の證道歌の文である。

八。長沙云く等。長沙の景岑大師の偈であつて、近くは傳燈錄の長沙章に見へて居る。

九。認着すれば依前として還つて不_レと。之れも誌公十二時の歌句であつて、たとへば自己清淨法身を認むることなかれと思國師が申されたのは、肅宗が自分が即ち清淨法身である。我の外には毘盧舍那如來はないと云ふ見識であるけれども、

此の自身即佛と云ふがハヤ大なる迷妄で、自分に何の不足があつて更らに毘盧舍那だの清淨法身だのと餘計の名をつけるのであるが、そのやうなことを思ふて居るのがハヤク己に自己の外に佛と云ふものを認め、法身と云ふものを認めて居るのであるから、未だ眞實絶對の本分にはかなはないのである。そこで認着すれば却つて依然として不是で、矢張り一種の迷妄と申しても支し障へはないのである。

一〇。洞山和尚等。曹洞宗の大祖洞山の悟本大師が申されたことであつて、支路は座臥經行支路にあらざるなして、吾々お互が日用光中喫茶喫飲。朝起夜寢するそれが即ち支路で即ち法性の理に順し法本に契いたる幽玄微妙の路程である。鳥道は舉足下足鳥道殊なることなし。鳥が西から東へとび、北より南にとぶを見るに、ソレあれが今とんだあとがあると云ふ蹤跡がない。全く没蹤跡である。そこが即ち本來の面目であると云ふのである。展手は即ち暫く初心のために無言に言を起し無説に説を設けて種々に爲人誘引することであるが、今は其の中の鳥道の鳥道は猶し虚空の如しと云ふ全く没蹤跡のところを類則として引いたものである。

第五節 頌

一國之師亦強名。何_レ必_レ空花水月。南陽獨許振嘉聲。果_レ然坐斷要津。千箇萬箇大
唐扶得眞天子。可_レ憐生。接得_レ曾踏毗盧頂上行。天_レ上天下。上座作_レ麼去。直得_レ鐵
擊碎黃金骨。暢_レ快平生。天地之間更何物。身_レ擔荷。撒_レ沙撒_レ土。三千刹海夜
沉沉。高_レ着_レ眼。把_レ定_レ封_レ臘。爾不知誰入蒼龍窟。咄_レ三十棒。一棒也少不得。拈_レ了也。還_レ會麼。
法身。待_レ入_レ鬼窟裏去。那_レ爾。

【讀方】 一國の師といふも亦強で名く。何ぞ心とせん。空花水月。風過ぎて樹頭ゆるぐ。南陽獨り許す嘉聲を振ふこととを。果然として要津を坐斷す。千箇萬箇の中一箇半箇を得がたし。大唐扶け得たり眞の天子。可憐生。接得して何の用をか作すに堪へん。曾つて毗盧頂上を踏んで行かしむ。一切の人何ぞ慳慳にし去らざる。直ちに得たり天上天下。上座作廢生が踏まん。鐵鎚擊碎す黄金の骨。平生を暢快す。已に言前に在り。天地の間更に何物ぞ。茫々たる四海知音まれなり。全身擔荷。沙を撒し土を撒する。三千刹海夜沈々。高く眼を着けよ。封疆を把定す。爾が鬼窟裡に入り去らんを待つ。知らず誰か蒼龍窟に入る。三十棒一棒も也た少くことを得ず。拈了也。還つて會すや。咄。錯つて自己清淨身と認むること莫れ。

- 【字解】 一。何ぞ必とせん。 慈恵禪師に對して、一國の師と申し上げるもこれ假りに名づけるまでのこと其の實盡十方無碍光如來と云ふても、土瓶と云ふても乾屎塚と名けても少しも支し障はないのである。
- 二。空花水月。 畢竟するに總べての名字稱號は空花水月の如く眞に存在するものではないのである。空花は眼病の人が空中に花を見ると云ふので其の實無なるものであるけれども病のために翳が見へる。水月は水中に映つた月のことであるから是れも勿論實體のあるものではないのである。
- 三。風過ぎて樹頭搖ぐ。 風がふけば草木の偃すは當り前のことであると同じく、其の身に徳さへ具はれば人から色々の尊敬をつけて崇んで來るわけである。
- 四。果然として要津を坐斷す。 國師の道風高くして比倫を絶して居ることを讚嘆したものである。
- 五。千箇萬箇の中に一箇半箇を得難し。 此くの如き大徳は實に千萬人に一人も得がたいことである。
- 六。可憐生。 國師に扶けられて眞の天子になつたとは誠に意氣地のない話で憐むべしとも氣の毒とも云ふて見やうのないことである。

- 七。接得して何の用をか作すに堪へん。 そのやうな俗漢を接得したところで何の所詮もないことである。
- 八。一切の人何ぞ慳慳にし去らざる。 其れば只に大唐の天子に限つたことではない。誰人と雖も毘盧の頂上を踏んで行かればならぬのである。
- 九。直ちに得たり天上天下。 毘盧の頂上さへ踏みしめるようになれば、それこそ天上天下唯我獨尊である。
- 一〇。上座そもさんか踏まん。 貴公等はどうぢやな踏めるかなと門下に一拶せられたものであるが、毘盧の頂上を踏むと申したとて。何も奈良の大佛の頭の上でとんぼかへりをするこゝではありませんぞ。頭上漫々脚下漫々で盡法界唯一處として毘盧の頂上ならざるはないのであります。
- 一一。平生を暢快す。 借々氣味のよいこと。之れで溜飲が一度にさがりましたと團悟が大賛成せられたるものである。
- 一二。已に言前に在り。 今更らに云ふまでもないことで、團悟などは疾の昔に溜飲を下げてしまつて今一睡して起きた計りの處である。
- 一三。茫々たる四海知音まれなり。 爰に至つては天上天下唯我一人で前に釋迦なく後に彌勒なく、獨り虚空を枕にして晝寝の快をほしむにすることが出来る。
- 一四。全身擔荷。 ソレでは雪竇貴公一人が脊負つて立つのかいと擲論して、能くも苦にならぬものぢやと感心する。
- 一五。沙を撒し土を撒す。 然しそのやうなことを云ふのがハヤ國師の本分を汚したものであるぞ。
- 一六。高く眼を着けよ。 コ、決して見のがしてはなりませんと云ふのである。
- 一七。封疆を把定す。 此の沈々たる夜景こそ謂ゆる唯佛與佛の智見であつて決して他人の窺ふとの出來ない封疆である。
- 一八。爾が鬼窟裡に入り去らんをまつ。 然しながら、決して此の夜沈々の境界に安住して、そこに腰をすえてはなりませんぞ。そこが即ち金鎖玄關であるからと注意したものである。

一九。三十棒一棒も也た少くことを得ず。これは三十棒を一棒も負けずに打ちすえるぞと云ふので、謂ゆる蒼龍窟に墮在するもの、罰則を設けたのである。

二〇。拈了也。これでハヤ此公案を拈了してしまつたのかと云ふので、未だ忘れたことがあらうにと抑へたものである。

二一。選つて會すや。圓悟がどうちや合點が出来るかかと會下の大衆を見廻されたところである。

二二。唯。エ、思はずも説き過ぎたと云ふので、蒼龍窟を咄破してしまつたのである。

二三。錯つて自己清淨法身と認むることなかれ。爰で又更に忠國師の語を拈出して學人を警醒せられたものである。

【講義】 之の頌は七言八句あつて、此の本則の頌であると共に雪竇の慧忠國師の眞蹟とも見ることが出来る。一國の師亦強いて名く。肅宗皇帝は鄧州南陽の白崖山の黨子谷に居られたところの慧忠禪師の徳を慕ふて、態々中使を遣はして、師を拜請して千福寺の西禪院に迎へ、自ら師資の禮をとつて國師とあがめられ、又、其の子の代宗皇帝も師を光宅寺に拜請して同じく師資の禮を以つて非常に優遇をせられたことであるが、然しながら、禪師ほどの高僧に對しては、一國四百餘州の天子の師であると申したところで、別段其の人の名譽と云ふわけにもならないので、諺にも至人に名なしと申す通り、國師と云ふも強いて假りに名けたまでのことである。南陽獨り許す嘉聲を振ふことを。南陽と云ふは國師の居られた土地の名で、國師は鄧州南陽白崖山の黨子谷と云ふ處で四十餘年間も山門を下られなかつたと云ふから、そこで國師のことを南陽と云ふのである、嘉聲はこの上もない名聲と云ふことで。今も昔も同じことであるが、多くの人は動もすれば人爵

を重じて、國師とか大師とか云へば此の上もないことのやうに思ふて、世間の尊榮富貴な人に御機嫌取り計りにかゝりはてゝ居ることであるが。慧忠禪師こそは實に本分の名師であるから、其の國師の稱號も以つて禪師の徳を表旌するに足らないわけで、此の師こそ眞に三界の獨尊人天の大導師と申さなければならぬことである。大唐扶け得たり眞の天子。此の國師は唯に大唐四百餘州に君臨する帝王の師であると云ふばかりではなくて、實を申せば、十方法界、微塵數の國土の大導師であるが、今其の化餘の遊戲としては、大唐の天子を二代迄も扶け導いて、確に世間俗界の名君仁王たらしめたのみではなく、又眞諦界に於ける本統の天子即ち法王たらしめられたことである。曾つて毘盧頂上を踏んで行かすむ。之れが法王中の法王たらしめられたところを申したものの、鐵鎚擊碎す黄金の骨。肅宗が如何なるか是れ十身調御など、其の實自身即佛と思ふて、大切そうに黄金佛を抱いて心窺かに慢心をいだいて居られたのを、國師は本分の鐵鎚を振つて自己清淨法身と認むる莫れと一撃して、其の黄金佛を骨破微塵に打ち碎いてしまはれた。天地の間更に何物かある。サア此うなつた上には、三千大千世界此れ空莫々。宇宙茫々として一物の認むべきものもない、謂ゆる真空無相になつてしまつた。三千刹海夜沈々。三千は即ち三千大千世界で、刹は世界國土の義。海は其の世界國土が數限りもなくあることを譬へたものである。その三千大千世界が、彼の草木もねむると云ふ丑滿つ時には、夜沈々と何の見るべきものもなく、何の

きくべき音もなくして、唯沈々と澄みかへつてしまふ。こゝに至つては自身もなければ佛もなく、頭上もなければ脚下もない。唯夜沈々の境界である。偕此の境界は謂ゆる言語道斷心行處滅で不可稱不可說不可思議の境界であるからして、少しの思慮分別を交ゆるの餘地もない。それ故に苟も吾々にして、一切の思慮分別智解情想を放下して、謂ゆる昭々靈々無念無相の境界にさへなることが出来れば、自ら此の本分の田地に契當することが出来るのである。知らず誰か蒼龍窟に入る。此の蒼龍窟と云ふ文字を解するに付て、古來色々と説を立てることであるが、要するに、圓悟の評唱に、「正當夜靜かに更深きの時天地一時に澄々地なり。且らく道へ是れ什麼ぞ。切に忌む目を閉ぢ眼を合する會を作すことを。若し恁麼に會せば正さに毒海に墮在せん。知らず誰れか蒼龍窟に入る。脚をのべ脚を縮む且らく道へ是れ誰ぞ」とある毒海を即ち蒼龍と取れば、三千刹海夜沈々の靈境は決して思慮分別を以つて測り得べき處ではないのに、若しも吾々にして、一點智解情想を働かして思慮分別に涉ることがあれば、それこそ蒼龍窟裡に墮在して、決して本分の靈光に接することは出来ないぞと學人を誡められたと云ふことになり。又、「毒海に墮在せん」と云ふ處で一段落切つて、「知らず誰れか蒼龍窟に入る、脚を展べ脚を縮む且らく道へ是れ誰ぞ」と、此れ丈けを一段と見て解することになれば、蒼龍窟は即ち本地の風光其のものをさしたもので、本則に毗盧の頂上を踏んで行けとあるあの立脚地に誰れか入りうるものであるぞ。脚を展べ脚をちや

む且く道へ是れ誰ぞ。然し毘盧の頂上として何も別段變つたところではない、吾々お互ひが日用光中脚を展べたり脚を縮めたり。東廓西廓舉足下足するところが即ち蒼龍窟裡の遊行ぞと、本則の毘盧の頂上を説明せられたことになる。前説とは意味は九きり反對であるが、取捨は學者の見識であるから、どちらを取るも諸君の隨意に任せることにしやう。

第六節 頌評唱和譯

一國之師も亦強いて名く。南陽獨り許す嘉聲を振ふことを。此の頌ひとへに箇の眞贊に似て相似たり。道ふことを見ずや至人には名なしと。喚んで國師となすも亦是れ強いて名を安じ了れり。國師の道比倫すべからず。善能く恁麼に人を接す。獨り許す南陽是れ箇の作家なることを。大唐眞の天子を扶け得て曾つて毘盧頂上を踏んで行かむ。若し是れ具眼の衲僧の眼腦ならば、須らく是れ毘盧頂上に向つて行つて方きに此の十身調御を見るべし。佛之れを調御と謂ふは便ち是れ十號の一數なり。一身十身に化し。十身一身に化す。乃至百千億身も大綱只是れ一身なり。這の一頌却つて説き易し。後は他の自己清淨法身と認むることなかれと道ふことを頌す。頌し得て水灑ぐも着かず。直ちに是れ口を下して説き難し。鐵鎚擊碎す黄金の骨。此れは自己清淨法身と認むる莫れと云ふことを頌す。雪竇忞恣佗を讚嘆して黄金の骨を一鎚に擊碎し了れり。天地の

間に更に何物ぞ。直ちに須らく淨裸々赤灑々として更に一物のうべきなくんば乃ち是れ本地の風光なるべし。ひとへに三千刹海夜沈々たるに似たり。三千大千世界香水海の中に無邊の刹あつて一刹に一海あり。正當夜靜かに更深きの時天地一時に澄々地なり。且らく道へ是れ什麼ぞ。切に忌む目を閉ぢ眼を合する會を作すことを。若し恁麼に會せば正さに毒海に墮在せん。知らず誰れか蒼龍窟に入る。脚をのべ脚をちひむ。且らく道へ是れ誰ぞ。諸人の鼻孔一時に雪竇に穿却し了らる。

【字解】一。眼腦。眼睛と云ふに同じ。

- 二。道ふことを見ずや等。これは莊子に至人に已なく神人に功なく聖人に名なしとあるを引いたのである。
- 三。十號。佛陀の十號と申して、其の德を讚嘆するに十種の名を以つてすることがある。即ち、如來、應供、正徧智、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛、世尊。と云ふが之れである。此の中で無上士調御丈夫と云ふに就いて二説があつて、之れを一つと見るのが阿含及び智度論の一説で、二つと見るのが涅槃經及び智度論の他の一説である。若しも一つと見れば世尊を入れて十號と云ふことになり。二つと見れば世尊は總名で如來と云はれ乃至佛と云はれる德があるから、世尊と申すと見るのである。
- 四。一身十身に化し。彼の觀音の普門示現の如きが即ち此の例である。
- 五。水すそぐも着がす。思慮分別を交へる餘地のないことを申したものである。
- 六。切に忌む目を閉ぢて等。目をとち眼を合せて會は會得であるから、死に工夫をなすなと云ふので思慮分別をまぢへることを誡めたものである。

第一百則 巴陵吹毛劍

第一節 垂示

垂示云。一夏嘮嘮打葛藤。幾乎絆倒五湖僧。金剛寶劍當頭截。始覺從來百不能。且道作麼生。是金剛寶劍。貶上眉毛。試請露鋒銚看。

【讀方】一夏嘮々として葛藤を打す。幾んど絆倒す五湖の僧。金剛の寶劍當頭に截る。始めて覺ゆ從來の百不能なることを。且らく道へ作麼生か是れ金剛の寶劍、眉毛を貶上して試みに請ふ鋒銚を露す看よ。

【講義】この垂示は普通の本では皆第九十八則の始めに安してあるが、古人も申して居られる通り、之は疑もなく此の則の公案と入れ差ふたものであるから、他の垂示とは全く體裁が違ふて、始めに碧巖集一百則の結末を告げる爲の一偈を安し、然もその中に吹毛劍の古則に對する垂示の意味が含まれてあるから、此の理由に依て通常の本では第九十八則の處に安してある垂示と第百則の垂示とも入れ差へて講ずることにしたのであるから。その積りで見て下さるが宜しい。一夏嘮々として葛藤を打す。一夏はづうと前にも申して置いた通り、宗門では毎年四月十五日から七月十五日迄の九十日間は僧衆一同が禁足靜養して、専ら修行辨道する規則になつて居る

ので即ち天竺の雨期安居の形式を其の儘に傳へて行ふのである。之を結制とも安居とも申し、此の結制九十日の間を一夏とか法歳とか申すのである。それであるから僧侶たる身の年齢は、此の夏安居を経た數を以つて算へると云ふのが佛門の通規で、之を法臘とも僧臘とか申すとなつて居る。そこで今この碧巖百則の提唱の終結をつける爲に圓悟のとなへられた七言四句の第一句は、一夏嘖々として葛藤を打す。従上來一夏九十日の間此の雪竇の頌古を提唱して一會の大衆の爲に日々嘖々と饒舌して色々の閑文字を弄して、幾んど絆倒す五湖の僧。四海の内五湖のほとりから集つて來られた、滿天下の雲袂幾千の大衆に誠に絆倒の迷惑をかけたことであつたと、一夏九十日間熱心に辨道工夫した大衆に、辭を卑うして謝辭をのべられたのである。金剛寶劍當頭に截る。サテ愈々今日滿講となつてから、更に自分の金剛王寶劍を振つて従上來の閑葛藤を眞向に截りすて、見れば、始めて覺ゆ從來百不能なることを、百則の提唱。幾萬の語句は皆悉く小兒をあやかす爲の哆々呶々で何の役にも立つ者でない、飽くまでも謙遜して然も本分の地には言句伎倆を許さぬ様子を申されたものである。且らく道へ。作麼生か是れ金剛寶劍。サアそれならば其の金剛王寶劍と云ふ者は果して如何なるものであらうぞ。眉毛を眨上して。眨上は眼を活動させる意味であるから、眼のサヤをばづいて、試みに請ふ鋒鏘をあらはす看よ。爰に我が提露する所を參究せよと大衆に向つて且つは謝し且つは垂示をせられたものである。

第二節 本則

舉僧問巴陵。如何是吹毛劍。斬。陵云。珊瑚枝枝撐着月。光香萬象。四海九州。
 【讀方】僧あり巴陵に問ふ。如何なるか是れ吹毛の劍。斬。嶺云く、珊瑚枝々月を撐著す。光萬象を呑む。四海九州。

【字解】一。巴陵。岳州巴陵の新開院の顯聖禪師と申して法を雲門大師に嗣いだ人である。存命中に鑿多口と諱名せられて、顯聖和尚は口の多い人であると評判せられたと云ふことは、第十三則の巴陵の提婆宗の古則で申した通りであるから開いて見るが宜しい。

二。吹毛の劍。曾つて臨濟大師が吹毛用ありて急に須らく磨すべしと云ふことを申されたことがあるが、つまり毛を吹きかければ其の毛が直ちに切れてしまふ程の銳利なる名劍と云ふので即ち人々箇々具足圓成底の般若の智劍のことである。この劍は其の人々によりて或は護身の寶劍ともなれば、或は自分の腹を切る劍となることもある。地獄の刀山劍樹にもなれば極樂の彌陀の利劍にもなつて、これらは一に此の劍を持つ人の使ひ方を知るや否やと云ふに依つて定まるのである。

三。斬。それ斬られてしまつたと云ふのであるが、抑も何がどうして誰れに依つて斬れたのであらう。

四。嶺。實に危険なところである。うっかり寄つて怪我するなよと注意したものである。此の嶺は一本には嘖に作つてある。此の時は吹毛の劍がどうしたと。そんなものがウフ、ンと冷笑した氣味である。

五。珊瑚枝上月を撐著す。此の句は唐の禪月大師即ち貫休と申した詩僧の句であつて評唱に其の全文が見て居るが、何とも手の着けて見やうのない美しい一句で。云は宮本武蔵とか荒木又右衛門とか云ふ劍客が、三尺の秋水をひらめかして、只一きりにと切つてかゝつたところを、優に美しい二八の少女が輕羅の小扇を以つて流螢を打ち落したやうな味ひである。

六。光萬象を呑む。名劍の光りが宇宙萬象を呑んで、偏界少しも藏さざる貌であつて、盤山寶積禪師が、心月孤圓光萬象を呑むと申された味である。

七。四海九州。盡十方照さぬ限もないと云ふので、古人は若し能く此の寶劍を按して獨り寰中に據るときんば、四海九州當さに我が掌に歸して以つて太平を致すべしと申されてある。

第三節 本則提唱

僧問^ツ巴陵^ニ如何^{ナルカレ}是吹毛劍^ニ。下語云。一枚^ニ生劍^ニ。

本分の上を問ひ來つたと云ふ義なり。

陵云。珊瑚枝々^ニ撐着^ム月^ニ。下語云。萬里一條鐵。頭々物々。

珊瑚も月も色相に用ひて、其の撐着して見へざるところを本分に用ゆるなり。色相を本分と見たこそ吹毛の劍よ。又月の光が頭々物々の上にあるやうに、本分と云ふものは天地の間に充ち満ちて其れくの上にあつて缺くことはなきなり。又日月照臨不到^ム天地蓋覆不盡^キ。崑崙無^ニ縫罅^ニ。斬^リ釘截^レ鐵とも用ゆ。これは吹毛の劍によつて一切截斷に用ゐたるものなり。

第四節 本則評唱評和譯

巴陵干戈を動せず、四海五湖、多少の人舌頭地に落つ。雲門人を接すること正に此くの如し。

他は是れ雲門の的^{テキ}子、亦各々箇の作略^{サク}を具す。是の故に道ふ。我は愛す韶陽新定の機、一生人のために釘^クを抽^キき楔^セを抜^キくことを。這箇^{シヤコ}の話^ワ正さに恁麼^{インモ}地^ヂなり。一句の中に於いて自然^{ジレン}に三句を具す。函蓋乾坤^{カンガイケンコン}の句。截斷衆流^{サイダンシュウリウ}の句。隨波逐浪^{ズイハセツウリウ}の句なり。答へ得て亦妨げず奇特^{キツトク}なることを。浮山の遠錄^{エンロク}公云く、未だ透せざる底の人は句に參せんよりは意に參せんには如かず。透得底の人は意に參せんよりは句に參せんには如かずと。雲門下に三尊宿^{サンソンジュク}あり。吹毛の劍に答へて俱に了^{リョウ}と云ふ。唯是れ巴陵のみ。答へ得て了の字に過ぎたり。此れ乃ち句を得たり。且らく道へ了の字と珊瑚枝々^{珊瑚}月を撐着^{シヤウチャク}すと是れ同か是れ別か。前來道ふ、三句辨すべし。一鐵空^{テツクウ}に透る。這の話^ワを會せんと要せば須らく是れ情塵^{ジヤウジン}意想^{イダウ}を絶し淨盡^{ジヤウジン}して方さに他珊瑚枝々^{珊瑚}月を撐着^{シヤウチャク}すと道ふことを見るべし。若し更に道理を作さば轉た摸索^{モソク}不着^{チヤク}なることを見ん。此の語は是れ禪月友人^{ぜんげつゆうじん}を懷^なふ詩なり。曰く、厚きことは鐵圍山上^{てつゐせんじやう}の鐵に似、薄きことは雙成仙體^{しやうせいせんたい}の額^{かぶつ}に似たり。蜀機鳳雛^{しやくきほうすう}動もすれば塵^{ちん}整^{せい}す。珊瑚枝々^{珊瑚}月を撐着^{シヤウチャク}す。王凱^{わうがい}が家中藏して掘^うち難く、顔回^{がんかい}が飢漢^{きくわん}天雪^{てんせつ}を愁^{うれ}ふ。古檜筆^{こゑんぴつ}の如く直うして雷にも折^ひず。雪衣^{せつゐ}の石女蟠桃^{せきにょばんたう}の缺。佩^{はい}んで龍宮^{りゆうきゆう}に入つて步遲^{あひぢ}々たり。繡簾^{しゅうれん}銀篋^{ぎんけつ}何ぞ參差^{さんし}たる。驪龍^{れいりゆう}珠^{しゆ}を失^しす知るや知らずや。巴陵^{はりやう}句中に於いて一句を取つて吹毛の劍に答ふ。則ち是れ快なり。劍^{けん}刃^{じん}上^{じやう}に毛^{もう}を吹^ふいて之れを試みるに其の毛自ら斷^たつ。乃ち利劍^{りけん}之れを吹毛^{すふもう}と謂^いふなり。巴陵^{はりやう}只他の問處^{もんじよ}に就いて便ち這の僧の話^{そうのわ}に答ふ。頭落^{あたまおち}つるも也た知らず。頰^{かほ}に云く。

【字解】一。我は愛す詔陽新定の機等。

この語は第六則及び第六十二則の處で講じて置いたから聞いて見るが宜しい。要は、新は其の舊を革むるの意。定は安なり靜なり止なり凝なり決なりと申して、即ち古人の舊轍を改革して新新決定するの機語と云ふことであるから、彼の中麴園月禪師が義堂周信に答へて、雲門の説法は毎々の語新奇を以つて格となす。是れ乃ち新たに自ら定むる格なりと申されたこと云ふがことである。今は珊瑚枝々月を擇着すと云ふ答語の如何にも新新にして美はしく、而も思慮分別に透らぬことを評したものである。

二。雲門下に三尊宿あり。三尊宿は即ち洞山の守初、羅漢の匡果、及び此の則の巴陵の顛鑿禪師を指したものである。襄州洞山の守初宗慧大師も、穎州羅漢院の匡果禪師も共に如何なるか是れ吹毛の劍と云ふ一僧の間に對して、了の一字を以つて答へられたことは傳燈錄の二十三卷に見えて居る。今はそれを指したものである。

三。禪月友人を懷ふの詩なり。此の詩に付ては古人の抄があるから、其の儘引用することにしやう。厚きことは鐵圍山の鐵に似たり。抄に云く、情の厚きことは鐵圍山の鐵に似たりとなり。又或は隔つた義なり。兩人相隔たることは鐵圍山上の鐵に似たりとなり。俱舎に云く、鐵圍山は其高きこと三百十二由旬。薄きことは雙成仙體の縑に似たり。雙成は董雙成なり。風の薄きことは双成仙體縑に似たり。縑はカトリと云ふて薄き衣なり。双成は仙女の名なり。書林に云く張君房説く。西王母武帝殿に降す。侍女四人あり。帝其名を問ふ、曰く董双成、許飛瓊等と。古抄に云く。双成或は双星に作る。牽牛織女なり。蜀機鳳雛動もすれば雙雙、抄に云く蜀江の錦機なり。鳳雛は縑の紋なり。不二鈔に云く、錦上の紋なり。雙雙は旋々に行く貌なり。又動いて雙雙とよむ時は雙雙は縑の紋なり。動もすれば雙雙とよむ時は友人の運く來ることなり。珊瑚枝々月を擇着す。友人の德。他力を借りずしてある明德なり。王凱が家中藏して掘り難く。王凱は富貴のものなり。友人の深遠の處ありて見難きを云ふか。此の句は珊瑚枝々より出でたなり。此の友人をば家中に藏めてをいてあらばさるなり。晋書に云く、王凱は武帝の叔父なり。石崇字は秀倫なるものあり。凱と富を争ふ。凱崇の歩障を作つて立つること四十里なれば、崇錦繡の歩障を作りて立つること五十里なり。武帝助けをなして凱に珊瑚樹の高き二尺なるを賜

ふ。凱之れを得て崇に誇る。崇の如意を以つて之を打ち碎く。凱不いに怒る。崇の云く、凱も恨むこと莫れと。便ち左右に命じて庫中を發くに、珊瑚樹高三四尺なる五六株を凱に與ふ。光彩日に輝く。凱此に於いて遂に休し去ると。顔回が飢漢天雪を愁ふ。抄に云く。我を指すなり。論語に云く、一簋食一瓢の飲にして陋巷にあり人其の憂に堪へずと。古檜筆の如く直にして雷にも折さず。友人の德のたまはまぬなり。筆直はマツスグな貌なり。古檜は友人の操なり。我氣概正直にして節操を守るの謂なり。有人云く我が心の變ぜざること古檜の直なるが如きなりと。雪衣の石女蟬桃の缺。雪衣の石女は潔白無垢の人を云ふなり。仙女がよそへ行く程に桃實もなきなり。東海の仙山に大桃實あり。蟬居三千里なりとあり。桃もない石衣ばかり佩んで龍宮に入るの謂ひなり。缺の字一本に缺に作る。玉佩なり。蟬桃と云ふときは雪衣の紋なり云云。佩んで新宮に入つて歩み遅たり。抄に云く、仙人深遠の處に在りて彌々深く入り去るの心なり。蟬塵銀簪何ぞ参差たる。仙女の去つたあとの體なり。抄に云く、其人去つて後唯蟬塵銀簪有りて参差たるのみ。蟬塵銀簪を失知るや知らずや。仙女の行き去つて見へざること驪龍の珠を失ふた如くなり。抄と云ふは今申す講義録のことで、南北朝の頃から、室町時代へかけて五山の禪僧の間に詩文などが繁昌した時に、祖録經書が盛に講ぜられたことであるが、其れを筆記したものが即ち抄である。文體も今日から見れば餘程變てこなものであるが、然しよく味うて見ると其の間に餘程古雅な又深い味がある。今も因みにその一例として此抄を出したのであるから。そのつもりで味うてもらひたい。

第五節 頌

要平不不平。夫細若此。大巧若拙。不動聲色。或指或掌。看果然。道倚天。照雪。斬觀着。大冶兮磨礪。不磨下。更用煨煉。作什。良工兮拂拭。未歇。人莫能行。直饒千將。別別。處。識歎有分。珊瑚枝々月。三。更月落影照寒潭。且道向什麼處。去。直得天下泰平。醉後耶當愁殺人。

【讀方】 不平を平げんと要す。細なること蚺蟻の如し。大丈夫の漢須らく是れ慙慙なるべし。大巧は拙の若し。聲色を動せず。身を藏して影を露はす。或は指に或は掌に。看よ。果然として道箇不是。天に倚て雪を照らす。斬。敵着すれば即ち暗す。大治も磨礪し下す。更に煨煉を用いて什麼かせん。干將も能く來るなし。良工も拂拭して歇ます。人能く行くなし。たとひ干將出で來るもまた倒退三千。別々。咄。什麼の別處かあらん。讃するに分あり。珊瑚枝々月を撐着す。三更月落ちて影寒潭を照らす。且らく道へ什麼の處に向つてか去る。直ちに得たり天下泰平なることを。醉後耶當として人を愁殺す。

【字解】 一。細なること蚺蟻の如し。蚺蟻は字書に蠅蟻の類なりとあるから、即ちアリの大々ひで、彼の蠅蟻は其の體に至つて細小なるものであるけれども、而も堅實な土や材木を何の苦もなく穿つやうに、今此の巴陵の答話は聞いたところ實に優美柔和なやうであるけれども、其の斬れ味は干將莫耶の寶劍も及ばぬことであるぞと云ふのである。一本に蚺蟻の二字を芙蓉に作つてある。芙蓉は蓮華のこと、古人も劍を評して尖れること芙蓉の始めて開くが如しとか、或は古劍の歌に瑤璃匣裡に蓮華を吐くなど、申して居るから、今も此の意味に見て、不平を平げんことを要すと雪竇が申されるから、其の不平を平げんがために巴陵が抜き拂つた寶劍の光彩は、恰も芙蓉の花の開いたが様で倍も美事なことであると云ふ風にも取れる。何れにしても巴陵の答話の優美にして少しも滞りのないことを讃嘆したものである。

二。大丈夫の漢須らく是れ慙慙なるべし。苟も人の師たらんものは巴陵のやうにありたいものである。
 三。聲色を動せず。巴陵の手際が如何にも巧妙で少しも聲色に露はさないものであるから。見わけるとも聞きわけるとも出来ないことと云ふのである。
 四。身をかくして影をあらはす。これは錐頭が袋を出るやうに、身を藏して拙なやうにはして居るけれども、其の大巧の影は自然に彰はれて居ると云ふのである。

五。看よ。これは圓悟が會下の大家に向つて、今現に人人各自の劍は指頭にあるか掌中にあるか。能く氣をつけて調べて看よと云はれるのである。
 六。果然として道箇不是。さりながら若しも諸君が此の語句についてまはつて吹毛の劍を指掌の間に集めるやうなことであつたならば、忽ちにして胴首處を異にすることであるぞと警告せられたものである。
 七。斬。一刀兩斷すれば一劍天に倚つて寒し。ソレ首胴別々になつた。顔面をヒネツテ見よと般若の智劍の活用をあらはしたものである。
 八。敵着すれば則ち暗す。若しも此の智劍の正體を見やうなどいふ思慮を起したならば、忽ちにして眼がツブれるぞと思慮分別に涉らぬことを示されたものである。
 九。更に煨煉を用ひて什麼かせん。本來明煗たる寶劍であるから、今更煨煉する必要もないことである。
 一〇。干將も能く來るなし。干將は古への刀鍛冶の名人で或は晋君の劍師の名であると云ひ、或は韓王の劍師と云ひ、吳王の臣であると云ひ、色々の説はあるけれども死に角我國で申せば三條の小鍛冶とか正宗とか云ふ格であらう。よしあの干將ほどの大治良工でも此の劍の前へは近よることが出来ないことと云ふのである。
 一一。人能く行く莫し。干將や正宗がそうであるから、勿論何人と雖も近寄ることの出來うるものではない。
 一二。直饒干將出で來るともまた倒退三千。干將ほどの大治良工でも逃げ出すより外はないと云ふので何れも同じ意味であるからなくもがなと云ふ下語である。
 一三。咄。咄と叱りつけて。
 一四。什麼の別處かあらん。人人箇々具足圓成底。十方法界只此の寶劍ならぬはないのであるから、別々など云ふ必要は決してないのである。
 一五。讃嘆するに分あり。雪竇は別々と巴陵の機鋒を讃嘆せらるゝが、如何にも尤もなことである。

一六。三更月落ちて影寒潭を照らす。これが圓悟自らの拈提で即ち人人具足底の金剛王寶劍を示されたものであるから、爰て是非とも三更寒潭の月と珊瑚枝々の月との同か別かを参して見なければならぬ。

一七。且らく道へ什麼の處に向つてか去る。サア其の寶劍は即今どこにどうして置いてあるであらう。

一八。直ちに得たり天下泰平なるを。モウ劍が去つてしまつたから更に怖るべきものはない。

一九。醉後即當として人を慈殺す。靈寶が一杯氣嫌で餘計なことを云ひ出すものであるから、某甲までかいらぬ心配をするのであると云ふのであるから、此の著語は兼れて以つて圓悟が靈寶の拈頌古一百則に對する慧着と見るべきものである。

【講義】 不平を平げんと要す。古人の申されたことばに、劍は不平のために寶匣を出づと云ふがあるが、如何にも其の通りで、天下泰平の時に劍が首を出す氣づかいは更にないのである。今もその通りで、巴陵和尚は、此の僧が如何なるかと問ふて來た處に、此の僧の心海が未だ平かならざる所のあるのを見て取つて、此れに太平無事の快樂を興へやうがために、雲門屋裡の重代の寶器たる、吹毛の寶劍をとり出して珊瑚枝々月を撐着すと無事安穩の妙藥を授けられたのである。大巧は拙の如し。これは老子經の第四十五章に、大巧は拙きが如し大辯は訥の若しと申してあるのを借りて來たもので、大いに巧みなるものは自分の細工の好い處を人に誇示せぬものであるから見た處甚だ下手なやうに見へると云ふのである。今巴陵が、如何なるが是れ吹毛の劍と一僧が直向にふりかざしてきた劍を、ヒラリと身をかはして、珊瑚枝々月を撐着すと、水ももらさず彼の僧を斬りすてたものであるから、餘り手際の美しさに一寸見た處斬れたのか

斬れないのか分らないものであるから、如何にも劍術を知らないものゝやうに見へる。そこで大巧は拙きが如しと讚嘆したのである。或は指に或は掌に。これは宮本武藏とか、佐々木岸柳とか云ふやうな劍術の名人は、劍を指の先きでも使へば、掌の平でも使ふと、自由自在思ひのままに刀劍をはたらかせることを申したものである。天に倚つて雪を照らす。禪語に一刀兩斷すれば一劍天に倚つて寒しと云ふがあるが、あれと同じ意味で、さらでだに抜けば玉ちる氷の劍であるから、若しもそれを劍術の名人が使ふことになれば、實に電光の如く擊石火の如くであつて、チラリチラリキラリキラリ朔風凜冽たる寒さの空に降りつもりたる白雪を照らす様子ときたら、眞に身の毛もよだつばかりの悽愴である。大冶も磨礱し下す良工も拂拭し歇まず。それであるから、たとひ正宗のやうな刀鍛冶の名人でも、貞宗のやうな劍師の良工でも、磨かうと云ふて磨けるものでもなければ、拭ふと云ふても拭へるものでないので、畢竟するところ、各自の心性は各自に磨き各自に拭い上げるより外はない。釋迦に磨いてもらうことも出來なければ達磨に拭ふてももらうことも出來ないのである。別々。既に此の劍は本具の利劍。天然の神威であつて、佛祖の爐鍛にも入らず、修行證悟で磨礱拂拭したのでもないからして、全く尋常一様の刀劍とは格が違ふて、何とも角とも名狀することは出來ないものである。而して又其の寶劍を示して見せられた巴陵の機鋒と來ては又格別であつて全く他人とは同轍ではない。

珊瑚枝々月を撐着す。然らばその別々の處はどんなあんばいであるかと申すに、珊瑚枝々月を撐着す、何とも美事なこと。思慮を離れ分別を絶して、只是れ珊瑚枝々月を撐着すと。人人各自に參じ來り參じ去つて、其の別々の味いを、豁然啓發するより外はないのである。

第六節 頌評唱和譯

不平を平げんと要す。大巧は拙の若し、古に狹客あり、路に不平を見て強弱を凌ぐを以つて即ち劍をとばして強者の頭を取る。所以に宗師家眉に寶劍を藏し袖に金錠を掛けて以つて不平の事を斷す。大巧は拙の如し。巴陵の答處は不平の事を平んと要す。他の語忒煞傷巧なるがために返つて拙となるに相似たり。何が故ぞ。他の當面に揮ひ來らずして却つて僻地裏に去つて一截して暗に人の頭を取るに而も人の覺えざるがためなり。或は指或は掌、天に倚つて雪を照す。會得せば則ち天に倚るの長劍の凜凜たる神威の如し。古人道く、心月孤圓にして光萬象を吞む。光境を照すに非ず、境も亦存するにあらず。光境俱に忘す復是れ何物ぞと。此の寶劍は或は現して指上に在り。忽ち掌中に現す。昔日慶藏主説いて這の裏に到つて手を豎て、云く、還つて見るやと。也た必しも手指上に在らざるなり。雪竇路を借つて經過して爾をして古人の意を見せしむ。且らく道へ、一切處是れ吹毛の劍にあらずんばあるべからず。所以に道ふ、三級浪高うして龍と化す。

癡人猶辱む夜塘の水と、祖庭事苑に孝子傳を載せて云く一本に此の句を削る。楚王の夫人嘗つて夏涼に乗じて鐵柱を抱いて感じて孕む。後一の鐵塊を産す。楚王干將をして鑄て劍に爲らしむ。三年にして乃ち雙劍となる。一雌一雄あり。干將密に雄を留めて雌を以つて楚王に進む。王匣中に秘す。常に悲鳴するを聞く。王群臣に問ふ。臣曰く。劍に雌雄あり、鳴くものは雄を憶ふのみと。王大ひに怒つて即ち干將を收めて之れを殺さんとす。干將其の應を知つて乃ち劍を以つて屋柱の中に藏す。因つて妻の莫耶に囑して曰く、日北戸に出て南山に其の松あり。松石に生ず。劍其の中に在り。妻後に男を生む。眉間赤と名づく。年十五母に問ふて曰く、父何くにか在る。母乃ち前事を述べ。久しく思惟して柱を剖て劍を得、日夜に父のために讐を報んと欲す。楚王も亦募つて其の人を覓めしむ。宣言すらく、眉間赤を得る者あらば厚くこれを賞せん。眉間赤遂ひに逃ぐ。俄かに客有つて曰く、子眉間赤に非らざることを得んや。曰く然り。客曰く、吾れは甌山の人なり能く子がために父の讐を報せしめん。赤曰く、父昔し辜なきに枉て茶毒を被る。吾今惠念す、何の須ゆる所ぞや。客の曰く、當さに子の頭並に劍を得べし。赤乃ち劍並びに頭を與ふ。客これを得て楚王に進む。王大いに喜ぶ。客の曰く、願くは油を煎じて之れを烹ん。王遂ひに鼎中に投ず。客王を誥いて曰く、其の首たれすと。王臨視するに方つて客後に於いて劍を以て擬すれば王の頭鼎中に墮つ。是に於いて二首相嚙む。客眉間赤が勝

たざらんことを恐れて、乃ち自ら刎ねて以つて之れを助く。三頭相嚙む。尋いで亦俱に爛る。雪竇の道く、此の劍能く天に倚つて雪を照すと。尋常道ふ天に倚る長劍光能く雪を照すと。這の些子の用處、直ちに得たり大治も磨礪し下さざること。たとひ是れ良工も拂拭して未だ歇まず。良工は即ち干將是れなり。是事自ら顯らけし。雪竇頌し了りて末後に顯出して道ふ、別々と、也た妨げず奇特なることを。別に好處あり。尋常の劍と同じからず。且らく道へ如何なるか是れ別處。珊瑚枝枝月を撐着す。謂つべし光前絶後なり。獨り寰中に據つて更に等匹なしと。畢竟如何ん。諸人の頭落ちぬ、老僧更に一小偈あり。

萬斛舟に盈て、手にまかせて拏く。

去つて一粒に因つて甕蛇を呑む。

百轉の舊公案を拈起して。

撒却す時人の幾眼沙。

【字解】一。古人道く心月孤圓等。

盤山寶積禪師の語である。

頌則として參究する處であるから、次節を見るが宜し。

二。三級浪高うして魚龍と化す。第七則の慧超問佛の古則の頌を見るが宜しい。

三。祖庭事苑。八卷あつて宋の東越の善郷師節禪師が編集せられたもので、一種の禪宗辭典と見れば宜い。

四。獨り寰中に據つて更に等匹なし。若し能く此の寶韻を按して獨り寰中によるるときには、四海九州當きに我が掌に

歸して以つて太平を致すべし。即ち天下無雙であると云ふことである。

五。諸人の頭落ちぬ。こゝが大巧は拙なるが如しと云ふところで頭が落ちても頭は一見安全な様であるから、鈍な男は大丈夫であると思ふて歩き出すと頭は忽ち地上にころがつてしまふ。諸君頭は落ちはしませぬか。他人のことはないが能く調べて見る必要があります。

六。萬斛舟にみて、手に信て拏く。爰は類別として參究するところであるから、大體はその方にゆづることとして、只文字の上だけを申して置かうと思ふ。萬斛は萬の斛物で即ち米や麥等を指したものでこれは吾々が日常生活に缺くべからざるもので、即ち吾々の生命を維持するに必要な唯一の材料であるが、此の大切な萬斛は實に牛馬や車に積載して人に引かれて都へ入りこんで来るものである。それと同じく佛祖の語頭公案は吾々の智慧の生命を維持保護する唯一の食料であつて日常決して缺くことの出来ぬものである。却つて一粒に因つて甕蛇を呑む。古詩に將に謂へり蛇甕を呑むと却つて是れ甕蛇を呑むと申してあるが、其の大切な斛物を得るがために、蛇が却つて甕中に墮落して生命を失ふことがあると同じく、古人の語頭公案は必須缺くべからざるものではあるけれども、若し吾々にして其の一言一句の文字語言に取りついて、謂ゆる句下に死在するやうなことがあつたならば、よし萬劫を経て決して解脱安隱の身となることは出来ないのである。百則の舊公案を拈提して、上來雪竇の頌古一百則の公案を拈提して親しく會下の大眾に示したことであるが、然しながら若しも學人にして、一字一句一言一境に食着して其の言外の至極妙なる大道を會得することが出来なければ、恰も蛇が一粒の米粒を食るがために甕裡に落ちこんで遂ひに其の命までも失却すると同じことで、此の百則の公案が却つて彼の沙が眼に入つて譬となり患となるが如く學人の眼中の沙となつてしまふことである。それであるから。眞に碧巖一百則の公案を透得して遠く三世の諸佛歴代の祖師近くは雪竇圓悟の二大老と同生同死の道連れとなりて、佛祖の妙境界に神通遊戲しやうと思ふものは、決してこんな講義録に満足することなく、是非とも脚實地を踏んで、有縁の善知識を求めて實參實究自ら熱い寒いを味はればなりませぬ。山僧が急がしい中から、餘計な閑文字を勞して諸君のためにうき身をやつすのも畢竟するにこれに

依つて何かの因縁を結び、一人たりとも實參實究の士の出でられんことを願ふより外はないので、これがやかては命法久住の一端にもならうかと思ふより外はありませぬ。

第七節 類則提唱

其一 心月孤圓

古人道。心月孤圓。光合萬象。光非照境。境亦非存。光境俱忘。復是何

物。下語云。萬里一條鐵。

辨するまでもなかるべし。

其二 百則公案頌

老僧更有二小偈一。

萬斛盈舟信手拈。却因一粒甕吞蛇。拈提百則舊公案。撒却時人幾

眼沙。下語云。道老賊。

圓悟の義は宗門に於いて大力量の者で萬斛つみたる舟をも手にまかせて引く程の力量なるぞ。

順にも逆にも振り舞いたいやうに振り舞ふぞと自負の語なり。又蛇こそ甕を吞むべきに、却つて

甕が蛇を呑んだと云ふたは賊なり。根本の上には一塵一法もないを、百則の舊公案を拈して人の眼へ砂をなげ入れて盲目になしたと、一定なげ入れた様に云ふたが猶も賊なり。

後序

雪竇の頌古百則は叢林學道の詮要なり。其の間譬を経論或は儒家の文史に取り、以つて此の事を發明す。具眼の宗匠時に後學のために擊揚剖析するに非らずんば、則ち以つて之を知ることなし。圓悟先師成都に在る時、予諸人と其説を請益す。師後夾山の道林に住す。復學徒のために之を控く。凡そ三たび宗綱を提さぐ。語は不同なりと雖も其の旨一つなり。門人綴つて之を録すること既に二十年。師未だ曾つて過つて問はず。四方に流傳して或は躑駘を致す。諸方且つ其の言に因つて其の道のこれを尋釋すること能はざるを以つて、妄りに改作することあらば、則ち此の書遂ひに廢れん。學者幸ひに其の傳を明にせよ。

宣和己春暮上休。解人關友無黨記す。

重ねて圓悟禪師の碧巖集を刊るの疏。

雪竇の頌古百則、圓悟重ねて注脚を下す。叢林に留示して永く宗旨を垂るゝは經なり。學人の機鋒提出なり。大慧密室に勘辨して、實詣なきことを知りて梓を毀つて傳へざるは權なり。此の書は諸佛の正眼列祖の大機再び鉗鎚を経て一も瑕類なし。茲に大慧の長書と駕を並べ、圓悟の必要と兼ね行せんことを欲す。果日を迷途に揚げ南錢を慧海に指す。快然として一觀せば、波の群愚を開いて相ともに圓成して、利益なきにあらずんば幸甚。

右伏して以みれば十七歳にして便ち雲門睦州を悟る。道つべし是れ口頭三昧なりと。二百年碧巖巖雪竇を見ず。忽ちに渠が手下一交に遭ふて怎ぞ弓治の裘箕を忘し得ん。兒孫の種草を斷却すること莫れ。人に随つて脚跟後に去つて轉せば、誰か龍を釣るの鈎を下し得ん。箇の眼目を具する底ありて來らば、看て繫驢概となさす。此の事當さに筏喻の如くなるべし。他時自ら會して筌忘せば、家々の門戸長安に透る。前者呼び後者應ず。種々の因緣大數に歸す。昔しは廢し今は興ふ。恠しむこと莫れ山僧が多きことを。終ひに是れ老婆心切なり。東土の書を讀まずして安んぞ西來の意を知らん。重ねて一代の宗風を興す。南去の鴈なしと雖も北來の魚を看取せよ。便ち十分の消息あり。同文の印を持して無盡燈を續かん。謹んで疏す。

今月 日疏す

圓悟老祖、夾山に居るの時此の書を集成す。天下後世佛祖の玄奧あることを知らしめんことを欲してなり。豈に小補ならんや。老妙喜は深く學者の道に根づかずして知解に溺るゝことを患ふ。是れに由つて之れを毀つ。其の父子之間矛盾すと謂はゞ可ならんや。今嶠中の張居士重ねてために板行す。果して何の謂ぞや。覽る者宜しく自ら擇ぶべし。

大德壬寅中秋住天童第七世の法孫比丘淨日拜手謹んで書す。

圓悟禪師雪竇和尚の頌古一百則を評唱す。玄微剖決し幽邃を抉剔して列祖の機用を顯はし後學の心源を開く。況んや妙智虛凝にして神機默運す。晶旭輝いて玄扃洞照し。圓蟾升つて幽室朗明なり。豈に淺識にして能く極を致さんや。後に大慧禪師、學人の入室下語頗る異なるに因つて、之を疑ふ。纔かに勘して邪鋒自ら挫き、再び鞠して款を納る。自ら降つて曰く、我れ碧巖集中より記し來る。實に悟あるに非ずと。因つて其の後根本を明めずして専ら語言を尙んで以つて口捷を圖んことを慮る。是れに由つて之れを火き以つて此の弊を救ふ。然も此の書を成すと此書を火くとは其の用心は則ち一なり。豈に二あらんや。嶠中の張明遠、偶々寫本の後冊を得、又雪堂の刊本及び蜀本を獲て訛舛を校訂し、此の書を刊定して萬古に流通す。上根大智の士をして一覽して頓に本心を開き直ちに無疑の地に造らしむ。豈に小補と云はんや。

延祐丁巳迎佛會の日、徑山住持比丘希陵拜書して以つて後序となす。

儒門の子貢は極めて東家の聖人に功あり。藉令良馬の鞭影を見て奔るも、皆後に墮着たるの顔子の如し。吾が聖師何言の天に遊ぶこと久し。靈山會上に四衆海の如くに集る。世尊拈華の宗旨諸人さしをくことなし。獨り迦葉尊者ありて微しくこれがために破顔す。吾が教中一唯の外口耳俱に喪すると同一に頓徹懸悟せり。當時會參直下に忠恕の祕論を剖擊せずんば、豈惟門人の惑ふこと滋甚しきのみならんや。千載の下何を以つてか一貫の迷雲を祛んや。異時成都の佛果圓悟老禪、夾山の丈室を笏して雪竇の頌古百則を拈提す。其の大弟子杲上座、學人の言句に泥んで従上の諸聖に辜負せんことを懼れて、老和尚の舌頭を取つて一截に併せて烈焰に付して煙りして之れを拉搔堆に颺ぐ。自ら以みるに巨壑大虛に毫滴を投置す。古徳の徳山油糖を賣弄す婆前に此の疏鈔を己に埃し冷にして餘なきが如し。野火焼ゆるとも盡きず。春風吹いて又生ず。花碧巖に落ちて陽坡繡するが如し。過去劫を歴て死灰復もゆ。知らず何許ぞ。許多の葛藤。一一に嶠中の張居士が手づから裁ゆる無影樹子の上より全體敗露する。直ちに得たり般若文說諸天花を雨ふらすことを。百七八十年滄僧薨地に横に鼻孔をうがたれて従前曾つて嗅かざる底の寶熏一旦水の如くに湧き雲の如くに蒸して八萬四千の毛孔に於いて悉く普ねく悉く徧ねし。謂つべし甚深希有難値難遇のことなりと。已にして居士の二子心疾を得たり。或は謂ふ勤竇の經は杲上座板を熾く。居士當さに遺燼を拾ふべからずと。而るに日月の如き光景あるが故に是くの如きの報を受くと。居士

なるもの其の説を疑ひ以つて予に質す。謂く圓悟の門人、人人而かも臬上座なりとも碧巖自ら碧ならん。何ぞ説あることを得ん。臬上座は月を見て指を亡す。遂ひに乃ち古佛を追元して毒燎天に亘る。刹竿を倒却して一綫を放たず。彼れまた嘗つて月を識らざる者なり。誰れか將た一指に乘じて之れを示さん。或者又謂く、臬上座此の書を火いて之れを社鬼に盟ふ者深重なり。居士の二子の患正さに此れに坐すと。予謂らく臬上座灼然として炬を乗る時に當つて故紙を煉り得て通紅なり。何によつてか密室に風を通せん。老勤巴命門舌根別に自ら壊せざるところあり。一星迸散す。明月空山。張居士那裏よりか這の消息を得來る。天然たる一段西蜀の錦機を把つて舊に依つて舊日の花様を織り作す。意ふに主林神陰かに之れが地のために訂護して今に至る。料るに是れ此の書の合さに世に出づべき因縁時節か。清凉池上に針芥相逢へば、則ち書を寫し讀誦し人のために演説するの功すら應さに殊勝の福德を獲べし。何に況んや金石に刻み鏤めて展轉流布せんをや。居士二子の心疾の根本は本より此にあらず。客作の漢の妄に情識を以つて卜度するのみ。居士其の目前に計校するに足らざるの禍福に縁つて情識を以つて之れを卜度せば是れ相隨つて火坑に赴くなり。豈に冤たらざらんや。冥驗記に沛國の周氏の三子並び瘡す。一日客あり門に造つて曰く、君内ち宿愆を省すべしと。忽ちに猛憶するに兒の時燕窠の三子を見て其の母の出づるを伺つて各々一蕪藜を以つて之れを吞ましむ。斯須にして共に斃る。母還つて悲鳴して去る、常に自ら

悔責す。客の曰く、君既に悔責を知る罪今免れんと。三子即ち皆能く言ふ。然らば則ち居士の二子の風を病み心を喪すこと悔恨すべきのことあること無きことを得んや。般若を談するもの若し人のために輕賤せらるれば、是の人先世の罪業應さに惡道に墮すべきに、今世の人に輕賤せらるゝを以ての故に、先世の罪業即ち爲めに消滅す。居士能く此に於いて省あらば、縦てに無始劫來造るところの諸業當さに時に應じて消散すべし。即ち君が二子の心疾當さに周氏が三子の時に應じて能く言ふが如くなるべし。以つて疑はざるべし。世尊住世四十九年六百函の文字徧界を覆藏す。若し臬上座の説に従はば萬年一念更らに踪跡を留めて什麼かせん。向上的禪林に限りなき尊宿兩句あり。最も端的なり。曰く、任爾は即心即佛我れは但だ非心非佛と。今より後に如來の正法輪を誘するものあらば君だゞ之れに應じて曰へ。任汝は臬上座底が是なりと説くも我れは只勤老師底是なりと説くと。若し是くの如くならずんば即ち恐らくは面門を燎却して四百四病一時に發せんことを。將た居士の二子の心疾を如何。見ずや古人道く、子を養ふて方さに父母の恩を知ると。居士佛を學び恩を知る。老に臨んで懺悔せば、他日作家の爐鞴丈六の金身を跳出せん。知らず還つて勤老師眞箇の揚眉豎拂を見るや否や。若し還つて一句に薦得せば。向きに道ふ佛祖誓いあり、罪重ねて科せず。殃ひ他家の兒孫に及ぼすことなくんば好し。然も是くの如くなりと雖も且得沒交涉。是の年延祐丁巳中元の日、海粟老人馮子振題す。

碧巖集講開

以心妙道復何言

一顆寶珠看不盡

同講了

噢却東山鐵生饅

碧巖前也碧巖後

見正覺山柱洪嶽

着々分明乾與坤

郢中工匠沒留痕

由來百則沒商量

不許長安吟路傍

大正二年十月五日印刷

大正二年十月廿五日發行

碧巖集講義第三卷與付

定價金一圓五十錢郵稅十二錢



編纂者

原子廣宣

發行者

東京巢鴨町二丁目三十五番地
原子廣宣

印刷者

東京本所區番場町四番地
守岡功

印刷所

東京本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社分工場

發行所

東京巢鴨町二ノ三五番
振替東京三二二番

無我山房

山邊習學著

佛弟子傳

全一冊 クロース綴
金一圓五十錢
郵税十二錢

佛弟子傳は先人未著手の大事業である。其事蹟は宏大なる東西佛典の各所に埋没してゐて人をして容易に手を下さしめなかつた。著者は之が爲に滿五年の星霜を重ねて苦心に討尋し敬虔に翻譯して、こゝに佛教の経典の十六羅漢の詳傳に加へて尙ほ十數人の詳傳あり、釋尊を中心として是等偉大なる宗教的人格が如何に當時の活社會に飛躍して加へたか、如何に嚴密なる修道を續けて各自獨特の大人格を發揮しつゝ、如何に當時の社會に近づくか、現代の宗教界を覺醒することが多いであらう。智慧第一の舍利弗、神通第一の目連、神通第一の大迦葉、觀法第一の富樓那、密行第一の羅睺羅、多聞第一の阿難、獅子吼第一の實頭、能化神通の周利、此迦葉等を初め、慘澹たる殉教に仆れし者、花の如き住人を蹴つて道に入りし者、殊に微岸偉大なる提婆が堂々として大聖釋尊に反抗せる活劇は、人を手汗を握らしむる可なり。而して是等全體が大聖釋尊の人格が堂々として大聖釋尊に反抗せる活劇は、人を手汗を握らしむる可なり。而して是再び現代に蘇つた。誠の内容である。正に埋没せんとせし三千年前の聖者の一群は、著者の靈腕を通し

清澤之精神主義 郵税四十錢 赤沼善七里老師語錄 郵税六十錢

曉鳥敏佛教入門 郵税四十錢 多田鼎親鸞聖人 郵税八十錢

佐々木樵秀存語錄 郵税六十錢 慈明部略文類講義 近刊

無我山房

二版 釋尊の生涯及其教理

リス、デ井ス博士著 赤沼智善譯

全一冊 クロース綴
金一圓七十錢
郵税十二錢

「警世」評して曰く。本書は彼の有名なるデキス博士の原著の最新版を譯したるものにして、且つ其新著「初期佛教」を譯して附録とせり。原著書は梵語聖典より尙古き南方佛教の巴利語聖典を根據として編述せる最古最眞の釋尊傳にして、近時出版の釋尊傳は大抵此書の恩恵を蒙らざるはなく、既に廿餘版を重ねしを見るも本書の如何に價値あるかを知らるに足る。附録「初期佛教」は釋尊當時の宗教、習慣、社會の風俗言語を録したる時代史にして、本篇と對照して得る所少なからず。我等は斯る高著を譯出したる譯者の勞を多とす。苟も原始的釋尊の正傳を採り、最古佛典に現はれたる佛教の理の一斑を知り、且つ釋尊當時の時代を會得せんとする者は三讀を要す。

多田鼎佛涅槃篇 郵税八十錢 佐々木樵親鸞聖人傳 郵税五十錢

柏原禿香樹院語錄 郵税七十錢 白隱師遠羅天釜 郵税十五錢

浩々洞親鸞御傳鈔講話 郵税七十錢 龍和造田偉人の言行 郵税六十錢

無我山房

浩浩洞編

二版

佛教辭典

全一册
特製二圓五十錢
并製金二圓
郵稅十二錢

佛教本典の要語各宗教義の術語は勿論、國史國文等を始めとして苟も佛教に關する所のものは、梵漢和に亘りて殆んど之を網羅し盡したり、その解釋の引縮まりて簡明平易なること、世間讀書家の一日も座右に缺く可からざることは、佛教界の『言海』として宗教家、教育家、その他各方面の學者の推獎する所となれり。敢て一般讀書家に謹告す。

佐々木 救濟觀 金廿五錢
月樵 郵稅四錢

曉島敏吾人の宗教 金三十錢
郵稅四錢

浩浩 清澤先生の信念 金五錢
編 郵稅貳錢

安藤一染香錄 金七十錢
州 郵稅八錢

赤沼 教行信證講義 四圓五十錢
山邊 郵稅二十錢

柏原三帖和讚講義 近刊
祐義

無我山房

終